

校注附例「荻生徂徠『譯文筌蹄』」(二)

坂本具償<sup>\*1</sup>

財木美樹<sup>\*2</sup>

An Annotated Modern Japanese Translation of "Yakubun-Sentei" by Ogyu Sorai (2)

Tomotsugu SAKAMOTO

Miki ZAIKI

本稿は、前稿の続きである。荻生徂徠『譯文筌蹄』のウの部、エの部、オの部、カの部に対して本文を平仮名、現代仮名遣いに直し、句読点を施したテキストを作成し、引用する例の用例を附したものである。『譯文筌蹄』はいわゆる同訓異字について解説したもので名著である。原本は稀覯本に属し、影印本も昨今では入手しにくい。また本文には句読点がなく、片仮名で書かれおり、今の人にとっては読みにくく、理解するのもむづかしい。したがって本稿を参考としてこの名著を少しでも多くの方に読んでいただければ幸いである。今後、キの部以降も継続して掲載する予定である。

キーワード

同訓異字 小泉秀之助 吉有鄰

---

\*1香川高等専門学校名誉教授

\*2比治山大学非常勤講師

## 校注附例 「荻生徂徠『譯文筌蹄』」(二)

坂本具償  
財木美樹

### はじめに

荻生徂徠『譯文筌蹄』はいわゆる同訓異字について解説したものである。しかし原本は稀覯本に属し、影印本も昨今では入手しにくい。また本文には句読点がなく、片仮名で書かれおり、今の人のとっては読みにくく、理解するのもむづかしい。そこで本文を平仮名、現代仮名遣いに直し、句読点を施したテキストを作成し、引用する例の用例を附した。日本語は語彙が少ないので、同訓異字が多く、語彙の選択をあやまる場合が多々ある。その同訓異字に関する名著といわれるのが荻生徂徠『譯文筌蹄』と伊藤東涯『操觚字訣』である。しかしそのような名著があまり知られず、読まれていないことが残念であり、言葉や文章に興味を有する人にすこしでも知ってもらい、文章を作成執筆するのに参考としてもらいたく思い、本稿を作成した。今回は「うの部」から「かの部」までの部分を収める。今年度は昨今の事情により一部の図書館や大学図書館が閲覧利用できない状態が続き、調べきれないところもあったが、事情が改善されれば続けて増補を施したい。

### 版本

- ・『譯文筌蹄初編』六卷 正徳四年(一七一四)正月・正徳五年(一七一五)寶暦二年(一七五三)再版
- ・『譯文筌蹄後編』三卷 寛政八年(一七九六)九月
- ・『譯文筌蹄初編後編』 文政八年(一八二五)再版
- 明治九年(一八七六)九月再版

### 影印本

- ・『荻生徂徠全集』第二卷言語篇 みすず書房 一九七四・八
- ・『荻生徂徠全集』第五卷 河出書房新社 一九七七・一
- ・『漢語文典叢書』第三卷 汲古書院 一九八九・三

### 活字本

- ・『譯文筌蹄附東涯「用字格」』 小泉秀之助 須原屋書店 明治四十一年(一九〇八)一月

### 影印本

- ・名著普及會 昭和六十二年(一九八七)
- \*臺灣にも影印本あり

### 凡例

- 一、本稿は荻生徂徠『譯文筌蹄』のウの部、エの部、オの部、カの部に対して校註附例を施したものである。
- 一、本稿は荻生徂徠『譯文筌蹄附東涯「用字格」』須原屋書店を底本とし、刊本を用いて校正する。
- 一、底本には句読点がなく、片仮名表記であるが、いま句読点を切り、片仮名を平仮名にあらため、ルビを増補する。
- 一、引用文は返り点、送り仮名を附しているが、書き下し文に改める。
- 一、引用文、術語には「」を施す。
- 一、語の左右にルビがあるものがあるが、左訓は語の下に「」を附して下にいれる。
- 一、註は原文に引く引用文、術語に対してその用例を挙げたが、用例はかならずしも初出のものではなく、代表的なものでもなく、また未詳なもの、見当違いなもの、取捨不適なものなどがあると思われるが、本文を理解する上で参考とし

てもらえれば幸いである。

- 一、註に引く用例の該当する部分に傍線を引く。
- 一、一部の古語は原文のニュアンスを残すため、簡単な訳語を「」に附して下に  
入れる。

- 一、底本の順序は発音順と称するが、かならずしも五十音順になっていない。ただ  
底本との整合性を保つため項目の順序は底本のままとし、「目次兼索引」を作成  
して冒頭に附す。

- 一、見出し語の下に「(一、三十五号表)」、「(後二、十七号裏)」などであるのは、  
刊本の巻数と葉数、および裏か表をあらわす。また「後」は後編をあらわす。

目次兼索引 (下記の数字は本文の順序である。本文はかならずしも五十音順になっ

ていないが、入れ替えると原本との整合性がなくなるので、そのままとし本索  
引を作成した。見出し語も原本の仮名のままとしたので、「おふ」「おほいなり」  
などの順序に注意されたい)

うの部

○うう	餒饑餓	18
○うかがふ	窺闕問齋伺候闕	20
○うかぶ	浮汎漂漾	4
○うく	受承稟歆饗	19
○うごく	動搖撼蕩	1
○うたがふ	疑貳猜訝怪	11
○うたふ	歌謳謠唱倡	15
○うたふ	吟哦咏嘯呻	16
○うつ	打拍擊撲擗討毆琢伐搥搨搏拊拊拊	13
○うつくし	美麗好妍娟變艷姣媵妖靡曼姝	2

○うつたふ	訟訴	17
-------	----	----

○うつる	移遷徙映寫摹臨描抄謄	3
------	------------	---

○うばふ	奪篡褫	12
------	-----	----

○うまし	甘美旨甜熟老	6
------	--------	---

○うやまふ	敬慎謹欽寅恪恭肅肅莊嚴儼	10
-------	--------------	----

○うらむ	怨恨冤啣慳憾望	9
------	---------	---

○うらやむ	羨歆艷	8
-------	-----	---

○うる	賣沽售	14
-----	-----	----

○うるほふ	涇潤滋澤沾露濡溽溽	5
-------	-----------	---

○うれふ	愁憂患悶恤愀忡慘哀悲憐矜	7
------	--------------	---

おの部

○おくる	餽遺歸貽贈饋餼餉餽問送贈	16
------	--------------	----

○おこたる	懈惰怠慢弛倦勑	7
-------	---------	---

○おこる	奢驕侈倨傲泰夸誇矜	6
------	-----------	---

○おす	推盪押壓按切排擠抑摩	14
-----	------------	----

○おそる	恐懼畏怖怕惶惕慄慄懼悚悚怯怯怯怖嚇	8
------	-------------------	---

○おどろく	驚駭愕脅劫	9
-------	-------	---

○おふ	追逐趁趕從	13
-----	-------	----

○おふ	荷擔負戴任	15
-----	-------	----

○おほいなり	大太鉅巨洪碩冢浩不恢宏闊	3
--------	--------------	---

○おほし	衆多饒夥	1
------	------	---

○おもふ	思懷憶念想意惟以爲謂欲願	5
------	--------------	---

○おもむく	赴趣趨歸旨	12
-------	-------	----

○おもんばかる	慮臆億怨	11
---------	------	----

○おゆ	老耆耄耄衰	4
-----	-------	---

○おろか	愚蚩伺癡蠢懸駭魯頑驚鈍拙怯懦辱	10
○おろそか	疎疏簡澗	2
かの部		
○かかぐ	挑揭褻擗	17
○かがむ	屈僂矯揉撓反	9
○かく	欠缺闕虧騫玷	2
○かく	翱翔翥	15
○かく	搔抓爬撓攪昇	16
○かく	懸掛繫搭羅維羈嬰鈎權	19
○かくる	隱藏潛匿韜度竄秘	4
○かさなる	重疊層申累沓襲複覆襲	7
○かざる	飾貴文粧裝	3
○かたし	剛堅固硬牢確鞣鞏強勁難叵	1
○かつ	勝克捷戡贏	13
○かなふ	恹叶協合諧適稱副	5
○かぬ	兼該攝包	8
○かふ	貿買沽市糴	18
○かふ	飼餵畜養牧哺育參頤鞠孳餌	21
○かへりみる	顧省眄	22
○かへる	歸回還旋廻反返復	14
○かまびすし	喧嘩囁聒聾聵	20
○からし	辛辣苛荼	12
○かろし	輕輪佻	10
○かわく	燥乾曠晞枯槁死涸	11
○かわる	變化渝換易貿博更代替兌改悛	6

『譯文全蹄』

うの部

1〇うく

動 搖 撼 蕩 (一、五号裏)

【動】「うごく」といえる訓、更に移易すべからず。靜の反なり。義極めて廣し。「動止」①は人物日月風氣までも通用して、動くときやむとの反對なり。書束語には起居のかえ辭になりて、御息災なりやと問うことを、「起居安穩」とも、「動止安穩」ともいう。「動息」②は人物に通じて、動くときやすむとの反對なり。「動植」③は、人物を動物とし、艸木を植物とす。陶詩に「日入りて羣動息す」④というも、動物を指せり。月令に「水泉動く」⑤といい、國語に「土膏其れ動く」⑥というは、微動する始めをいう。地震を「地動」⑦といえるは、動くの甚しきをいう。漢書に「嚴延年の治は動き、黄次公の治は靜かなり」⑧といえるは、治めのさわがしきをいう。皆義廣きゆえ、用處多端なり。されどもうごくというにて明らかなり。又「動輒」⑨というは、すわともすればという意なり。「曾子動けば必ず身に求む」⑩と、是れなり。俗語の「動不動」は、ぜひにとりいう意なり。これも「動輒」より轉り來れり。正韻に「うごくは上聲、うごかすは去聲」といへども、正字通にその誤りを辨せり⑪。自然、使然に拘わらず、上去兩音なり。

- ① 『莊子』天地「其動止也、其死生也、其廢起也、此又非其所以也」。
- ② 王維『戲贈張五弟諱三首』三「我家南山下、動息自遺身」。
- ③ 薛道衡『隋高祖文皇帝頌』「道洽幽顯、仁霑動植」。
- ④ 陶潛『飲酒二十首』七「日入羣動息、歸鳥趨林鳴」。
- ⑤ 『禮記』月令「仲冬之月、日在斗、昏東辟中、旦軫中。(中略)芸始生、荔

挺出、蚯蚓結、麋角解、水泉動。日短至、則伐木、取竹箭。

⑥『國語』周語上「自今至于初吉、陽氣俱蒸、土膏其動」。

⑦『漢書』元帝紀第九「郡國被地動災甚者、無出租賦」。

⑧未詳。

⑨韓愈『進學解』「跋前疐後、動輒得咎」。

⑩『論語』學而「曾子曰、吾日三省吾身」、集注「尹氏曰、曾子守約、故動必求諸身」。

⑪『正字通』子集下「舊註沿正韻韻書、物自動則上聲、物不動而我動之則去聲、非也」。

【搖】「ゆるぐ」「ゆるがす」「ふるめく」と譯す。靜の字と對せず、定の字、固の字と反對なり。動の字より義狹し。「羣心搖」というは、衆の心の定まらぬことなり。

「中心搖搖」①は心の落ちつかぬなり。「齒搖」②「山岳搖」はゆるぐなり。「目搖」③は目のまうことなり。「波搖」④「柳搖」⑤「舟搖」⑥「櫓搖」⑦、皆ふるめくなり。首の飾りに「步搖」⑧というものあり。歩むときはふるめくとするゆるえ名づく。

又「消搖」⑨は「逍遙」と同じ。「招搖」は星の名⑩、又旗の名⑪。「扶搖」⑫は暴風なり。皆聲を用いて、義を用いず。

①『詩經』王風・黍離「行邁靡靡、中心搖搖」、正義「然則搖搖是心憂無所附著之意」。

②蘇軾『春菜』「明年投効徑須歸、莫待齒搖并髮脫」。

③劉勰『劉子新論』類感第五十「彈角則目搖、鼓舟而波湧」。

④李白『東魯門泛舟二首』一「日落沙明天倒開、波搖石動水繁迴」。

⑤朱放『江上送別』「浦邊新見柳搖時、北客相逢只自悲」。

⑥陶淵明『歸去來辭』「舟搖搖以輕颺、風飄飄而吹衣」。

⑦杜甫『送李八秘書赴杜相公幕』「石出倒聽楓葉下、櫓搖背指菊花開」。

⑧『釋名』釋首飾「步搖上有垂珠、步則搖也」。

⑨『禮記』檀弓上「孔子蚤作、負手曳杖、消搖於門」。

司馬相如『上林賦』(『文選』卷八)「道盡途殫、迴車而還、消搖乎襄羊、降集乎北紘」、注「司馬彪曰、消搖、逍遙也」。

⑩『禮記』曲禮上「招搖在上、急繕其怒」、鄭注「畫招搖星於旌旗上、以起居堅勁軍之威怒、象天帝也。招搖星在北斗杓端、主指者」。

⑪張衡『西京賦』(『文選』卷二)「建玄弋、樹招搖」、薛注「招搖、第九星、名為盾、今國簿中畫之於旗、建樹之以前驅」。

⑫『莊子』逍遙遊「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里、去以六月息者也」。

『爾雅』釋天「扶搖、謂之森」、注「暴風從下上」。

【撼】「ゆるがす」と譯す。使然に限る。「大風、屋を撼す」「波濤、山を撼す」など。又詩經「我が幌を感かすこと無れ」①というは、古字通用して、實は撼の字なり。

①『詩經』召南・野有死麕「舒而脫脫兮、無感我幌兮、無使彫也吠」。

【蕩】搖と同義なり。「ゆるぐ」「ゆるがす」と譯す。左傳に「心蕩く」①、詩に「舟を蕩す」②「漿を蕩す」③「波蕩く」④「搖蕩」⑤「飄蕩」⑥「震蕩」⑦「鼓蕩」⑧、皆うごかすなり。通用して「盪」に作る。

①『左傳』莊公四年「四年、春、王三月、楚武王荆尸、授師子焉、以伐隨。將齊、入告夫人鄧曼曰、余心蕩」。

②『詩經』に「蕩舟」という語は見あたらない。

『韓非子』外儲說左上「蔡女爲桓公妻、桓公與之乘舟、夫人蕩舟、桓公大懼」。

③王禹偁『月波樓詠懷』「舟子斜蕩漿、牧童倒騎牛」。

④『後漢書』陳囂公孫述列傳第二「方今四海波蕩、匹夫橫議」。

⑤司馬相如『上林賦』(『文選』卷八)「隨風澹淡、與波搖蕩」。

⑥杜甫『故著作郎貶台州司戶榮陽鄭公虔』「他日訪江樓、含悽述飄蕩」。

- ⑦『左傳』襄公二十六年「楚師輕窳，易震蕩也」。  
 ⑧李白『明堂賦』「雷霆之所鼓蕩，星門之所伉佐」。

2〇うくし

美麗 好妍 娟變 艷 姣 姘 妖 靡 曼 姝 (二、初号表)

【美】「うるはし」と訓ず、「よし」と訓ず。「みごと」と譯す、「うつくし」と譯す。

惡の反對なり、醜の反對なり。但し元來うましという字なるゆえ、惡に對するときも、醜に對するときも、愛すべく賞すべき意あるなり。「美人」①は女に限る。才徳に況えていうことあり。「美丈夫」②「姣美」③「美艷」④「宋朝が美」⑤「子都が美」⑥など、皆形のうつくしきなり。「美を有商に專にす」⑦「十六族、世よ其の美を濟ふ」⑧「其の美を掠む」⑨「其の美を將順す」⑩「主の美を揚ぐ」⑪「丘壑の美」⑫「風俗美なり」⑬、皆才徳事業のすぐれてよきをいう。「雁を食て美なり」⑭「芹子を美しとす」⑮「香美」⑯「肥美」⑰、皆味のうまさなり。「美花」⑱「美玉」⑲、皆みごとにうつきしきなり。惡に對しても善より重く、醜に對しても好より重き字なり。又禮記の少儀に儀の字と通す⑳。

- ①『詩經』邶風・簡兮「云誰之思，西方美人」、鄭箋「思周室之賢者」。  
 『六韜』文伐「厚賂珠玉、娛以美人」。  
 ②『漢書』張陳王周傳第十「渡河、船人見其美丈夫、獨行」。  
 ③『荀子』非相「古者桀紂長巨姣美、天下之傑也」。  
 ④張衡『七辯』『藝文類聚』卷五十七引「淑性窈窕、秀色美豔」。  
 ⑤『論語』雍也「子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎、免於今之世矣」。  
 ⑥『詩經』鄭風・山有扶蘇「不見子都、乃見狂且」、毛傳「子都、世之美好者也」。  
 ⑦『書經』說命下「爾尚明保予、罔俾阿衡專美有商」。  
 ⑧『左傳』文公十八年「此十六族也、世濟其美、不隕其名」。

⑨『左傳』昭公十四年「邢侯專殺、其罪一也、已惡而掠美爲昏」。

⑩『孝經』事君章「將順其美、匡救其惡、故上下能相親也」。

⑪『荀子』不苟「君子崇人之德、揚人之美、非諂諛也」。

⑫謝靈運『述祖德詩』『文選』卷十九「遺情捨塵物、貞觀丘壑美」。

⑬『漢書』武帝紀第六「詔曰、公卿大夫、所使總方略、壹統類、廣教化、美風俗也」。

⑭『後漢書』王充王符仲長統列傳第三十九「規臥不迎、既入而問、卿前在郡食鴈美乎」。

⑮嵇康『與山巨源絕交書』『文選』卷四十三「野人有快炙背而美芹子者」。

⑯『韓非子』揚權第八「夫香美脆味、厚酒肥肉、甘口而疾形、曼理皓齒、說情而損精」。

⑰『戰國策』秦策一「田肥美、民殷富」。

⑱杜甫『奉陪鄭駙馬韋曲二首』二「美花多映竹、好鳥不歸山」。

⑲『論語』子罕「子貢曰、有美玉於斯、韞匱而藏諸、求善賈而沽諸。子曰、沽之哉、沽之哉。我待賈者也」。

⑳『禮記』少儀「言語之美、穆穆皇皇、朝廷之美、濟濟翔翔、祭祀之美、齊齊皇皇、車馬之美、匪匪翼翼、鸞和之美、肅肅雍雍」、鄭注「美皆當爲儀、字之誤也」。

【麗】「うるはし」と訓ず。美の字に比すれば、専ら形色に屬する字にて、だてなる意あり。「曼麗」①「姣麗」②「姘麗」③「艷麗」④「妍麗」⑤「靡麗」⑥「華麗」⑦「佳麗」⑧などと連用す。「組麗」⑨は織物の織りのみごととなるなり。「織麗」⑩も糸ぼそにみごととなるなり。「江山麗し」⑪「花木麗し」⑫など皆用いる。「麗人」⑬は美人なり。だてものというが如し。

- ①『後漢書』文苑列傳第七十上「曼麗之容、不悅於目、鄭衛之聲、不過於耳」。  
 ②『楚辭』大招「滂心焯態、姣麗施只」。

- ③張衡『思玄賦』『文選』卷十五「既姱麗而鮮雙兮，非是時之攸珍」。
- ④『南史』列傳第三后妃下張貴妃「采其尤豔麗者，以爲曲調，被以新聲」。
- ⑤李充『嘲友人』『藝文類聚』卷二十五引「目想妍麗姿，耳存清媚音」。
- ⑥『新語』無爲第四「秦始皇驕奢靡麗，好作高臺樹廣宮室」。
- ⑦『三國志』魏書・任城陳蕭王傳第十九「性簡易，不治威儀。輿馬服飾，不尚華麗」。
- ⑧『戰國策』中山策「趙天下之善爲音，佳麗人之所出也」。
- ⑨『揚子法言』吾子「或曰，霧縠之組麗，曰，女工之蠹矣」。
- ⑩張華『輕薄篇』「被服極纖麗，肴膳盡柔嘉」。
- ⑪杜甫『宿鑿石浦』「草宿賓從勞，仲春江山麗」。
- ⑫寇準『送轉運梅學士巡邊郡四首』其四「夙駕巡邊徼，歸程隔亂山。長安花木麗，春死待君還」。
- ⑬鮑照『蕪城賦』『文選』卷十二「東都妙姬，南國麗人」。
- 【好】ひろき字なり。前に見える。醜の反対になるとき、「かほよし」と訓ずれども、愛すべき意、だてなる意なし。
- 【妍】「かほよし」と訓ず。醜の反対なり。「うつくし」と訓ず。好美に媚る意を帯びるゆえ、大氏美の字に近し。才德事業に用いず。「妖妍」①「妍麗」②「妍美」③「妍好」④「妍を争ふ」⑤「態妍なり」⑥などは、顔色態度にていい、「春妍」⑦「秋妍」⑧「清妍」⑨「和妍」⑩「鮮妍」⑪「暄妍」⑫などは、景物の上にていうなり。
- ①『越絶書』越絶外傳計倪第十一「乃此禍晉之驪姬，亡周之褒姒，盡妖妍於圖畫，極凶悖於人理」。
- ②『洛陽花木記』「予少時聞洛陽花卉之盛，甲乎天下，嘗恨未能盡觀其繁盛妍麗，竊有憾焉」。
- ③唐玄奘『大唐西域記』卷三・迦濕彌羅國「容貌妍美，情性詭詐」。

- ④李白『去婦詞』「物情惡衰賤，新寵方妍好」。
- ⑤韓愈『送李愿歸盤谷序』「妬寵而負恃，爭妍而取憐」。
- ⑥劉遵『應令詠舞』「舉腕嫌衫重，迴腰覺態妍」。
- ⑦白居易『江亭翫春』「江亭乘曉闌衆芳，春妍景麗草樹光」。
- ⑧陸游『薄荷』「薄荷花開蝶翅翻，風枝露葉弄秋妍」。
- ⑨韓愈『奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠・月池』「寒池月下明，新月池邊曲。若不妬清妍，卻成相映燭」。
- ⑩應瑒『神女賦』『太平御覽』人事部二十二引「紅顏睡而和妍，時調聲以笑語」。
- ⑪元稹『寺院新竹』「佳色有鮮妍，修莖無擁腫」。
- ⑫鮑照『采桑行』「是節最暄妍，佳服又新爍」。
- 【娟】「嬋娟」は美好の貌①。女色より景色に移し用いる形容字なり。「連娟」②は舞う貌，又「纖弱なり」②と注す。舞うすがたのしなやかなるをいうなり。「聯娟」③は眉の貌なり。又「微曲の貌」③と注せり。眉の貌のたわめるをいうなり。又杜詩に「娟娟蝴蝶，閒幔を過ぐ」④、又「風，翠篠に含んで娟娟として靜かなり」⑤、又孟郊が詩に「菱行威嬋娟」⑥、何れもしなやかなる意あり。
- ①『正字通』丑集下「嬋娟，美好貌」。
- ②『漢書』外戚傳第六十七上「悼李夫人賦」「美連娟以脩嫫兮，命嫫絶而不長」，注「師古曰，連娟，纖弱也」。
- ③宋玉『神女賦』『文選』卷十九「眉聯娟以蛾揚兮，朱脣的其若丹」，李注「聯娟，微曲貌」。
- ④杜甫『小寒食舟中作』「娟娟戲蝶過閑幔，片片輕鷗下急湍」。
- ⑤杜甫『狂夫』「風含翠篠娟娟靜，雨裊紅蕖冉冉香」。
- ⑥孟郊『夜憂』「蒿蔓轉驕弄，菱行減嬋娟」。

【變】美好の貌①。「順從なり」②、「慕なり」③と注せり。この意を合わせて用いるべし。詩經に「婉たり變たり」④とあるより、「婉變」⑤と連ね用いる。又「變たる季女を思ふ」⑥。又「變童」⑦は男色なり。

①『正字通』丑集下「變、龍眷切、音戀、婉變、美好貌」。

②『正字通』丑集下「變、順從也」。

③『說文』「變、慕也、从女辵聲」。

④『詩經』齊風・甫田「婉兮變兮、總角卅兮、未幾見兮、突而弁兮」。

⑤陳子昂『唐故袁州參軍李府君妻張氏墓誌銘』「夫其窈窕之秀、婉變之姿、貞節峻於寒鬆、韶儀麗於溫玉」。

⑥『詩經』小雅・甫田之什・車輦「閒關車之輦兮、思變季女逝兮」。

⑦『北齊書』卷五廢帝紀「散愁自少以來、不登變童之牀、不入季女之室」。

宋簡文帝『變童』『玉臺新詠』卷七「變童嬌麗質、踐重復超瑕」。

【艷】艷、同字なり。倭俗に「やさし」とよませ、又歌書に「えんなる」という詞あり、字義と遠かるべし。又「つや」とよむ説あり、近し。「容色豐滿なり」①と注し、又「光彩なり」②と注す。美色の發揚する意ある字なるゆえ、美麗の人の心目を奪うようなるに用いるべし。左傳に「美にして艶なり」③といえり。「越艶」④は越の美女のいうことなり。「荆艶」⑤は楚歌なり。「華艶」⑥「狂艶」⑦「妖艶」⑧「間艶」⑨「嬌艶」⑩、皆女色にいう。「素艶」⑪「紅艶」⑫は花にいう。「艶妻」⑬は、詩經に褒姒をいえり。又樂曲にあり。後世は鹽の字を用いる⑭、聲通ずればなり。「三臺鹽」「合歡鹽」、是れなり。

①『說文』「艷、好而長也、从豐、豐、大也。益聲。春秋傳曰、美而艷、繫傳「容色豐滿也」。

②『正韻』「艷、光彩貌」。

③『左傳』文公十六年「公子鮑美而艷、襄夫人欲通之、而不可、乃助之施」。

④王昌齡『采蓮曲』「吳姬越艷楚王妃、爭弄蓮舟水溼衣」。

⑤左思『吳都賦』『文選』卷五「荆艷楚舞、吳愉越吟、翕習容裔、靡靡愔愔、劉注「艷、楚歌也」。

⑥『晉書』列傳第六衛恆「擗華艷於紈素、爲學藝之範先」。

⑦孟郊『邀人賞薔薇花』「醉紅不自力、狂艷如素扶」。

⑧盧思道『美女篇』「京洛多妖艷、餘香愛物華」。

⑨祖詠『古意』「閑艷絕世姿、令人氣力微」。

⑩王禕『雜詩』「窈窕青樓人、二八多嬌艷」。

⑪杜甫『丁香』「細葉帶浮毛、疎花披素艷」。

⑫宋之問『有所思』「園桃綻紅艷、郊桑柔綠滋、坐看長夏晚、秋月生羅帷」。

⑬『詩經』小雅・節南山之什・十月之交「娶子內史、蹶維趣馬、鬪楛維師氏、艷妻煽方處。毛傳「艷妻、褒姒、美色曰艷」。

⑭『通雅』卷二十九・樂曲「鹽即曲艷也。之丹鉛餘錄曰、鹽、曲之別名也。智按、禮曰、諸鹽、諸鹽與艷同、謂如吟行曲引之類、正是曲前之艷」。

【姣】姣と同じ。「かほよし」とよむ。長大の意を兼ねる。史記に「長姣の美人」①といえり。詩經に「佼人僚たり」②といは女色なり。月令に「壯姣を養ふ」③といは、男の器量のよきをいう。又後漢書に劉盆子がことを、光武の「鐵中錚錚、庸中姣姣」といえる④は、平人の中にてはすぐれたるものなりという意なり。これ皆男子をいう。又桀紂がことを「長大美姣」⑤といえり。皆長大の意を含むゆえ、用いよう前後の諸字に異なり。

①『史記』蘇秦列傳第九「秦成、則高臺樹、美宮室、聽箏瑟之音、前有樓闕軒

轅、後有長姣美人、國被秦患而不與其憂」。

②『詩經』陳風・月出一月出照兮、佼人僚兮、舒天紹兮、勞心慘兮」。

③『禮記』月令「天子居明堂大廟、乘朱路、駕赤駟、載赤旂、衣朱衣、服赤玉、食菽與雞、其器高以粗。養壯姣」。

④『後漢書』劉玄劉盆子列傳第一「帝曰、卿所謂鐵中錚錚、庸中姣姣者也」。



⑤『莊子』盜跖「凡天下有三德、生而長大、美好無雙、少長貴賤、見而皆悅之」。

【**姘**】美好の義なり。楚辭の字なり①。「賢姘」②は巫をほむる詞なり。

①『楚辭』離騷「苟余情其信姘以練要兮、長顛頰亦何傷」、「汝何博書而好脩兮、紛獨有比姘節」。

②『楚辭』九歌・東君「鳴籟兮吹竽、思靈保兮賢姘、翱飛兮翠曾、展詩兮會舞」。

【**妖**】巧・媚・艶の義を兼ねる。女色又は花に用いる。妖怪の義とは各別のことなり。而るに強いて字義を解く人の曰く、「妖は女色のばけけしきことなり」といふ①、笑う可し。

①未詳。

【**靡**】「靡曼」①「妖靡」②「妙靡」③「綺靡」④「猗靡」⑤「靡麗」⑥「閒靡」⑦、皆女色の美麗なることなり。又「封靡」⑧「汰靡」⑨「侈靡」⑩はおこりなり。又「嫚靡」⑪は褻嫚なることなり。

①『列子』周穆王第三「簡鄭衛之處子、娥媚靡曼者、施芳澤正娥眉」。

②『列子』湯問第五「妖靡盈庭、忠良滿朝」。

③王融『三月三日曲水詩序』『文選』卷四十六「發參差於王子、傳妙靡於帝江」。

④陸機『文賦』『文選』卷十七「詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮」。

⑤潘岳『西征賦』『文選』卷十「較面朝之煥炳、次後庭之猗靡」、注「向日、猗靡、美貌」。

⑥『新語』無爲第四「秦始皇驕奢靡麗、好作高臺榭廣宮室」。

⑦傅毅『舞賦』『文選』卷十七「綽約閑靡、機迅體輕」。

⑧『詩經』周頌・烈文「無封靡于爾邦、維王其崇之」、集傳「封、專利以自封殖也、靡、汰侈也」。

⑨『晉江縣志』卷四十三・人物志宦迹五「陳龍可、字蛩潛。天啓壬戌進士、選南京戶部主事、權淮安鈔關、冗役浮例、革汰靡遺」。

⑩『戰國策』楚策四「專淫逸侈靡、不顧國政、郢都必危矣」。

⑪昭明太子『七契』『文苑英華』三百五十一「與金石而鏗鏘、共絲竹而曼靡」。

【**曼**】「靡曼」①「嫚曼」など通用す。容色柔澤なるをいう。

①『墨子』辭過第六「必厚作斂於百姓、暴奪民衣食之財、以爲錦繡文采靡曼之衣」。

【**姝**】美色なり①。又「吳姝」②「越姝」③「名姝」④「陌上の姝」⑤、皆美女なり。

①『詩經』邶風・靜女「靜女美姝、俟我於城隅、毛傳「姝、美色也」」。

②陳後主『三婦艷詞』「小婦獨無事、淇上待吳姝」。

③陳陶『泉州刺桐花詠兼呈趙使君』「猗猗小豔交通衢、晴日薰風笑越姝」。

④『舊唐書』元載傳「名姝異樂資負、不可勝計」。

⑤『樂府詩集』卷七十三雜曲歌辭・茱萸女「山陰柳家女、九日采茱萸、復得東鄰伴、雙爲陌上姝」。

3〇うつる

移 遷 徙 映 寫 摹 臨 描 抄 謄 (三、十四号表)

【**移**】【**遷**】【**徙**】三字皆「うつす」「うつる」。通用して義同じ。處をわきへかえることなり。遷の字を下より高きへうつるといふ説あれども、「左遷」①「遷謫」②もあり、かかわらぬことなり。役替をすることに「九遷」③というは、よき役へひたものうつることにはいえるは、故事によれり、字義に非ず。移の字、「文移」④として官府の文書をいう。多くは官府の互いに用事を告げる書をいう。「疾を移す」⑤という

は、謝病と同じことにて、病氣を官長に告げるなり。「量移」⑥は遠謫の人、罪の品少しかるくなりて、近州へ官を移すをいう。又「徙倚」⑦は、たたずみ立ちやすらうことなり。「倚」はよりかかるなり。久しく立ちやすらい、あなたこなたと足のたてどをかえる意なり。

①『漢書』張周趙任申屠傳第十二「吾極知其左遷、然吾私憂趙、今非公無可者」、注「師古曰、是時尊右而卑左、故謂貶秩位爲左遷」。

②蘇頌『曉發興州入陳平路』「舊史饒遷謫、恆情厭苦辛。寧知報恩者、天子一忠臣」。

③韓愈『上張僕射書』「苟如是、雖日受千金之賜、一歲九遷其官」。

④『後漢書』光武帝紀第一上「於是置僚屬、作文移從事司祭、一如舊章」。

⑤『漢書』公孫弘卜式兒寬傳第二十八「弘乃移病免歸」、注「師古曰、移病、謂移書言病也。一曰、以病移居」。

『北史』列傳第十九高德正「德正甚憂懼、乃移疾、屏居佛寺、兼學坐禪、爲退身之計」。

⑥『舊唐書』玄宗紀「上大赦天下、左降官量移近處」。

⑦『楚辭』遠遊「步徙倚而遙思兮、怳愉悅而永懷」。

【映】「うつる」とよむことはなけれども、月の水にうつり、光のうつり、影のうつるなどは、皆この字を用いるべし。光のうつるう意なり。時のたつことを「晷移」①というは又別なり。

①張衡『西京賦』『文選』卷二「白日未及移其晷、已彌其什七八」。この一文、前項「移」の錯簡か。

【寫】「うつす」とよむ。「うつる」とよむことなし。器の中のものを別の器へあけることをもいう①。尤も文字を寫すことなり。俗語には、字をかくことをいう。書することなり。「繕寫」②は本をしたてて寫すことなり。又「我が心寫ぬ」③「吾

が愁い寫ぬ」④「心腹を輸寫す」⑤、皆心の内をまけ出す「さらけ出す」ことなり。器を寫すと同意なり。又史記に「其の宮室を寫放ふ」⑥、國語に「良金を以て范蠡の状を寫す」⑦、古語にて和語に協えり。中華後代の語には摹の字を用いる。

①『禮記』曲禮上「御食於君、君賜餘、器之漑者不寫。其餘皆寫」、鄭注「寫者、傳器中、乃食之也」。

②劉向『管氏書錄』「殺豈而書可繕寫也」。

③『詩經』小雅・南有嘉魚之什・蓼蕭「既見君子、我心寫兮、燕笑語兮、是以有譽處兮」。

④『詩經』邶風・泉水「駕言出遊、以寫吾憂」。

⑤『漢書』趙尹韓張兩王傳第四十六「行之發於至誠、吏見者皆輸寫心腹、無所隱匿、咸願爲用、僵仆無所避」。

⑥『史記』秦始皇本紀第六「秦每破諸侯、寫放其宮室、作之咸陽北阪上、南臨渭、自雍門以東至涇渭、殿屋複道周閣相屬」。

⑦『國語』越語下「王命工以良金寫范蠡之狀、而朝禮之」、注「以善金鑄其形、蓋蠡浮五湖莫其所終也」。

【摹】なににも物の形をうつし似せることなり。「摹倣」①と通用す。「倣」はまねることなり。文字をうつすにも「倣」というは、古人の墨跡を似せることなり。

①『洞天清錄』「米南宮每卜居、必擇山水明秀處、其初本不能畫、以目所見、日漸摹倣之、遂得天趣」。

【臨】しきうつしにすることなり①。「臨」②はもと上より下を視ることゆえ、しきうつしに用いる。「雙鉤」はかゝ字なり。「填鉤」はかゝ字に墨を入れることなり。又筆の持ちようにも「雙鉤」「單鉤」あり。

①『游宦紀聞』五「臨、謂置紙在傍、觀其大小濃淡形勢而學之、若臨淵之臨」。

②『論語』爲政「子曰、臨之以莊則敬、孝慈則忠、譽善而教不能則勸、皇疏

「臨、謂以高視下也」。

【描】うつし畫なり。

【抄】ぬきがきなり。俗語には、うつすことをいう。雅語の「寫」の如し。

【瞻】俗の「抄」、雅の「寫」と同じ。

4〇うかぶ

浮 汎 漂 漾 (五、二号裏)

【浮】「うかむ」「うかむる」、訓の「とし」。「浮するに大白を以てす」①、大盃にて罰盃をのませることを「浮す」という②。「拍浮」③は水をだぶつかすことなり。和語に後生の「うかむ」というは超・昇なり。

①『説苑』善説「魏文侯與大夫飲酒、使公乘不仁爲觴政、曰、飲不嚼者、浮以大白」。

②『禮記』投壺「辭曰、毋憚毋敖、毋僭立、毋踰言、若是者浮」、釋文「縛謀反、罰也」。

③『世說新語』任誕「畢茂世云、一手持蟹螯、一手持酒盃、拍浮酒池中、便足了一生」。

【汎】泛と同字なり。浮の字と差別なし。但し「汎」は溢れる意を帯びたることあり。「汎駕」①は車を覆すなり。馬のあらきことにいう。

①『漢書』武帝紀第六「夫泛駕之馬、跡弛之士、亦在御之而已」。

【漂】「ただよう」。物の水にただようなり。風に從えば「飄」なり、水に從えば「漂」

なり。

【漾】「ただよふ」。水のゆたぶる「ゆらゆら動く」ことなり。湛、「たたゆる」は、水の靜かなることなり。

5〇うるほふ

溼 潤 滋 澤 沾 霑 濡 浥 溽 (五、十三号表)

【溼】「しめる」なり、「しめす」なり。乾燥の反對なり。「火は燥に就く、水は溼に流る」①、火ははしやぎたる方へやけ、水はしめりたる方になされるなり。「溼薪」②はぬれたきぎなり。又「溼氣」なり。

①『易經』乾・文言「子曰、同聲相應、同氣相求。水流溼、火就燥。雲從龍、風從虎」。

②『史記』酷吏列傳第六十二「好氣爲人小吏、必陵其長吏、爲人上、操下如束溼薪」。

【潤】「ぬるる」に非ず、「しめる」に非ず、「うるほふ」「うるほひ」「うるほす」、訓的當なり。燥の反對なり。「河、九里を潤す」①、河水のほとり、九里の間しめるに非ず、九里の間は草木など皆水氣のうるおいあるなり。「玉、山に在りて、木潤ふ」②、玉の徳にてその山の木につやあることなり。曲水詩序に「雲潤ひ星暉き、風揚り月至る」③、雲のぬれるに非ず、しめるに非ず、うるおいつやのあるなり。「富は屋を潤し、徳は身を潤す」④「溫潤」⑤など、皆つやのあることなり。「潤筆」⑥とは文人に文章を頼みて、その禮をすることなり。

①『後漢書』郭杜孔張廉五蘇羊賈陸列傳第二十一「帝勞之曰、賢能太守、去帝城不遠、河潤九里、冀京師并蒙福也」。

②『荀子』勸學「故聲無小而不可聞、行無隱而不形、玉在山而草木潤、淵生珠

而崖不枯。」

③王融『三月三日曲水詩序』(『文選』卷四十六)「雲潤星暉、風揚月至、江海星象、龜龍載文。」

④『禮記』大學「曾子曰、十目所視、十手所指、其嚴乎。富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。」

⑤『漢書』薛宣朱博傳第五十三「湛自知罪臧皆應記、而言辭語溫潤、無傷害意。」

⑥『宋史』列傳第五十二王禹偁「初、禹偁嘗草李繼遷制、送馬五十疋爲潤筆、禹偁卻之。」

【滋】前に見える。「滋潤」①というとき、「潤」の義なり。

①『論衡』是應「土地滋潤。」

【澤】「うるほひ」「うるほす」。潤の字より重し。「潤」ははしやがぬまでなり、「澤」はとくとうるおうなり。それ故轉用して「恩澤」①、又轉用して「光澤」②「滑澤」③、うるおいつやのあることなり。「面澤」は兵部卿なり。

①『漢書』董仲舒傳第二十六「故師帥不賢、則主德不宣、恩澤不流。」

②『後漢書』方術列傳第七十二下「王真年且百歲、視之面有光澤、似未五十者。」

③『韓非子』難言第三「所以難言者、言順比滑澤、洋洋纒纒然、則見以爲華而不實。」

【沾】水のかかりてぬれることなり。霑と同字なり。

【霑】「霑染する所有り」とは、色にても貨にても、少しけがれのあることなり。

【濡】水にてぬれるなり。沾・濡、大抵同義なり。

【沍】露の貌なり。「渭城の朝雨、輕塵を沍す」①とは、輕塵に露うちたる如くなるなり。

①王維『送元二使安西』「渭城朝雨沍輕塵、客舍青青柳色新。」

【溽】夏月土用の内、衣類などのぢくぢくしめるを「溽暑」①という。

①『禮記』月令「是月也、土潤溽暑、大雨時行。」

6〇うまし

甘美 旨 甜 熟 茗 (五、廿七号裏)

【甘】あまきなり。又うまきともいう。美・旨の義になるなり。又「死を甘んず」①「自ら甘んず」などと用いるは、多くは反辭にて、極めてくるしきことを、反つて心に願欲するをいう。又「甘心」②というは、わがにくきと思ふ人を、心一ぱいにわがしたきまにすることをいう。心のたんぬする「満足する」ほどにすることなり。又莊子輪扁の段には、車輪のまわりかげんぐあいのよすぎたるを「甘」といひ、きしみてまわりにくきを「苦」という③。譬喩の辭なり。

①『說苑』指武「必死不如樂死、樂死不如甘死、甘死不如義死、義死不如視死如歸。」

②『左傳』莊公九年「鮑叔牙帥師來言曰、子糾、親也、請う君封之。管仲、讎也、請受而甘心焉。乃殺子糾于生竇」、注「甘心、言欲快意戮殺之也。」

③『莊子』天道「輪扁曰、臣也以臣之事觀之。斲輪、徐則甘而不固、疾則苦而不入。不徐不疾、得之於手而應於心、口不能言、有數存焉於其間。」

【美】【旨】二字ともに、うまきなり。

【甜】はなはだ甘きなり、うまきに非ず。

【熟】「うまぐす」とは、或いは煮、或いは蒸し、或いは焼き、とかく熟食にすることなり。

【茗】煮ることなり。

7〇うれふ

愁 憂 患 悶 恤 愀 忡 慘 哀 悲 憐 矜 (六、三亨裏)

【愁】「うれふ」、訓の如し。但し人の死したるをかなしむことには非ず。和語に「愁嘆」①という詞、誤りなり。「愁人」②「客愁」③「旅愁」④、皆心のうかぬことなり、重く心得べからず。又「何をうれふ」と反りてよむべからず。かえりてよむとき、「人を愁へしむ」「夜に愁ふ」などとはよむなり。

①『舊唐書』列傳第一百三十五上良吏上「使政平訟息、民去愁嘆、與我共理、其惟良二千石乎」。

②戴叔倫『湘南即事』「沅湘日夜東流去、不爲愁人住少時」。

③李涉『再宿武關』「關門不鎖寒溪水、一夜潺湲送客愁」。

④杜甫『曉望白帝城鹽山』「日出清江望、暄和散旅愁」。

【憂】「うれふ」。愁の字と殊なり、ものを苦勞にすることなり。「國を憂ふ」①「天下を憂ふ」②、皆心に苦勞にするなり。「憂へ有り」という時、苦勞のあることなり。

【憂患】③と對するとき、「憂」は災難などの來らんと先だちて苦勞にするなり、「患」は災難の來りたるを、今苦勞にするなり。又喪のことをいう。「母の憂へ有り」④とは、母の喪あるなり。「憂に居る」⑤とは喪中のことなり。

①『戰國策』齊策四「王曰、寡人憂國愛民、固願得士以治之」。

②『漢書』文帝紀第四「人其以朕爲忘賢有德者而專於子、非所以憂天下也」。

③『易經』繫辭傳下「易之興也、其於中古乎、作易者、其有憂患乎」。

④『後漢書』郭符許列傳第五十八「後遭母憂、有至孝稱」。

⑤『書經』太甲上「王徂桐宮、居憂、克終允德」。

【患】「うれふ」というときは、災難などに値いて、今それを苦勞にするなり。「うれへ」というときは、災難・盜賊・病苦などを指す。故に「災患」①「苦患」②「病患」③などと連用す。又病をすることを「患ふ」という。「風疾を患ふ」「癰腫を患ふ」「痰火を患ふ」の類なり。

①『左傳』成公十八年「逮鰥寡、振廢滯、匡乏困、救災患、禁淫慝、薄賦斂」。

②張慎『酬襲美先見寄倒來韵』「近年已絕詩書癖、今日兼將筆硯焚、爲有此身猶苦患、不知何者是去醺」。

③關漢卿『緋衣夢』第一折「我覷了你面顏、休憂愁染病患」。

【悶】「うれふ」「かなしむ」「あはれむ」。憫・愍、同字なり。不便に思ふことなり、笑止に思ふなり。「世を悶む」「民を悶む」「旱を憫む」「滂を憫む」の類。又「憫笑す」①というは、笑止おかしきなり。

①韓愈『答崔立之書』「君子小人所憫笑、天下之所背而馳者也」。

【恤】「うれふ」。憂の字の意なり。軽く用いることあり。「國亂るれども恤へず」「田園荒れども恤へず」、みな「問わず」とかくと同じことなり。かまわぬことなり。このようなる處には憂の字は用いぬなり。

【愀】「うれふ」とよめども、形容字なり。「愀然」①「愀乎」②、みな顔色を變じたる貌なり、「うれふる」には非ず。

- ①『禮記』哀公問「孔子愀然作色而對曰、君之及此言也、百姓之德也。」  
 ②姚鼐『復魯祭非書』「其於人也、溲乎其如歎、邈乎其如有思、暖乎其如善、愀乎其如悲。」

【仲】形容字なり。「仲仲」と連用す。「憂ふる心仲仲たり」①。

- ①『詩經』召南・艸蟲「未見君子、憂心仲仲」。

【慘】「うれふ」とも、「いたむ」ともよむ。かなしき氣色をいう。「慘淡たり」①と  
 いうは、秋天或いは陰りたる氣色なり。「陽舒陰慘」②「春和秋慘」、又「慘烈」③  
 など。

- ①歐陽脩『秋聲』「天秋之爲狀也、其色慘淡、煙霏雲歛、其容清明、天高日晶。」

- ②劉峻『廣絶交論』『文選』卷五十五「陽舒陰慘、生民大情。」

- ③張衡『西京賦』『文選』卷二「雨雪飄飄、冰霜慘烈。」

【哀】「あはれなり」「あはれむ」「かなしむ」。樂の反對なり。「悲哀」①と連用すれ  
 ども、「悲」は喜の反對なり。これにて輕重を知るべし。「哀」は父母の死したるを  
 かなしむことなり。詩の題に、人の死をいたむに、「悼」の字も人の死するをいたむ  
 なれども、悼の字は普通の死なり、「哀」の字はとりわけて非常の死をかなしむこと  
 に用いる。「悼」は心のいたむなり、「哀」はいたみの聲にあらわれるなり。「哭聲甚  
 だ哀し」②「哭すれども哀しまず」③などということあり。又「雁聲哀し」④「泉  
 聲哀し」「暮吹哀し」⑤「畫角哀し」⑥「萬壑哀し」⑦「猿聲哀し」⑧など、皆人の  
 哭する聲に似たるをいう。又父の喪ある人を「孤子」⑨という、母の喪ある人を「哀  
 子」⑩という。

- ①『老子』第三十一章「殺人衆、以哀悲泣之、戰勝以喪禮處之。」

- 『史記』五帝本紀第一「堯辟位凡二十八年而崩、百姓悲哀、如喪父母。」

- ②『孔子家語』顏回第十八「孔子在衛、昧且晨興、顏回侍側、聞哭者之聲甚

哀」。

- ③『太平廣記』卷一七「蘇無名「伺者曰、胡至一新塚、設奠、哭而不哀。」  
 ④郎士元『郢城秋望』「白首思歸歸不得、空山聞雁雁聲哀。」  
 ⑤杜甫『秦州雜詩』「一望幽閣、何時郡國開。東征健兒盡、羌笛暮吹哀。」  
 ⑥杜甫『野老』「王師未報收東郡、城闕秋生畫角哀。」「畫角」は西羌から伝わ  
 った樂器。本文の「畫」は「畫」の誤刻か。

- ⑦杜甫『漢朝陵墓對南山』五「錦江春色逐人來、巫峽清秋萬壑哀。」

- ⑧『山海經』南山經「多栝木、多白猿、郭注「今猿似獼猴而大、臂脚長、敏  
 捷、色有黑有黃、鳴、其聲哀。」

- ⑨『官子』輕重已「民生而無父母、謂之孤子。」

- ⑩『禮記』雜記上「祭稱孝子孝孫、喪稱哀子哀孫。」

【悲】「かなしむ」。喜の反對なり。愁より重く、哀よりかるし。「悲泣」①。又佛書  
 に「慈悲」②というは、梵語のままに譯したるなるべし。華夏にはこの用法なし。

- ①『漢書』刑法志第三「其少女緹縈、自傷悲泣、乃隨其父至長安。」

- ②『無量壽觀經』「佛心者、大慈悲是。」

【憐】「あはれむ」とよむ。いとおしがることなり。「愛憐」①と連用すれども、愛  
 はひろき字にて、すくことをもいう。「酒を愛す」「酸を愛す」の類なり。又花月を  
 愛賞することをも「憐む」という。古來「おもしろかる」と訓ず、實はおもしろか  
 るに非ず、花月はやさしき物なるゆえ、いとおしがる意なり。又六朝の俗語に、情  
 人を「憐」という②。又憫の字の意に用いることあり。人のあさましき體に「憐む  
 可し」③という。

- ①『史記』趙世家第三「太后曰、丈夫亦愛憐少子乎。對曰、甚於婦人。」

- ②未詳。

- ③『莊子』庚桑楚「汝欲反汝情性而無由入、可憐哉。」

【矜】「あはれむ」とよむ。「哀矜」①と連用す。憫の字の意なり。

①『書經』呂刑「皇帝哀矜庶戮之不辜」。

8〇うらやむ

羨 歎 艶 (六、二十号裏)

【羨】【歎】【艶】三字ともに「うらやむ」なり。訓の如し。

9〇うらむ

怨恨 冤 啣 慊 憾 望 (六、廿二号表)

【怨】「うらむ」「うらむ」、訓の如し。恩の反対なり。「怨曠」①は怨女曠夫なり。夫なき女を「怨女」②といい、妻なき夫を「曠夫」②というなり。

①『詩經』邶風・雄雉・序「軍旅數起、大夫久役、男女怨曠」、鄭注「故男多曠、女多怨也。男曠而苦其事、女怨而望其君子」。

②『孟子』梁惠王下「當是時也、内無怨女、外無曠夫」。

【恨】怨の字と同義なり。又残り多く思うことなり。又俗語には怒ることを「恨」という。

【冤】「うらむ」とよむは非なり、無実の罪に値<sup>あ</sup>うをいう。「冤枉」①「冤獄」②「冤死」③などなり。又佛書に「冤敵」④はかたきなり。俗語に「冤家」⑤はかたきの子孫なり。俗語の風流話には、おもしろい人を「冤家」⑥という。前世の冤業に因りて、今情人となりて相苦しむる意にていいたるなるべし。

①『顏氏家訓』風操「叩頭流血、申訴冤枉」。

②『漢書』丙吉傳第四十四「遣諫大夫博士巡行天下、察風俗、舉賢良、平冤獄、冠蓋交道」。

③『漢書』刑法志第三「天下獄二千餘所、其冤死者多少相覆、獄不減一人」。

④『菩薩本生鬘論』卷第八「四民無棄、冤敵諍訟、聖力皆止」。

⑤『朝野僉載』卷六「梁簡文王之生、誌公謂武帝曰、此子與冤家同年生」。

⑥唐無名氏『醉公子』詞「内外獨兒吠、知是蕭郎至、剗襪下香階、冤家今夜醉」。

【啣】「うらむ」とよむ。元來口ものをくわえることなり。故に轉用して、人のあしきを心にとめて忘れぬことなり。

【慊】「うらむ」とよむ。心にものをはさみて忘れぬ意なり。

【憾】恨と同義なり。

【望】「怨望」①と連用す。かようにあるべきことを、さようになきと不足をもつことなり。

①『史記』淮陰侯列傳第三十二「信由此日夜怨望、居常鞅鞅、羞與絳灌等列」。

10〇うやまふ

敬 慎 謹 欽 寅 恪 悫 恭 龔 肅 莊 嚴 儼 (六、廿八号裏)

【敬】「うやまふ」と訓じ、「つつしむ」と訓ず。心をうろり「途方にくれるようす」とせぬ處を主とせる字なり。書柬などその外輕く使いたるは、多くはうやまう意なり。

【慎】【謹】共に「つつしむ」と訓ず。ものを粗末にせぬことなり。「細行を謹まず」①とは、行跡のはしはづれに氣をつけぬことなり。宋朝には慎の字を諱みたる故、代りに謹の字を用いる。

① 魏文帝『與吳質書』『魏志』王粲傳「觀古今文人、類不護細行、鮮能以名節自立」。

【欽】畏敬の義なり。「欽ふ所」①とは、うやまう人をいう。「賢を欽ふ」②「四海欽ふ」③「天下欽ふ」④など、皆うやまうなり。書經の「欽明」⑤「欽若」⑥は、天子の天を畏敬することをいいたるより、多く天子の上に用いるなり。「欽差」⑦は朝廷より使いにゆくことなり。又敕書の尾に用いることあり。

① 李嶠『劉侍讀見和山邱十篇重申此贈』『丘壑信多美、煙霞得所欽』。

② 『晉書』列傳第六十一 儒林杜夷「臣聞、有唐疇咨、元凱時登、漢武欽賢、俊彦響應」。

③ 崔湜『奉和幸韋嗣立山莊侍宴應制』『宸翰三光燭、朝榮四海欽、還嗟絕機叟、白首漢川陰』。

④ 韓愈『孟生詩』『我論徐方牧、好古天下欽』。

⑤ 『書經』堯典「日、若稽古帝堯曰、放勳、欽明文思、安安。允恭克讓、光被四表、格于上下」。

⑥ 『書經』堯典「乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時」。

⑦ 『正字通』辰集下「御音曰欽、敕御使曰欽命、俗曰欽差」。

【寅】恭敬の義なり。「同寅和恭」①ということと同僚のことに用いたるより、後世には同僚を「寅兄」②という。父の行なれば「寅伯」という。年少なれば「寅弟」という。

① 『書經』皋陶謨「同寅協恭、和衷哉」。

② 『歧路燈』第四回「東道、寅兄盛情、多此一舉」。

【恪】愿なり。「慎謹なり」①と注せる字なり。ものを大切にすることなり。

① 『説文解字』『愿、謹也、从心原聲』。

【慤】謹と同義なり。

【恭】【龔】同字なり。「うやうやし」とよむ。慤懃なることなり。莊・恭ともに貌の敬にて、「莊」は高く、「恭」は卑なり。

【肅】「つつしむ」とよむ。「恭肅」①と連用して、うやまうことに用いる。恭・莊の義に似て、戦・兢の義あり。又「肅拜」②は女子の拜なり。

① 『後漢書』皇后紀第十上「八年冬、入掖庭爲貴人、時年十六。恭肅小心、動有法度」。

② 『禮記』少儀「坐則不手拜、肅拜」、鄭注「肅拜、拜低頭也」。

【莊】「おごそか」とよむ。上より下に臨む時の敬に用いる。威儀容貌をきつと威高にする意あり。後漢の明帝の諱を「莊」というによりて、後漢の世に「莊」の字の代りに嚴の字を用いる①。

① 『正字通』申集上「經傳皆作莊、漢書避明帝諱、莊改嚴、如莊周作嚴周、莊助作嚴助之類」。

【嚴】「おごそか」とよむ。威儀容貌の上に用いるときは莊の字の意なり。政事法會などの上に用いるときは、「嚴厲」①「嚴肅」②「嚴明」③などと用いる。きつとしてじだらくなき意あり。

① 『後漢書』楊季羗應霍爰徐列傳第三十八「糾舉姦違、不避豪戚、以嚴厲爲名」。

② 『呂氏春秋』尊師「審辭令、疾趨翔、必嚴肅、此所以尊師也」。



③『後漢書』袁張韓周列傳第三十五「徵爲河南尹、政號嚴明、然未曾以臧罪鞠人」。

【儼】威儀嚴莊なる貌なり。政事法令などの上に用いることなし。

11〇うたがふ

疑 貳 猜 訝 怪 (六、三十七号表)

【疑】「うたがふ」「うたがひ」。訓の如し。

【貳】二の字なり。心のふたつに分かれる義ゆえ、疑の字の意になるなり。

【猜】邪推なり、推をするなり。前に見える。

【訝】【怪】「訝」は「いぶかる」、「怪」は「あやしむ」と訓ず。同義なり。輕重の異あり。「訝らくは是れ卻て訝る」は、いなことじやというの義、「怪らくは是れ卻て怪しむ」は不審千萬なりとの意なり。

12〇うばふ

奪 篡 褫 (後一、廿八号表)

【奪】「うばふ」とよむ。予の反なり。「強取なり」①と注す。むりにひきたくるなり。前漢に「大賈富家、吾が民を豪奪するを得ず」②、又「百姓を漁奪す」③、又文中子に「施を輕んずる者は必ず奪を好む」④、論語に「伯氏の駢邑三百を奪ふ」⑤などなり。

①『集韻』「奪、疆取也」。

②『漢書』食貨志第四下「故大賈富家、不得豪奪吾民矣」。

③『漢書』景帝紀第五「或詐僞爲吏、吏以貨賂爲市、漁奪百姓、侵牟萬民」。

④『中說』王道篇「易樂者必多哀、輕施者必好奪」。

⑤『論語』憲問「或問子產。子曰、惠人也。問子西。曰、彼哉、彼哉。問管仲。曰、人也、奪伯氏駢邑三百、飯疏食、沒齒無怨言」。

【篡】「逆取を篡と曰ふ」①と注す。下より上のものをうばいとるなり。前漢に「大

長公主、青を執囚して之を殺さんと欲す。其の友公孫敖、壯士と往きて之を篡ふ」

②。又「篡賊」③「篡弒」④などなり。

①『說文』「篡、竝而奪取曰篡、从厶算聲」。

②『史記』衛將軍驃騎列傳第五十一「大長公主執囚青、欲殺之。其友騎郎公孫敖與壯士往篡取之、以故得不死」。

③方孝孺『贈士淵序』「孟子曰、我善養吾浩然之氣、……漢文帝、唐太宗、嘗用之以致治、諸葛亮嘗用之以誅篡賊」。

④『史記』秦本紀第五「上下交爭怨、而相篡弒、至於滅宗」。

【褫】きものをはぎとるなり。易經に「終朝三褫之を褫す」①。

①『易經』訟「上九 或錫之鞶帶。終朝三褫之」。

13〇うつ

打 拍 擊 撲 擣 討 毆 琢 伐 搗 搨 搏 拊 拊 (後一、五号裏)

【打】訓の通りにて、一切へ通じるなり。ひろき字なり。又俗語に「二種打する」という辭あり。何の義理もなく付け字なり。「打蕩」「打發」の類なり。

【拍】手のひらにてうつこと、手をうつことに用いる。又拍子木をうつことにも用

いる。「一拍を與ふ」というは、手のひらにて一打うつことなり。「拍板」は拍子木なり。

【擊】うちたたく、うちころす、うちやふるなどに使う「うつ」なり。敵をうち、仇をうち、石をたたき、木をたたきなどするに用いる。

【撲】蠅蚩などのとまりたるをうち拂うに用いる。「香、鼻を撲つ」①というは、香氣のはつとして鼻をおしつける様なるをいう。又「雪、衣を撲つ」などにも用いる。俗語に「閻閻撲地」というは、ものをつくすなり。ただ「撲地」とばかりなれば、ぼんと音のするなり。

①楊萬里『謝親戚寄黃雀』「印泥未開出饒水、印泥一開香撲鼻」。

【擣】搗と同じ。「つく」なり。臼にてつくなり。故に「擣藥」①などに用いる。「うつ」ともよむ。「砧を擣つ」の類なり。うちひろめる意なり。

①『南史』宋本紀上第一「後伐荻新洲、見大蛇長數丈、射之、傷……、往覘之、見童子數人皆青衣、於榛中擣藥」。

【討】これは各別の字なり。征・伐などと同じで、敵を退治することなり。「征」は諸侯の罪を正すなり。天子の軍にならではいわぬことなり。「討」は罪咎をいい立てて退治することなり、「伐」は進發して敵をうつなり。

【伐】上にいう如し。又木をきるなどに用いる。きるというは刀・鋸にてきるなり、「伐」は斧・鉞・なたなどにてきるなり。

【毆】杖にて人をたたくことなり。

【琢】鑿<sup>のみにち</sup>椎で石や玉やをうちかきうちわりて、器につくることなり。又「彫琢」①という時は、石や玉にほりものをする<sup>ことなり</sup>。それも鑿椎にてほるによりてなり。「みがく」とよむ<sup>ことあし</sup>し。

①『莊子』應帝王「彫琢復朴、塊然獨以其形立、紛而封戎、一以是終」。

【搗】鼓をうつ、鉦をうつなどに用いる。擊の字、伐も用いる。

【搗】「うつ」とよむ。屢をつくることなり。

①『孟子』滕文公上「其徒數十人、皆衣褐搗屨織席以爲食」、注「搗者扣槌之、使賢密也」。

【搏】大氏拍と同義なり。そのうち「搏」は手に力を入れてうつなり。

【拊】【拊】二字同義なり。手に何ぞもつてうつことなり。答などにてうつことに多く用いる。「拊」は拊より少しかるきなり。國策に「二人を拊つが若し」①、史記に「筑を擧て秦皇を拊つ」②、左傳に「勉めざる者を拊つ」③などなり。

①『戰國策』楚策一「吾將深入吳軍、若拊一人、若拊一人、以與大心者也、社稷其爲庶幾乎」。

②『史記』刺客列傳第二十六「高漸離乃以鉛置筑中、復進得近、舉筑撲秦皇帝、不中」。

③『左傳』襄公十七年「子罕聞之、親執朴、以行築者、而拊其不勉者」。

【拊】かるくうつなり。撫よりはつよき方なり。儀禮に「婦人、心を拊つ哭さず」①、又「琴を拊つ」②の類なり。「拊搏」③と連す。

①『儀禮』士喪禮「主人即位辟門、婦人拊心不哭」。

②曹植『仙人篇』「湘娥拊琴瑟、秦女吹笙竽」。

③『禮記』明堂位「拊搏玉聲、箝擊大琴大瑟、中琴小瑟、四代之樂器也。」

14〇うる

賣 沽 售 （後二、十六号表）

【賣】あきないうりなり。故に大うりすることに使う。

【沽】こうりすることなり。

【售】うつて手ばなしをすることなり。

15〇うたふ

歌 謳 謠 唱 倡 （後三、五号裏）

【歌】「うたふ」とよむ。聲を長く引きて、ふしをつけてうたうなり。一説に「樂器に合わせるを歌といい、徒歌を謠とす」①と注して、樂器にあわせぬをいうなり。然れどもそれにかぎるべからず。「歌」はすべてうたいものの物名なり、樂器なしとも「歌」といいてよきなり。

①『詩經』魏風・園有桃「園有桃、其實之穀。心之憂矣、我歌且謠」、毛傳「曲合樂曰歌、徒歌曰謠」。原文には「あわせぬ」とあるが、毛傳からすると「あわせる」の誤りか。

【謳】「謳歌」①と連用すること多し。歌の字とさのみ差別なし。そのうち「謳」の字はちよつとひとふしうたうことなり。故に「短歌を謳とす」②と注す。

①『孟子』萬章上「謳歌者、不謳歌堯之子、而謳歌舜」。

②『楚辭』大招「謳和揚阿、趙蕭倡只」、王逸注「徒歌曰謳」。『譯文筌蹄後編

異本』『荻生徂徠全集』第二卷「謳」の項には「徒歌と云説あり徒歌は樂器なし」とあり、本文の「短歌」は「徒歌」の誤刻か。

【謠】はやりうたなり。動搖してうたう意なり。世間一同にうごきわたりてうたう意なり。故に言に従い搖の省に従う。「省」は省略の意にて、へんつくりをはぶきたるなり。

【唱】あげうたなり。「唱和」①と對す。「和」はつけてうたうなり。又「となふ」ともよむ。はりあげてよむことなり。「昌」は「さかん」とよむ。口を昌にすという意なり。朱子詩序に「諷詠して以て之を昌す」②とあるもこの意なり。又「いざなふ」とよむときは倡と同じ。

①『荀子』樂論「唱和有應、善惡相象」。

②朱熹『詩經集傳序』「於是乎、章句以綱之、訓詁以紀之、諷詠以昌之、涵濡以體之」。

【倡】「とのふ」とよむときは唱と同じ。

16〇うたふ

吟 哦 咏 嘯 呻 （後三、六号表）

【吟】「うなる」という字なり。「呻吟」①と連用し、病人などのうなりうめくことなり。それを轉用して、詩を咏じることを「吟ず」という。詩をとなえるには、感情ありてうなる様なればなり。又後には詩を作ることをも「吟ず」というは、吟じて作る故なり。又「さまよふ」とよむは、文選に「戲なり」②と注せり。口に吟しながらぶらぶらあることなり。又「龍吟」③「猿吟」④「蟬吟」⑤「虫吟」⑥「鳥吟」⑦などは、皆なくということなり。「曉松吟す」⑧「萬葉吟す」⑨「窓竹吟す」

などは、風にてなることに用いる。

- ① 『莊子』列禦寇「鄭人緩也、呻吟裘氏之地、祇三年而緩爲儒」。
- ② 未詳。

- ③ 張説『桐竹』「竹有龍吟管、桐留風舞琴」。
- 杜甫『送從弟亞赴西安判官』「龍吟迴其頭、夾輔待所致」。

- ④ 庾信『傷心賦』「藝文類聚」三十四「鶴聲孤絕、猿吟腸斷」。
- ⑤ 徐幹『於清河見挽船士新婚與妻別』「冽冽寒蟬吟、蟬吟抱枯枝」。

- ⑥ 柳惲『長門怨』「綺簷清路薄、網戶思蟲吟」。
- ⑦ 陸機『赴太子洗馬時作詩』「臺臺孤獸騁、嚶嚶思鳥吟」。

- ⑧ 阮卓『賦得詠風詩』「吹雲旅鴈斷、臨谷曉松吟」。
- ⑨ 劉禹錫『秋聲賦』「碧天如水兮宵宵悠悠、百蟲迎莫兮萬葉吟秋」。

【哦】詩を吟じるばかりに用いる。

【咏】詠にも作る。「言を永くするを詠と曰ふ」①というなり。よむとうたうの間なり。唱の字に大氏近き字なり。それより轉じて、詩を作ることをも「咏ずる」という。「咏物」②は何ぞ、一物を詩に作ることなり。但し咏じても興する意なり。

- ① 『詩經』關雎・序「吟詠情性、以風其上、達於事變而懷其舊俗者也」、正義「長言曰詠」。

- ② 『國語』楚語上「若是而不從、動而不悛、則文詠物以行之、求賢良以翼之」。

【嘯】口をすばめよせて、ひょうひょうということなり。故に「長嘯」①「舒嘯」

- ②「清嘯」③「悲嘯」④「歌嘯」⑤「吟嘯」⑥などと連す。又「龍嘯」⑦「虎嘯」⑧「猿嘯」⑨などにも用いる。竹木のなることにも用いる。吟の字を使うと同じ。

- ① 司馬相如『上林賦』「長嘯哀鳴、翩幡互經」。
- ② 陶潛『歸去來辭』「登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩」。

- ③ 陸雲『感醒』「瓊娥起而清嘯、神風穆其來應」。

- ④ 蘇轍『黃州快哉亭記』「書則舟楫出沒於其前、夜則魚龍悲嘯於其下」。
- ⑤ 『世說新語』任誕「劉道真少時、常漁草澤、善歌嘯、聞者莫不留連」。

- ⑥ 『晉書』列傳第四十九謝安「嘗與孫綽等汎海、風起浪湧、諸人並懼、安吟嘯自若」。

- ⑦ 『晉書』列傳第九十二文苑趙至「龍嘯大野、獸睇六合、猛志紛紜、雄心四據」。

- ⑧ 張衡『歸田賦』「爾乃龍吟方澤、虎嘯山丘」。
- ⑨ 杜甫『登高』「風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛迴」。

【呻】うなるなり。「呻吟」と連す。但し「呻」は細く膺の下よりうなりいづるなり、「吟」は喉にて高くうなるなり。禮記に「其の估畢を呻す」①、韓文に「其の嘖呻を察す」②、孟郊が句に「寒泉空しく哀呻す」③などと使う。吟よりはせまき字なり。外のことに使うことなし。

- ① 『禮記』學記「今之教者、呻其估畢、多其訊、言及于數」。
- ② 韓愈『司徒兼侍中書令贈大尉許國公神道碑銘』「公居其間、爲帝督奸、察其嘖呻、與其睨眴」。

- ③ 孟郊『奉報翰林張舍人見遺之詩』「衆蘊有餘采、寒泉空哀呻」。

17〇うつたふ

訟 訴 (後三、七号裏)

【訟】「曲直を官に争ふなり」①と注して、公事くじをすることなり。言に従い公に従う故に、はれてものをいうことなり。

- ① 『六書故』「争曲直于官有司也」。

【訴】「冤枉を告訴するなり」①と注し、訴人をする事となり。謝・愬と同じ。

①『玉篇』「訟也、告訴冤枉也。」

18〇うう

餒 饑 餓 (後三、十八号裏)

【餒】はらのへりて、ひだるくなり「空腹になる」たるなり。故に「うえる」とよむ。左傳に「吾餒有るのみ」①、孟子に「妻子凍餒」②。

①『左傳』襄公二十年「君入、則掩之。若能掩之、則吾子也。若不能、猶有鬼神、吾有餒而已、不來食矣。」

②『孟子』梁惠王下「孟子謂齊宣王曰、王之臣有託其妻子於其友而之楚遊者、比其反也、則凍餒其妻子、則如之何。」

【饑】「うえる」とよむ。食物のなきことなり。又「穀升らざるを饑と曰ふ」①とあり。故に「飢歲」は「饑歲」より甚しき方なり。飢同じ。「飢饉」②と連す。「三穀升らざるを饉と曰ふ」③とあるなり。

①『韓詩外傳』卷第八「二穀不升曰歉、一穀不升曰饑。」

②『論語』先進「千乘之國、攝乎大國之間、加之以師旅、因之以饑饉。」

③『春秋穀梁傳』襄公二十四年「五穀不升、爲大饑。一穀不升、謂之暵、二穀不升、謂之饑、三穀不升、謂之饉、四穀不升、謂之康、五穀不升、謂之大侵。」

【餓】ひだるきこと「空腹」のこつじて、食のくわれぬことなり。韓子飾邪篇に「家に常業有り、飢うと雖も餓えず」①、又淮南子に「寧ろ一月飢うるも、一句餓うる毋れ」②、これらにて會すべし。

①『韓非子』飾邪篇第十九「家有常業、雖飢不餓、國有常法、雖危不亡。」

②『淮南子』說山訓「寧一月饑、無一句餓。」

19〇うく

受 承 稟 歆 饗 (後三、廿一号裏)

【受】すすんでうけとるなり。向うからくるをこちらからも手をだして受けとる意なり。易經に「實に其の福を受く」①、又「君子、虚を以て人を受く」②、詩經に「天の福を受く」③、孟子に「之を天に薦め、天之を受く」④などなり。

①『易經』既濟「九五、東鄰殺牛。不如西鄰之禴祭、實受其福。」

②『易經』咸「象曰、山上有澤。咸。君子以虛受人。」

③『詩經』小雅・谷風之什・信南山「獻之皇祖、曾孫壽考、受天之祜」、鄭箋「祜、福也。」

④『孟子』萬章上「曰、敢問、薦之於天、而天受之、暴之於民、而民受之、如何。」

【承】うけみになつておるなり。向うからくるをこちらにまつてうけておるなり。書經に「丕靈、帝事を承く」①、又「丕に承けるかな、武王之烈」②などなり。尚書大傳に「庶人、石承有り」③ということあり。「石承」は柱の下の石なり。柱をうけておる故、なつけたるなり。又「承塵」④「承露」⑤などにて會すべし。

①『書經』多士「王若曰、爾殷多士、今惟我周王、丕靈承帝事。」

②『書經』君牙「丕顯哉、文王謨、丕承哉、武王烈。」

③『尚書大傳』多士「庶人有石承」、注「當柱下而已、不外出以爲飾也。」

④『釋名』釋牀帳「承塵、施於上、承塵土也。」

⑤班固『西都賦』「抗仙掌以承露、擢雙立之金莖。」

【稟】「命を受くるを稟と曰ふ」①と注す。物をうけるには用いず。書經に「臣下、

命を稟くる攸罔し」②、左傳に「稟命は則ち威あらず」③などなり。「氣稟」④「稟賦」⑤「稟受」⑥など、みな天命をうけるところをいう。「稟」に作るは非なり。

①『正字通』午集下「稟、受命也」。

②『書經』說命上「王言、惟作命、不言、臣下罔攸稟命」。

③『左傳』閔公二年「夫帥師、專行謀、誓軍旅、君與國政之所圖也。非太子之事也。師在制命而已、稟命則不威、專命則不孝、故君之嗣適、不可以帥師」。

④『中庸章句』「性道雖同、而氣稟或異、故不能無過不及之差」。

⑤陳造『戲作』「書生稟賦紙樣薄、平日扶衰惟粥藥」。

⑥『後漢書』皇后紀第十下「詔曰、朕稟受不弘、遭值禍亂、未能紹先、以光故典」。

【歆】「神、氣を食するなり」①と注す。受納のしるしあるという程のことなり。詩經に「其の香始めて升り、上帝居んじ歆く」②、書經に「上帝時れ歆く」③、左傳に「非類を歆けず」④などなり。

①『説文』「歆、神食氣也、从欠音聲」。

②『詩經』大雅・生民之什・生民「印盛于豆、于豆于登、其香始升、上帝居歆」。

③『書經』微子之命「上帝時歆、下民祗協、庸建爾于上公、尹茲東夏、欽哉」。

④『左傳』僖公十年「臣聞之、神不歆非類、民不祀非族、君祀無乃殄殄乎」。

【饗】「享」共に「うくる」とよむ。同義なり。大氏歆に似て、少しかるき方なり。

元來神明に物をそなえるを「享す」というなり。それより轉じて、納受の義となるなり。詩經に「伊嘏文王、既に右け之を饗す」①、又「來り假り來り饗く」②、孝經に「祭れば則ち鬼之を享す」③なり。

①『詩經』周頌・清廟之什・我將「伊嘏文王、既右饗之。我其夙夜、畏天之

威、于時保之」。

②『詩經』商頌・列祖「自天降康、豐年穰穰、來假來饗、降福無疆」。

③『孝經』孝治章「夫然、故生則親安之、祭則鬼享之」。

20〇うかがふ

窺 闕 閤 窳 伺 候 闕 (後三、廿八号表)

【窺】【闕】【閤】【窳】何れものぞくことなり。物のすきよりうかがうなり。闕・窺も同義なり。瞰も同じ。

【伺】ひそかに様子をはかるなり。覗も同じ。

【候】ひそかの意なし。まちておいて様子をはかるなり。

【闕】覘と同じ。

おの部

1〇おほし

衆多 饒 夥 (一、廿七号裏)

【衆】人の多きなり。寡の反対なり。音にてよむとき、大勢の人ということなり。

【多】少の反対なり。廣き詞なり。衆・饒・夥・繁などに通ず。又戦功を「多」という①。左傳に「多なることは則ち多なり」②。それより轉用して、人に勝ること

を「多」という。檀弓に「多なるか」③とは、まされるかということなり。漢書に「仲が多なるに孰與か」④、又「上、足下を多とす」⑤など、是れなり。

①『周禮』夏官・司勳「司勳、掌六鄉賞地之灋、以等其功。王功曰勳、國功曰功、民功曰庸、事功曰勞、治功曰力、戰功曰多」。

②『左傳』襄公二十三年「齊侯將爲臧紇田。臧孫聞之、見齊侯。與之言伐晉。對曰、多則多矣、抑君似鼠。夫鼠、晝伏夜動、不穴於寢廟、畏人故也」。

③『禮記』檀弓上「曾子聞之曰、多矣乎予出祖者」、鄭注「善子游言」。

④『漢書』高帝紀第一下「今某之業所就孰與仲多。殿上群臣皆稱萬歲、大笑爲樂」。

⑤『漢書』張耳陳餘傳第一「告曰、張王已出、上多足下、故赦足下」。

【饒】上の注に見える。多に飽足の意を帯びたり。

【夥】およそ物盛んにして多きをいう。多に盛の意を兼ねる。故に「おびただし」と訓ず。

2〇おろそか

疎 疏 簡 濶 (二、四十一号裏)

【疎】同字なり。「をろそかなり」と訓ず。まばらなることなり。間のすきたることなり。密の字の反對なり、親の字の反對なり。「うとし」とよむも、間のすきたる意なり。「屬親し」①とは、親類つづきの近きなり、「屬疏なり」②とは遠きなり。「朋友疎なり」③は、朋友のうとくなるなり。「音書疎なり」④とは、おとづれの間の遠きなり。「枝葉疎なり」とは枝葉のはらりとしたるなり。「髣毛疎なり」とは髣の毛のうすきなり。「網疎なり」⑤とは網の目のあらきなり。「學術疎なり」⑥とは學術のあらきなり。これは粗の字に似たれども、「粗」の字はただあらきなり、

「疎」はぬけめの多きなり。「劍術疎なり」⑦などにて會得すべし。粗は精の反、疎は密の反なり。これらの類、和語に學問のうときというにまがうなり。それは耳のうとき、目のうときという語と同じことにて、疎の字の意に非ず、さことからすことをいう。又檀弓に早のまじないに、女巫を日に晒さんと、魯の穆公のいえるを、縣子これを駁して、「母乃己だ疎ならんか」⑧といえるなど、和語の「うとき」というにまがえども、これもせんぎのつまらぬことをいうなり。「つまる」とは目のつまることにて、密の義なるゆえ、つまらぬは「疎」なり。「禮法疎なり」⑨とは、禮法のみぬけのするなり。又「器疏」⑩とは、すかしをしたることなり。「綺疏」⑪といふは、窓や戸に綺文をすかしたるなり。又「扶疎」⑫は枝葉のしげりたるなり。「疏」⑬は衣服の盛んなるなり。これらは字の聲を用いたるものにて、おろそかなりという義にてはすまぬことなり。又「森疎たり」⑭といふは、木の立ち並びてしげりたるなり。「扶疎」より出でたり。「蕭疎」⑮は木の葉などのすきてさびしき體なり。又疎の字ばかり用いて、疎の字を用いざるあり。「禹、九河を疏とす」⑯「注疏」などの類なり。又喪服を「齋疏」⑰という類、疎と連せず。

①『後漢書』志第十三五行一「太尉李固以爲清河王雅性聰明、敦詩悅禮、加又屬親、立長則順、置善則固」。

②『新唐書』列傳第四十一韋嗣立「嗣立與韋皇后屬疏、帝特詔附屬籍、顧待甚渥」。

③『論語』里仁「子游曰、事君數斯辱矣、朋友數斯疏矣」。

④高適『途中寄徐錄事』「君又幾時去、我知音信疏、空多篋中贈、長見右軍書」。

⑤『老子』七十三章「天網恢恢、疏而不失」。

⑥陸游『北園雜詠』「少談王霸謀身拙、晚好詩騷學道疎」。

⑦陶潛『詠荊軻』「惜哉劍術疏、奇功遂不成」。

⑧『禮記』檀弓下「天則不雨、而望之愚婦人、於以求之、母乃已疏乎」。

⑨杜甫『奉酬嚴公寄野亭之作』「謝安不倦登臨費、阮籍焉知禮法疎」。

⑩『禮記』月令「其器疏以達」、鄭注「器疏者、刻鏤之、象物當貫土出也」。

①孫綽『遊天台山賦』『文選』卷十一。「彤雲悲疊以翼樞、曠日爛晃於綺疏」。  
 ②『後漢書』吳延史盧趙列傳第五十四「遠取諸物、則草木之生、始於萌芽、終於彌蔓、枝葉扶疏、榮華紛縟」。

⑬『韓詩外傳』卷三「子路盛服見孔子。孔子曰、疏疏者何也。子路趨出、改服入」。

⑭陶潛『庚子歲五月中從都還阻風於規杯』「高莽眇無界、夏木獨森疎」。

⑮杜甫『除架』「束薪已零落、瓠葉轉蕭疎」。

⑯『孟子』滕文公上「禹疏九河、濬濟漯而注諸海、決汝漢、排淮泗而注之江、然後中國可得而食也」。

⑰『孟子』滕文公上「三年之喪、齋疏之服、飡粥之食、自天子達於庶人、三代共之」。

【簡】繁の反対なり。事少なることなり。「易簡」①は、むごうさに事ずくなることなり。「簡要」②は事ずくなにて、くぐりのあることなり。「狂簡」③とは、狂者は大ごころにて、事ずくなるをいう。「禮法簡なり」とは、禮法をうそがの事少なることなるゆえ、あしらいの粗末なることに用いる。

①『易經』繫辭傳上「易簡而天下之理得矣」。

②『晉書』列傳第五裴楷「吏部郎缺、文帝問其人鍾會、會曰、裴楷清通、王戎簡要、皆其選也」。

③『論語』公冶長「子在陳、曰、歸與歸與、吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之」。

【潤】「潤節」ということ、本草などの節間のひろきことなり。それを禮節の間ぬけのしたることに用いる。その時に「をろそかなり」とよむことあり、疎の字の義になるなり。餘は「ひろき」の條に見える。

3〇おほいなり

大 太 鉅 巨 洪 碩 冢 浩 丕 恢 宏 闕 (四、十四号裏)

【大】清濁の二音あり、濁音は大小の大なり。「をほひなり」とよむ。訓の如し。義明らかなり。清音は少の反対にて、尊稱なり。日本にて御の字を用いるが如し。「太子」「太師」「太傅」「太保」「太公」「太王」「太伯」の類なり。古は大の字をかくの如く兩様に用いれども、後世點をうちて「太」と書きてわかつなり。太の時、又「甚だし」と訓ず。下に用いず。「太」は甚大なり。太を「ふとし」とよむというは非なり。又大學の大の字、古注には清音①、朱注に「始めて濁音によむ」②というは誤れり。古音に清音によむ。この時も太は尊稱にて義なし。劉昌宗が音に濁音によむ①。されども古注にては博大の義なり。朱注に至りて小學に對する大學と見るなり。

①『禮記』大學「大學之道、釋文「大、舊音泰、劉直帶反」。

②朱熹『大學章句』「大、舊音泰、今讀如字」。

【鉅】【巨】同字なり。細の反対なり。ふときなり。されども大の字の意にも用いる。但し「巨材」「巨室」「巨人」、多くは形の上にていうなり。ふとき意あり。

【洪】織の反対なり。織は至細をいうゆえ、洪も盛大の意なり。「洪水」①「洪脉」②。

①『書經』堯典「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵、浩浩滔天」。

②『脈經』脈形狀指下祕訣第一「洪脉、極大在指下」。

【碩】「大なり」①と訓ず。肥大の意あり。「碩學」②「碩德」③「儒碩」④「耆碩」⑤。

①『爾雅』釋詁「碩、大也」。



② 『後漢書』儒林列傳第六十九下「夫書理無二、義歸有宗、而碩學之徒、莫之或徒、故通人鄙其固焉。」

③ 『晉書』索襲傳「陰澹曰、索先生碩德名儒、真可以諮大義。」

④ 李絳『請崇國學疏』「儒碩解散、國學毀廢、生徒無鼓篋之志、博士有倚席之譏。」

⑤ 『新唐書』列傳第一百七十二李崔蕭二鄭視盧周二裴劉趙王「以鈞耆碩長者、顧不任職、咎爲冒賢。」

【冢】大に首の意あり。太子を「冢子」①といい、太宰を「冢宰」②という。

① 『左傳』閔公二年「太子、奉冢祀社稷之粢盛、以朝夕視君膳者也。故曰冢子。」

② 『書經』周官「冢宰掌邦治、統百官、均四海、蔡傳「冢、大、宰、治也。天官卿、治官之長、是爲冢宰。」

【浩】形容字なり。「盛大流行の貌」①と注せり。「浩渺」②「浩々」③「浩漫」④、皆水流廣大の意にて、渺・漫の字に比すれば、更に勢いをもたたり。

① 『孟子』公孫丑上「曰、我知言、我善養吾浩然之氣」、集注「浩然、盛大流行之貌。」② 許渾『鄭秀才東歸住達冢書』「愁泛楚江吟浩渺、憶歸吳岫夢嵯峨。」

③ 『書經』堯典「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵、浩浩滔天。」

④ 朱廣之『咨顧道士夷夏論』「剛柔並馳、華戎必同。是以長川浩漫、無當於此矣。」

【丕】詩書の内に多く用いる。大の義なり。多くは贊語に用いる。

【恢】形容字なり。「恢恢」①「恢然」②、濶大の貌なり。「恢廓」③など連用す。

① 『老子』第七十三章「天網恢恢、疏而不失。」

② 『荀子』非十二子「無不愛也、無不敬也、無與人爭也、恢然如天地之苞萬物。」

③ 『後漢書』馬援列傳第十四「今見陛下、恢廓大度、同符高祖、乃知帝王自有真也。」

⑤ 【宏】大に廣の意あり。「宏材」①「宏智」②「宏辨」③「宏麗」④「宏壯」⑤。

① 『晉書』列傳第四十二郭璞「景純通秀、夙振宏材。」

② 蘇轍『上樞密韓太尉書』「聽其議論之宏辯、觀其容貌之秀偉。」

③ 王延壽『魯靈光殿賦』「文選」第十一「何宏麗之靡靡、咨用力之妙勤。」

④ 蘇軾『應制舉上兩制書』「伏惟明公才略之宏偉、度量之寬厚、學術之廣博、聲名之煒燁、冠於一時、而振於百世。」

⑤ 潘岳『西征賦』「蹈秦郊而始闢、豁爽塹以宏壯。」

【閱】内ひろきなり。

4〇おゆ  
老耆耄耄衰（五、三十一号裏）

【老】【耆】【耄】【耄】五十を「艾」といい①、六十を「耆」といい①、七十を「老」といい①、八十を「耄」といい②、九十を「頤」といい③、百歳を「期」といい④、八十九を「耄」といい④。されども老は總名なり。耆老の字、多く連用す。「耄」は大老の稱なり。易に「大耄」④という語あり。「耄」はらうまう「老耄」なり。「ほれたり」とよむ。又老の字、隱居することを「老す」⑤とも、「老を告ぐ」⑥ともいう。「文學に老す」「詩に老す」、皆老功のことなり。「師老す」⑦というは、長陣に

て軍兵のつよみぬけたるをいう。

- ①『禮記』曲禮上「五十曰艾、服官政。六十曰耆、指使。七十曰老、而傳。八十一、九十曰耄。百年曰期頤。」
- ②『說文解字』「年八十曰耄。从老省从至。」
- ③未詳。
- ④『易經』離「九三、日昃之離。不鼓缶而歌。則大耋之嗟。凶。」
- ⑤『左傳』隱公三年「桓公立、乃老」、杜注「老、致仕也。」
- ⑥『左傳』襄公七年「冬、十月、晉韓獻子告老。公族穆子有廢疾。」
- ⑦『左傳』僖公二十八年「軍吏曰、以君避臣、辱也、且楚師老矣、何故退。」

【衰】「おとろふる」とばかり心得れども、「衰病に堪ふ可けんや、決然として歸る」は老病なり。「衰顔」②は老顔なり。「鬢髮衰ふ」③は鬢髮老いるということなり。その本は素問に「四十にして陰氣自半にして起居衰ふ」④というより、四十を「衰」という。稽康が養生論に「衰を積みて白を成す」⑤というより、「衰白」⑥とも連用す。「白」はしらげなり。

- ①呉融『閨鄉寓居十首』阿對泉「六載抽毫侍禁闈、可堪衰病決然歸。五陵年少如相問、阿對泉頭一布衣。」
- ②蘇軾『浴日亭』「已覺蒼涼蘇病骨、更煩沆瀣洗衰顏。」
- ③賀知章『回鄉偶書』「少小離家老大回、鄉音無改鬢毛衰。」
- ④『素問』陰陽應象大論篇第五「年四十而陰氣自半也、起居衰矣。」
- ⑤稽康『養生論』「至於墮身失理、亡之於微、積微成損、積損成衰、從衰得白、從白得老、從老得終、悶若無端。」
- ⑥杜甫『收京』二「生意甘衰白、天涯正寂寥。」

5〇おもふ

思懷憶念想意惟以爲謂欲顧（六、初号表）

【思】「おもふ」と訓ず。大抵二種なり。一種は思慮なり、工夫思案することなり。「再思」①「三思」②「近思」③「慎思」④「無思無慮」⑤の類なり。一種は思慕なり、なつかしく思うことなり。「所思有り」⑥「春女は思ひ」⑦「去りて後常に思はらる」⑧「遙かに思ふ」⑨の類なり。この外に二種あり。論語の「九思」⑩は思欲の義なり。「思ひ邪無し」⑪は意念のことなり。この二種は後世の書には少なり。俗語に「相思」⑫といえは戀のことなり。或いは「想思」に作る。また「意思」と連用して、こころもちというほどの輕き詞に用いることあり。

- ①白居易『思舊』「閒日一思舊、舊遊如目前、再思今何在、零落歸下泉。」
- ②『論語』公冶長「季文子三思而後行、子聞之曰、再斯可矣。」
- ③『論語』子張「子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。」
- ④『禮記』中庸「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。」
- ⑤『莊子』天地「德人者、居无思、行无慮、不藏是非美惡。」
- ⑥『樂府詩集』卷十六「有所思」鼓吹曲辭一「有所思、乃在大海南。」
- ⑦『淮南子』繆稱訓「春女思、秋士悲、而知物化矣、注「春女感陽則思、愁士見陰而悲。」
- ⑧『漢書』何武王嘉師丹傳「其所居亦無赫赫名、去後常見思。」
- ⑨『楚辭』遠遊「步徙倚而遙思兮、招愉悅而永懷。」
- ⑩『論語』季氏「孔子曰、君子有九思。視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義。」
- ⑪『論語』爲政「子曰、詩三百、一言以蔽之。曰、思無邪。」
- ⑫『漢書』外戚傳第六十七上「又不得就視、上愈益相思悲感、爲作詩曰。」

【懷】「ふとこころ」という字、「いだく」という字なるゆえ、心にこめて思うことなり。「女子善んで懷ふ」①「女有り、春を懷ふ」②、皆中に思ひあることなり。「胸懷」③「襟懷」④「懷抱」⑤、皆胸中なり。

- ① 『詩經』 鄘風・載馳「陟彼阿丘，言采其蝻。女子善懷，亦各有行」。
- ② 『詩經』 召南・野有死麕「野有死麕，白茅包之。有女懷春，吉士誘之」。
- ③ 『三國志』 魏書・袁張涼國田王邴管傳第十一「娛心黃老，游志六藝，升堂入室，究其闡奧，韜士今於胸懷，包道德之機要」。
- ④ 張華『情詩』「襟懷擁虛景，輕衾覆空牀」。
- ⑤ 『後漢書』 張曹鄭列傳第二十五「寢則懷抱筆札」。

【憶】古は意の字を用いる。後來心傍を加える。記憶なり、おぼえて居ることなり。それより轉じて、思い出すことにも用いる。「憶ふ昔」「憶い得たり」の類なり。俗語には専ら記の字を覺えることに用いる。「記不得」、おぼえられぬ、「記得」、おぼえておる、「記得牢」、よくおぼえた。

【念】思の字より輕し。心にうかぶ念頭のことをも、又心に念頭のうかぶことをもいう。又思慕の義にも用いる。唐宋間の俗語なり。又口に唱えることなり。「念佛」①「念呪」②「念經」③など。小學に「書を念ずる」④というは、書をよむことなり。俗語小説の類に多し。

- ① 『觀無量壽經』「一一光明、遍照十方世界念佛衆聖、攝取不捨」。
- ② 『酉陽雜俎』卷二「不空每祈雨無他軌、則但設數繡座、手籤旋數寸木神、念呪擲之、自立於座上、伺木神、吻魚牙出、目瞋則雨至」。
- ③ 『正法眼藏』看經「しかあれども念經、看經、誦經、書經、受經、持經あり」。
- ④ 『小學』嘉言第五「明道程先生曰、憂子弟之輕俊者、只教以經學念書、不得令作文字」。

【想】心に従い相に従う。その形相を心にうつすことなり。佛書の「日想觀」①「水想觀」②など、又「想像」③、おもいやる、皆是れなり。又「思想」④「想思」⑤

「想慕」⑥、皆思慕の義なり。俗語には、おもい出すを「想出來」、おもい出だされぬを「想不出」、この時は憶の字に似たり。かくおもいを「這樣想」。

- ① 「日想觀」は「觀無量壽經」に見える十六觀法のひとつ。浄土を觀想するために西に向い、太陽が没するさまを觀想すること。
- ② 「水想觀」は「觀無量壽經」に見える十六觀法のひとつ。現実世界の水や水の清らかさを觀想することにより、仏国土の大地の清浄さを思い浮かべること。
- ③ 『楚辭』遠遊「思舊故以想像兮、長太息而掩涕」。
- ④ 曹植『盤石篇』「仰天長太息、思想懷故鄉」。
- ⑤ 『管子』内業「敬除其舍、精將自來、精想思之、寔念治之」。
- ⑥ 方孝孺『送河南僉事湯侯』「闔境數千里之地、莫不稱其美、而想慕其爲人」。

【意】計較往來の念を「意」というより轉じて、活用すれば、「おもふに」、又「うたがふ」とよむ。「意者」おもふには疑うらくは是れの義なり。「每意」つねにうたがふは毎に怪しむ、毎に疑うの義なり。「其の盜を爲すかと思ふ」。

【惟】「伏惟」①「恭惟」②「惟夫」など、發端に用いる助語なり。最初にこの字を置きて、そのおもふことを下に書くなり。義は「以爲」の二字ほどのことなり。また「思惟」③「忖惟」④というときは助字に非ず、重く用いたるなり。思慮の義なり。

- ① 李密『陳情表』「伏惟、聖朝以孝治天下」。
- ② 『唐國史補』卷上「先符渭南縣尉張造、造批其牒曰、……恭惟此樹、其來久遠」。
- ③ 『漢書』董仲舒傳第二十六「思惟往古、而務以求賢」。
- ④ 『正法眼藏』法華轉法華「文殊の惟付すみやかに彌勒に授記する法華轉あり」。

【以】【爲】【謂】「伏以」①「恭以」「以夫」というときは、惟の字と全く同じ。その外には「以爲」と運用して、「おもへり」とよむ。こうじやとおもうことなり。「聖なり」と以爲へり、聖人じやとおもうたなり。「盗なり」と以爲へり、盗じやとおもうたなり。やはり「以て聖と爲すなり」「以て盗と爲すなり」という義なり。間に字をはさむときも同じ。「月を鏡と以爲へり」、かくの如し。又謂の字を用いても同じ事なり。「謂て盗なり」と爲すなり。「盗なり」と謂爲へり「月を謂て鏡と爲す」「月を鏡と謂爲へり」。又謂の字ばかりを用い、爲の字ばかりを用いることもあり。皆同義なり。「意に以へり」「意に謂へり」。

①韓愈『潮州刺史謝上表』「伏以、大唐受命有天下、四海之内、莫不臣妾、南北東西、地名萬里」。

【欲】「おもふ」とよむとき、やはりほつするなり、かくしたきとおもうことなり。「ほつする」という訓は、もと「ほりする」なり。萬葉集に見える①。「ほりする」とは、ほしきということなり。字義にかまわぬことなれども、事の序ついでに記するなり。又將の字の義にて、「す」とよむことあり、「ほつする」には非ず。混ずることなかれ。又「將欲」二字にて、すなり、かくあらんとするなり。「求め欲す」「欲し求む」「求め欲す」、この類、二字連合して義を成す。「求めんと欲す」「欲せんと欲す」などと分讀すべからず。人多く誤るなり。

①『萬葉集』三四〇「古への七の賢しきひとたちもほりせしものは酒にあるらし」。

【顧】「顧ふに夫れ」「施爲如何んと顧るのみ」、この類「おもふ」とよむ。やはり回顧の義を活用したるものなり。

6〇おごる

奢驕 侈 倨 傲 泰 夸 誇 矜 (六、廿七号裏)

【奢】おごる。儉の反対なり。衣服・宮室・飲食・車馬、何にても美麗を好むをいう。

【驕】おごる。謙の反対なり。心の満ちて高ぶるなり。「馬驕」①とは、豆のすぎたる馬のていなり。「草白くして狐兔驕る」②とは、秋の末、狐兔の類のきおうをいう。

①杜甫『秦州雜詩二十首』三「馬驕朱汗落、胡舞白題斜」。  
②王昌齡『城傍曲』「秋風鳴桑條、草白狐兔驕」。

【侈】おごる。約の反対。張大の義なり。よせいをするなり。「奢侈」①「驕侈」②「侈泰」③。

①『墨子』辭過第六「其君奢侈而難諫也」。  
②『左傳』成公十七年「曰、君驕侈而克敵、是天益其疾也、難將作矣」。  
③『韓非子』六反第四十六「夫富家之愛子、財貨足用、財貨足用則輕用、輕用則侈泰」。

【倨】おごる。恭の反対なり。人に交わるに、禮法に超えて高ぶるなり。「貴倨」①「倨傲」②、おごへいなり。

①『宋史』列傳第七十牟子才「力士方貴倨、豈甘以奴隸自處者」。  
②『莊子』漁父「夫子猶有倨傲之容」。

【傲】人を輕んずるなり。「傲世」①とは世を見下すことなり。「傲吏」②は世間をそまつにする吏なり。總じて奉公人は世間を第一にするものなるに、一種かくの如き輩あり。

①夏侯湛『東方朔書贊序』「文選」第四十七「苟出不可以直道也、故頡頏以

傲世、傲世不可以垂訓也、故正諫以明節。

②郭璞『遊仙詩十九首』一『文選』第二十一「漆園有傲吏、萊氏有逸妻」。

【泰】「おごる」とよむ。大抵侈奢の義を兼ねたるようなり。傲慢の意なし。ただ大やう、大ていなる意なり。太甚なる意より用いたる字なり。

【夸】【誇】「ほこる」。同字なり。我を自滿するなり。多く言語の上に用いる。

【矜】「ほこる」。我れを自滿するなり。誇の字に似て、言語に限らず。驕の字に似て、「驕」は氣のうわもり「のぼせる」たるばかりにて、自滿の義なし。

7〇おごたる

懈惰 怠慢 弛倦 劬 (六、廿八号裏)

【懈】【惰】共に「おごたる」と訓ず。勤の反對にて、精を出さぬなり。

【怠】【慢】【弛】ともに「おごたる」と訓ず。敬の反對なり。氣のはりのなきなり。

【弛】は弓をはぶすより轉用す①。

①『說文解字』「弛、弓解絃也、从弓也聲」。

【倦】【劬】同字なり。「うむ」と訓ず。草臥れるなり。

8〇おそる

恐懼 畏怖 怕惶 惕慄 懼慄 悚竦 悸惴 怯懦 嚇 (六、三十一号裏)

【恐】未來をおそれるなり。故に助語のように轉用して、大形かくあらんと末をきぶかうことに、「恐くは此の如し」と用いる。義廣し。

【懼】已來をおそれるなり。故に「おそらくは」というには用いず。

【畏】おそれるの甚しきなり。「畏忌」①「畏服」②と連用す。藥に「相畏」③あり、「相忌」④あり。「相忌」は嫌うまでのことなり、「相畏」は全くその藥性を奪うものなり。中庸に「大いに民の志を畏れしむ」⑤、これも畏れ服する意あり。又古は威の字と通用す。「天の明畏」⑥といえは、畏を威に用いる。「天威は忱に斐す」⑦といえは、威を畏に用いる。これなども畏服の義ある證なり。和訓に「かしこまる」とよむも、おそれかがむ氣味ある故なり。「可畏」というときは、「可恐」などより重きなり。由に従い爪に従う字なり⑧。「由」は鬼頭なり⑨、「爪」はつめなり。恐懼より甚しきこと知る可し。

①『詩經』大雅・蕩之什・桑柔「匪言不能、胡斯畏忌」。

②『漢書』魏相丙吉傳第四十四「後選河南太守、禁止姦邪、豪彊畏服」。

③『神農本草經』序錄「有單行者、有相須者、有相使者、有相畏者、有相惡者、有相反者、有相殺者、凡此七情、合和視之」。

④紀昀『閱微草堂筆記』「醫家同類皆相忌、務改前醫之方、以見所長」。

⑤『禮記』大學「無情者、不得盡其辭、大畏民志」。

⑥『書經』皋陶謨「天明畏、自我民明威」、蔡傳「威、古文作畏、二字通用、明者顯其善、畏者威其惡」。

⑦『書經』康誥「王曰、嗚呼、小子封、恟慄乃身、敬哉。天畏棗忱、民情大可見」。

⑧『說文解字』「畏、惡也、从由虎省、鬼頭而虎爪可畏也」。

⑨『說文解字』「由、鬼頭也、象形」。

【怖】畏の字と同義なり。俗語字なり。後世の書にあり。今俗語にはあまり用いず。「小兒を怖す」。

【怕】俗語に恐の字と同義なり。然れども義廣し。俗語にはこの一字にて大形おおかたすむなり。

【惶】「おののく」と訓ず。おそれあわてるなり。「惶恐」①は天子に對していう詞なり。和俗あまねに普く用いるは誤りなり。

①『漢書』武五子傳第三十三「久之、巫蠱事多不信。上知太子惶恐無他意、而車千秋復訟太子冤」。

【惕】おそれ驚くなり。

【慄】おそれふるえるなり。「戰慄」①。又栗の字をも用いる。

①『後漢書』孝明八王列傳第四十「橫賞赦臣、戰慄連月、未敢自安」。

【懼】【讐】同字なり。「恐懼して志を失するなり」と注す。おそれて動轉することなり。

【悚】【竦】同字なり。おそれて身をすくめるなり。

【悸】むねさわくなり。おそれることにも用いる。然れどもおそれるには限らず。

【惴】憂懼なり。

【怯】臆病なることなり。轉用して、「おそるる」とよむ。「怯冷」①「怯風」②な

ど、病人か婦人などの氣弱く膚薄き故に、少しの風冷をつよく覺える意に用いる。

①沈愚『金井怨』「牽絲猶怯冷、照影却含羞、獨立梧桐月、芳心不奈秋」。

②徐鉉『歐陽太監雨中視決堤因墮水明日見於省中因戲之』「衣濕仍愁雨、冠欹更怯風」。

【懦】「怯懦」①と連用して、臆病なることなり。「おそるる」とはよまず。

①『韓非子』說難第十二「略事陳意則曰、怯懦而不盡」。

【嚇】ものをおどす聲なり。故に總じておどすことに用いる。「かがやく」「かかなく」などいう訓は誤まれり。

9〇おどろく

驚駭愕脅劫（六、三十三号表）

【驚】「おどろく」。訓の如し。義廣し。俗語には「喫驚キケンリヤウ了」キリヤウイケン「喫了一驚」という。

【駭】【愕】「おどろく」なり。驚の字よりは重きなり。駭より愕は又重し。聲音の別なり。

【脅】【劫】同字なり。「おびやかす」とよむ。おどすことには非ず、威力を以て人を制して、我に従わしむるなり。又濫妨どりをする「略奪する」ことにも用いる。

10〇おろか

愚蚩侗癡蠢驢駘魯頑駑鈍拙怯懦孱（六、四十号表）

【愚】「おろか」と訓ず。智の反對なり。分別料簡のなきをいう。泛用して常言の「ば

か」「あほう」というようにも用いる。又桀紂を「下愚」①といえるは、根の分別なきを主としていう、子羔を「愚」といえる②は、暗きを主としていう。「朱愚」③というは、一點の智なきをいう。又自稱なり④。

①『漢書』古今人表第八「桀紂、龍逢、比干欲與之爲善則誅、于莘、崇侯與之爲惡則行。可與爲惡、不可與爲善、是謂下愚」。

②『論語』先進「柴也愚。參也魯。師也辟。由也喭」。

③『莊子』庚桑楚「南榮趺曰、不知乎。人謂我朱愚。知乎。反愁我軀」。

④諸葛亮『出師表』「愚以爲、營中之事、事無大小、悉以盜之、必能使行陣和睦、優劣得所」。

【蚩】【侗】「蚩々侗々」は愚なる貌なり。「蚩々」①は多くは愚民のことに用いる。「侗々」②は内に何もなき意なり。

①『詩經』衛風・氓「氓之蚩蚩、抱布貿絲、匪來貿絲、來即我謀」、「集傳」「蚩、無知之貌。蓋怨而鄙之也」。

②『寒山詩』百十「或有衡行人、才藝過周孔、見龍頭兀兀、看時身侗侗」。

【癡】「おろか」と訓ず。黠の反對なり。利巧になきなり。愚とは別なり。利巧にても、分別なきを「愚」というなり。「白癡」①というときは、一點の才智なきをいう。

①『左傳』成公十八年「周子有兄而無慧」、杜注「不慧、蓋世所謂白癡」。

【蠢】「蠢愚」①と連用して、至愚をいう。

①『儀禮』士昏禮「某之子蠢愚、又弗能教」。

【戇】「おろか」と訓ず。「戇直」①「戇愚」②と連用す。拙直の意に多く用いる。

①元稹『酬東川李相公十六韻』「戇直撩忌諱、科儀懲傲頑」。

②賈島『讓糾曹上樂使君』「戇愚兼抱疾、權紀不相應」。

【駘】「おろか」と訓ず。「愚駘」①「癡駘」②と連用す。癡愚を兼ねたるなるべし。

①『北史』列傳第三魏諸宗室「帝大怒、詔曰、阿倪愚駘、誰引爲郎」。

②『周禮』秋官・司刺「蠢愚、鄭注「蠢愚、生而癡駘、董氏者」」。

【魯】「おろかなり」と訓ず。鈍なることなり。敏穎の反對なり。にぶきをいう。才智のはたらきのおそきなり。

【頑】かたくななり。「にぶし」と訓ず。霊の反對なり。塊や土などのように、通じのうときをいう。「心、徳義の經に則らざるを頑と曰ふ」①と左傳にあるは、道の方に不通事なることなり。病にて痛痒をしらぬを「頑麻」②という。これにて字義明らかかなり。又俗語にあそびを「頑耍」<sup>ワシヤ</sup>という。「玩耍」なり。同音の字を借りるなり。

①『左傳』僖公二十四年「耳不聽五聲之和爲聾、目不別五色之章爲昧、心不則徳義之經爲頑、口不道忠信之言爲嚚」。

②唐庚『冬雷行』「龍蛇尺蠖踞已久、亦欲奮迅舒頑麻」。

【篤】「にぶし」とよむ。馬の下品をいう。「篤鈍」①など連用す。生れ付きの下品なることなり。

①諸葛亮『出師表』「庶竭篤鈍、攘除姦凶、興復漢室」。

【鈍】「にぶし」とよむ。利敏の反對なり。利と對するとき、「利刀」①「鈍刀」②など、刀のにぶきなり。敏と對するとき、生質のどんなるなり。どんというはあながちに愚癡なるにも限らず、伶俐ならず、才知のはしあかなく「機敏ではない」となり。

①『孔叢子』陳士儀「秦王得西戎利刀、以之切玉、如割水焉」。

②李商隱『雜纂』第十七不快意「鈍刀切物、破帆使風」。

【拙】「つたなし」とよむ。巧の反対なり。無調法なることなり。

【怯】【懦】「つたなし」とよむ。勇の反対なり。憶病なることなり。前に見える。

【孱】「つたなし」とよむ。怯弱の義なり。

11〇おもんばかり

慮 臆 億 怨 (六、四十七号裏)

【慮】「おもんばかり」。「思慮」①と連用す。「思」は思案工夫なり、「慮」は思案工夫の精詳なるなり。分別と譯すべし。故に慮は又「謀慮」②「智慮」③と連用す。死字になるなり。又「遠慮」④などはきづかう意あるに似たり。思い運めぐらしなり。

①『禮記』祭義「是故愨善不違身、耳目不違心、思慮不違親」。

②『韓非子』亡微第十五「簡法禁而務謀慮、荒封内而恃交援者、可亡也」。

③『荀子』榮辱「德行致厚、智慮致明、是天下之所以取天下也」。

④『左傳』襄公二十八年「君子有遠慮、小人從適、飢寒之不恤、誰遑恤其後」。

【臆】【億】「おもんばかり」と訓ず。心にて計度する義なり。

【怨】「おもんばかり」と訓ずれども、大いに殊なり、思いやりのことなり。「宥怨」

①と連用するときにはゆるす意あり。思いやりの心より用捨することなり。

①王珪『仁宗皇帝加上徽號冊文』「爾乃簡拔俊賢、放遠邪佞、宥怨刑獄、懷保鰥寡、賞不徇所私、罰必當於理」。

12〇おもむく

赴 趣 趨 歸 旨 (後一、十六号裏)

【赴】「おもむく」とよむ。そのところへ行きかかるきみなり。元來「はしる」とよむ字なり。喪をつけることに用いる①。左傳にあり。計と同じ。

①『左傳』隱公七年「七年、春、滕侯卒。不書名、未同盟也。凡諸侯同盟、於是稱名、故薨則赴以名、告終、稱嗣也、以繼好息民、謂之禮經」。

【趣】どこへと一とこころ心がけて走りゆくことなり。故に「おもむく」とよむ。「志

趣」①と連用す。何ぞ一つ心がけてその方へ向う意なり。「おもむき」とよむときは、

「幽趣」②「雅趣」③の類なり。様子もようという意なれども、その方へだんだん

ふりむいてゆくこころもちなり。

①『晉書』列傳第十九阮修「梁國張偉、志趣不常、自隱於屠釣」。

②李收『和中書侍郎院壁畫雲』「映筱多幽趣、臨軒得野情」。

③江總『修心賦』「果叢藥苑、桃陰橋林、梢雲拂日、結暗生陰、保自然之雅趣」。

【趨】「はしる」というより、「おもむく」とよむ。趣の字と同じ。そのうち趨の字は、あちらこちらへちよこちよこふりむいて行くことなり。

【歸】「おちつき處へさいてゆくことなり。「水、海に歸く」①。これ「おもむく」とよむ時は、大氏趨・趣と同じ。易經に「途を殊にして歸を同じくす」②、是れなり。

①左思『京都賦』『文選』卷五「百川派別、歸海而會」。

②『易經』繫辭傳下「子曰。天下何思何慮。天下同歸而殊塗。一致而百慮。天下何思何慮」。

【旨】「旨趣」①と連用す。そのことにうまみのあることなり。「むね」とよむ。「を



もむき」と訓ず。「あじわい」と譯してよし。

① 嵇康『琴賦』『文選』卷十八「覽其旨趣、亦未達禮樂之情也」。

13〇おふ

追 逐 趁 趕 從 (後一、十七号表)

【追】「をふ」とよむ。あとからおいかけおいつくなり。「追從」①「追隨」②と連用す。あとについてゆく意を帯びる。「追懷」③は往きすぎたる事をおいおもうなり。

① 『後漢書』吳延史盧趙列傳第五十四「安丘追蹤於膠東得之」。

文徵明『晚雨飲子重園亭』「高齋落日偶追從、樽酒淹留一笑中」。

② 『後漢書』黨錮列傳第五十七「馥避不與語、靜追隨至客舍共宿」。

③ 『後漢書』列女傳第七十四「後感傷亂離、追懷悲憤、作詩一章」。

【逐】大氏追と同じ。物を追う意あり。「逐一」①はひとつひとつをおうなり。ものをおいのける意あるなり、ついてゆく意はなきなり。

① 蘇軾『與程正輔四十七首』十「令本州知州職官都監子細勘會、逐一指揮去處乃少營房數目、子細畫開具」。

【趁】「趁」は詩中に多く用いる①。追いかけてふむなり。故にすかさず追う意なり。

① 杜甫『催宗文樹雞柵』「驅趁制不禁、喧呼山腰毛」。

【趕】俗語に多し。逐と大氏同じ。

【從】「をふ」とよむ。そのあとへついてゆく意なり。獸などをおいまわすに多く用いる。

14〇おす

推 盪 押 壓 按 切 排 擠 抑 壓 (後一、四号表)

【推】わきからおしやることなり。「門を推す」「戸を推す」などは、おしひらく意なり。そろそろとおして行くことなり。但し手にておすは「タイ」の音なり。「推量」「推考」①の時は「スイ」の音なり。これも手にておす意にて、たんたんせんさくして行くことなり。

① 『後漢書』方術列傳第七十二上「加以少膺儒雅、韜含大籍、推考星度、綜校圖錄」。

【盪】蕩と同じ。力ちからでむりにおしやり、おしなぐる意なり。論語に「昇、舟を盪す」①、易經に「八卦相盪」②の類なり。「あらふ」とよむ時、大水のおしこくり「押しとおす」、おしながす意なり。

① 『論語』憲問「南宮适問於孔子曰、羿善射、臯盪舟、俱不得其死然」。

② 『易經』繫辭傳上「是故剛柔相摩、八卦相盪、鼓之以雷霆、潤之以風雨」。

【押】壓の字と同義なり。されどもおすということには多くは用いず。「花押」①というは、かき判のことなり。「簽押」「押署」②というは、名判をすることなり。「管押」「押事」というは、そのことを支配し、その事をしめることなり。「押韻」③というは、詩に韻字をふむことなり。

① 『唐國史補』卷下「宰相判四方之事有堂案、處分百司有堂帖、不次押名曰花押」。

② 『舊唐書』列傳第六十二李峴「縱有敕、輔國押署、然後施行」。

③ 『捫蝨新話』「韓退之詩出謂押韻之文耳、自有一種風韻」。

【壓】上からおすことなり。おしつけおもりにかかる意なり。廣き字なり。「鎮壓」

①「彈壓」②などと連ず。

- ①『晉書』列傳第十二唐彬「今諸軍已至、足以鎮壓内外、願無以爲慮」。  
 ②『淮南子』本經訓「太一者、牢籠天地、彈壓山川、含吐陰陽、伸洩四時」。

【按】手にてしかとおさえることなり。「劔を按ず」①は刀の柄に手をかけることなり。「行を按ず」②は行列をしかとして、みだりにかけはしらせぬことなり。音楽に「按節奏」というは、ふしはかせ「節博士」ををりて、拍子にちがわぬ様にすることなり。それより轉用して、物を吟味することをも「按ず」という。「按驗」③「按察」④などの按なり。

- ①『史記』平原君虞卿列傳第十六「毛遂按劍歷階而上」。  
 ②司馬相如『子虛賦』「將息獠者、擊靈鼓、起燧燧、車按行、騎就隊」。  
 ③『漢書』蒯伍江息夫傳第十五「收繫其父兄、按驗、皆棄市」。  
 ④『後漢書』志第二十八百官五「凡有賊發、主名不立、則推索行尋、按察姦宄、以起端緒」。

【切】しつかりとつよくおすことなり。史記扁鵲に「脈を切<sup>き</sup>ことを待たず」①。  
 ①『史記』扁鵲倉公列傳第四十五「終日、扁鵲仰天歎曰、夫子之爲方也、若以管窺天、以邳視文。越人之爲方也、不待切脈望色聽聲寫形、言病之所在」。

【排】おしのけることなり。「安排」①というときは、ものをならべることなり。初編にくわし。

- ①謝靈運『晚出西射堂』「安排徒空言、幽獨賴鳴琴」。

【擠】おしおとすことなり。「膿を擠す」などは、腫物のうみをおし出すことなり。

【抑】揚と對す。おさえてとめる意なり。

【擊】指にておすことなり。莊子に「擊其顛顛」①は頰なり。又元稹の連昌宮辭に「李謩擊笛傍宮牆」②は、笛の穴を指にておさえることなり。多く笛のことに用いる。白居易が霓裳羽衣歌に「擊擗」③と用いたるも、「擊」は太鼓をうつなり、「擗」は笛の穴をおすことより、吹くことに使う。擗・擗と同じ。

- ①『莊子』外物「接其鬢、擊其顛、而以金椎控其頤」。  
 ②元稹『連昌宮詞』「李謩擊笛傍宮牆、偷得新翻數般曲」。  
 ③白居易『霓裳羽衣歌』「磬聲箏笛遞相擗、擊擗彈吹聲遞迤」。

15〇おふ

荷 擔 負 戴 任 (後二、十五号表)

【荷】「になふ」とよむ。負・擔とも通じるなり。兩方にものをにおいてになうことなり。

【擔】「になふ」とよむ。肩にかつぐことなり。「擔子」とは、にない棒のことなり。

【負】背におうなり。

【戴】首にささげるなり。

【任】負にても、載にても、擔にても、何によらず、荷物をもつことなり。詩經に「我れ任じ我れ輦す」①、禮記に「輕任并し、重任分つ」②の類なり。「天任」③「職任」④は役目なり。「天下に任ず」⑤「道に任ず」⑥などは、我が役目にすることなり。

- ①『詩經』小雅・魚藻之什・黍苗「我任我輦、我車我牛。我行既集、蓋云歸」。

哉」。

②『禮記』王制「父之齒隨行、兄之齒雁行、朋友不相踰。輕任并、重任分、斑白者不提挈」。

③『左傳』成公十六年「鍼曰、書退、國有大任、焉得專之」。

④『史記』秦始皇本紀第六「初平法式、審別職任、以立恆常」。

⑤『史記』淮陰侯列傳第三十三「今大王誠能反其道、任天下武勇、何所不誅」。

⑥劉登虛『積雪爲小山』「飛雪伴春還、春庭曉自開。虛心應任道、遇賞遂成山」。

16 ○おくる

餽 遺 歸 貽 贈 饋 餼 餉 餽 問 送 贈 (後一、三十号表)

【餽】【遺】【歸】【貽】【贈】大氏同意なり。何によらず、人にもものをおくることなり。さのみ差別なし。そのうち「餽」はすべて音物「贈り物」をする物名となる。廣き字なり。孟子に「兼金二百を餽る」①の類なり。「遺」はおくつておいてくる意あるなり。詩經に「政事一埤、我に遺る」②、左傳に「請ふ、以て之を遺る」③、又「羹を以て母に遺る」④、前漢に「歸りて細君に遺る」⑤、蜀志に「司馬懿に巾幗を遺る」⑥の類なり。「歸」はおくりつけてくる意なり。論語に「齊人、女樂を歸る」⑦、又「孔子に豕を歸る」⑧、晉語に「敢て諸を下執政に歸る」⑨の類なり。「貽」はおくつて向うへのこす意なり。詩經に「我に彤管を貽る」⑩、又「人の貽を美とす」⑪、左傳に「書を鄭の子産に貽る」⑫の類なり。「贈」はおくつて向うのものをます意なり。詩經に「雜佩以て之を贈る」⑬、又「以て申伯に贈る」⑭、禮記に「何を以て我に贈る」⑮、家語に「子貢をして驂を脱して之を贈らしむ」⑯の類なり。「詩文を贈る」⑰は、向うの才徳を稱し益す意なり。故にこの字を用いる。注疏に「之に言を贈るは、行をして義に増さしむ」⑱とあり。貽の字と同じことに通用すれども、意味はかわるなり。

①『孟子』公孫丑下「陳臻問曰、前日於齊、王餽兼金一百、而不受。於宋、

餽七十鎰而受」。

②『詩經』邶風・北門「王事敦我、政事一埤遺我、我入自外、室人交遍摧我」。

③『左傳』宣公二年「初、宣子田於首山、舍于翳桑、見靈輒餓、問其病。曰、不食三日矣。食之、舍其半。問之。曰、宦三年矣、未知母之存否、今近焉、請以遺之」。

④『左傳』隱公元年「遂置姜氏于城穎、而誓之曰、不及黃泉、無相見也。既而悔之。穎考叔爲穎谷封人、聞之、有獻於公。公賜之食。食而舍肉。公問之。對曰、小人有母、皆嘗小人之食矣、未嘗君之羹、請以遺之。公曰、爾有母遺、絜我獨無」。

⑤『漢書』東方朔傳第三十五「割之不多、又何廉也。歸遺細君、又何仁也」。

⑥『晉書』帝紀第一宣帝「亮數挑戰、亭不出、因遺帝巾幗婦人之飾」。

⑦『論語』微子「齊人歸女樂。季桓子受之。三日不朝。孔子行」。

⑧『論語』陽貨「陽貨欲見孔子。孔子不見。歸孔子豚。孔子時其亡也、而往拜之。遇諸塗」。

⑨『國語』晉語五「寡君使克也、不腆弊邑之禮、爲君之辱、敢歸諸下執政、以愍御人」。

⑩『詩經』邶風・靜女「靜女其變、貽我彤管。彤管有煒、說懌女美」。

⑪『詩經』邶風・靜女「自牧歸荑、洵美且異。匪女之爲美、美人之貽」。

⑫『左傳』昭公六年「三月、鄭人鑄刑書、叔向使詒子產書」。

⑬『詩經』鄭風・女曰鷄鳴「知子之來之、雜佩以贈之」。

⑭『詩經』大雅・蕩之什・崧高「吉甫作誦、其詩孔碩、其風肆好、以贈申伯」。

⑮『禮記』檀弓下「子路去魯。謂顏淵曰、何以贈我」。

⑯『孔子家語』曲禮子夏問「孔子適衛、遇舊館人之喪、入而哭之哀。出、使子貢脫驂以贈之」。

⑰杜甫『哭李常侍嶂』二「次第尋書札、呼兒檢贈詩」。

⑱『詩經』大雅・崧高「吉甫作誦、其詩孔碩、其風肆好、以贈申伯」、疏「凡

贈遺者、所以增長前人、贈之財、使富増於本、贈之言、使行増於善、故云贈増也。

かの部

【饋】食物をおくるなり。「饋」は生ものをおくることなり①。

①『國語』周語中「虞人獻饋」、注「生曰饋、禾米也」。

【餉】田野へ食物をおくるなり①。

①『説文解字』「饋、餉田也、从食盍聲」。

【問】音物をしておとづれをするなり。左傳に「衛侯、弓を以て子貢に問らしむ」

①、詩經に「雜佩以て之に問る」②の類なり。

①『左傳』哀公二十六年「衛出公自城鉏、使以弓問子貢、且曰、吾其入乎。」

子貢稽首受弓、對曰、臣不識也。

②『詩經』鄭風・女曰鷄鳴「知子之順之、雜佩以問之」。

【送】「行に贈るを送と曰ふ」①と注す。「送迎」②と對用す。遠近にかかわらず人

をおくるなり。又行につけて、ものをおくるにも用いる。又「目送」③は目でみお

くることなり。

①『正字通』酉集下「贈行曰送」。

②『左傳』僖公二十二年「婦人送迎不出門、見兄弟不踰闕」。

③『左傳』桓公元年「宋華父督、見孔父之妻於路、目逆而送之、曰、美而豔」。

『史記』留侯世家第二十五「四人爲壽已畢、趨去。上目送之、召戚夫人指

示四人者曰、……」。

【贈】死者にもものをおくることなり①。

①『春秋穀梁傳』隱公三年「歸死者曰贈、歸生者曰賻」。

10かたし

剛 堅 固 硬 牢 確 鞫 鞏 強 勁 難 叵 (一、廿号表)

【剛】「こはし」「かたし」と訓ず。柔の反對なり。「氣剛」①「金剛」②「徳性剛なり」。人の氣質の「剛猛」③「剛勇」④「剛烈」⑤、皆過剛なることなり。「春秋方剛」⑥とは、年のさかりなることなり。

①柳宗元『與崔連州論石鍾乳書』「幽關不聰、心煩喜怒、肝舉氣剛、不能和平」。

②『晉書』志第四地理上「梁州、梁者、言西方金剛之氣強梁、故因名焉」。

③『漢書』蓋諸葛劉孫母將何傳第四十七「我以柔弱徵、必選剛猛代」。

④『鄧析子』轉辭「尊貴無以高人、聰明無以籠人、資給無以先人、剛勇無以勝人」。

勝人」。

⑤『後漢書』吳廷史盧趙列傳第五十四「夫剛烈表性、鮮能優寬、仁柔用情、

多之貞直」。

⑥『漢書』宣元六王傳第五十一「朕惟王之春秋方剛、忽於道德」。

【堅】脆の反對なり。「かたし」と訓ず。かたくして破れず、折れざることなり。「堅

強」①「堅牢」②「堅固」③と連用するもこれなり。「堅石」④「堅冰」⑤「堅木」

⑥「城堡」⑦「甲節堅」⑧「操堅」⑨「心志堅」⑩、皆堅固にして破れがたき意な

り。「鑽れども彌い堅し」⑪も同じ。「乘堅」⑫とは堅固なる車にのるなり。「堅を

被る」⑬はよろいをきるなり。「堅坐」⑭は坐禪などするに、久しく坐して、みだり

に坐をほぐさぬなり。「中堅」⑮は旗本備えなり。中央に在りてとりわけ堅固を貴ぶ

ゆえなり。

- ①『老子』第七十六章「人之生也柔弱，其死也堅強。」  
 『左傳』成公九年「范文子曰、勤以撫之、寬以待之、堅彊以御之。」  
 ②王符『潜夫論』務本「物以任用爲要、以堅牢爲資。」  
 蘇軾『謝人見和前篇』「也知不作堅牢玉、無奈能開頃刻花。」  
 ③『韓非子』解老「故臨兵而慈於士吏、則戰勝敵、慈於器械、則城堅固。」  
 ④『韓非子』外儲說左上「今厚而無竅、則不可剖以盛物、而任重如堅石、則不可以剖而以斟、吾無以瓠爲也。」  
 ⑤『易經』坤「初六、履霜堅冰至。」  
 『列子』湯問第五「及冬而叩徵弦、以激蕤賓、陽光熾烈、堅冰立散。」  
 ⑥『魏書』列傳第五十六甄琛「凡使人攻堅木者、必爲之擇良器。」  
 ⑦『後漢書』耿弇列傳第九「弇視西安城小而堅、且藍兵又精。」  
 ⑧未詳。  
 ⑨東方朔『怨思』「內自省而不慙兮、操愈堅而不衰。」  
 ⑩『佛說菩薩逝經』「釋便叉手、報逝言、卿持心志堅、乃念欲求佛不止、卿亦會得待佛。」  
 ⑪『論語』子罕「顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。」  
 ⑫『後漢書』皇后紀第十上「今末世貴戚食祿之家、溫衣美飯、乘堅驅良。」  
 ⑬『漢書』高祖紀第一下「朕親被堅執銳、自帥士卒、犯危難、平暴亂。」  
 ⑭『國朝漢學師承記』閻若璩「漏四下、寒甚、堅坐沈思、心忽開朗。」  
 ⑮『後漢書』光武帝紀第一上「光武乃與敢死者三千人、從城西水上衝其中堅」、  
 注「凡軍事、中軍將最尊、居中以堅銳自輔、故曰中堅也。」
- 【固】「かたし」とよめども、形のかたきに非ず。ただ破れがたく、くづれがたきとなり。元來「四塞なり」①と注せる字なり。國の四方の要害なり。「山河の固め」②「金城の固め」③「險固」④、皆要害なり。故にかたための堅固にて破れぬ意に用いる。金石などのかたきに非ず。それにまかはしき「まぎらわしい」ことあり。「人

生忽として寄するが如し、壽、金石の固無し」⑤という句あり。これは固の字、壽へかかりて、金石へかからず、堅剛の義には非ざるなり。「根を深くし蒂を固くす」⑥「聖人の身を藏す所以の固めなり」⑦。「膠固」⑧は膠にてつけたることく堅固なるなり。「固く求む」⑨「固く請ふ」⑩「固く辭す」⑪、皆せひせひといいて變ぜぬ意なり。「固疾」⑫は何としても愈えぬ疾なり。痼にも作る。「固陋」⑬「固滯」⑭、皆とどこおり泥みて移らぬ意なり。又「もとより」とよむは、故の字と同音にて通じるゆえなり。各別のことなり。

- ①『說文』「固、四塞也、从口古聲。」  
 ②『史記』孫子吳起列傳第五「顧而謂吳起曰、美哉乎山河之固、此魏國之寶也。」  
 ③『漢書』賈鄒枚路傳第二十一「太后厚德長君、入於骨髓、而長君之弟幸於兩宮、金城之固也。」  
 ④『後漢書』第五鍾離宋寒列傳第三十一「倫乃依險固築營壁。」  
 ⑤『古詩十九首』十三「人生忽如寄、壽無金石固。」  
 ⑥『晉書』列傳第十六劉頌「若乃兼諸侯而樹藩屏、深根固蒂、則祚延無窮、可以比跡二代。」  
 ⑦『禮記』禮運「降於五祀之謂制度、此聖人所以藏身之固也。」  
 ⑧王符『潜夫論』務本「器以事爲善、以膠固爲上。」  
 ⑨『史記』貨殖列傳第六十九「曲辰工商賈畜長、固求富貴貨也。」  
 ⑩『史記』高祖本紀第八「十餘日、高祖欲去、沛父兄固請留高祖。」  
 ⑪『書經』大禹謨「禹拜稽首固辭。」  
 ⑫『禮記』月令「季冬行春令、則胎夭多傷、國多固疾」、注「生不充性、有久病也。」  
 ⑬司馬相如『上林賦』『文選』卷八「鄙人固陋、不知忌諱。」  
 ⑭朱熹『大學或問』「不知衆理之妙而無以窮之、則偏狹固滯而無以盡此心之全。」

【硬】軟の對なり。俗語に多く用いる。堅固にしてやぶれぬ意なし。又金石のかたきようなるにも限らず、何にも一切のかたきに用いる。「天寒くして膏硬し」①とは膏藥の硬きなり。大便の硬きにも用いる。傷寒論に硬の字あり。同じことなり。飯のことに「冷硬」ということあり。昏に「硬黄」②あり。もつとも「石硬」③「骨硬」④にも用いる。

①『唐語林』雅量「韓皋爲京兆尹、…在夏口、嘗病小瘡、令醫傅膏不濡。公問之。醫云、天寒膏硬。公笑曰、韓皋實是硬」。

②蘇軾『次韻秦觀秀才見贈秦與孫莘老李公擇甚熟將入京應舉』「新詩說盡萬物情、硬黃小字臨黃庭」。

③『傷寒論』辨太陽脈證并治下「傷寒六七日、結胸熱實、脈沈而緊、心不痛、按之石硬者、大陷胸湯主之」。

④『史記』吳太伯世家第一「方今吳外困於楚、而內空無骨鯁之臣」。

【牢】「堅牢」①「牢固」②「牢くして抜く可からず」③「氷牢くして渡る可し」④、大抵固の字の義なり。

①蘇軾『謝人見和前篇』二首二「也知不作堅牢玉、無奈能開頃刻花」。

②『顏氏家訓』歸心「但懼汝曹猶未牢固、略重勸誘爾」。

③韓愈『平淮西碑』「大官臆決唱聲、萬口和附、并爲一談、牢不可破」。

④薛瑩『後漢書』『初學記』卷七引「光武至薊上、…遣王霸往視實然、霸恐驚衆。即還曰、冰牢可渡」。

【確】議論の上にて、道理的當して、一言一字をかえられぬを「確言」「確論」①、或いは「議論精確」などという。

①『魏書』列傳第六十五羊深「且魏武在戎、尚修學校、宣尼確論、造次必儒」。

【鞫】しねりぐはくして、きれにくきをいう。「柔にして固なり」①とも注し、「堅

柔なり」②とも注せる字なり。

①『說文新附』「鞫、柔而固也、从韋刃聲」。

②『集韻』「鞫、堅柔也、或从韋、从革、亦作忍、通作刃」。

【鞏】革にてまきて、かためたることなり。故に堅固なるかためをいう。大抵固の字に同じ。多く用いず。

【強】「つよき」と訓ず。弱の反對なり。力を以ていうなり。「國強し」①「兵強し」

②「弓強し」③「木強きときは則ち折る」④「舌本強る」⑤。律に姦に和強の

兩姦あり。盜に強竊の二盜あり。「和姦」は兩方の情和して密通するなり、「強姦」

⑥は一方肩はざるに通じるなり。又「年紀蹉跎四十強」⑦「病に臥すること一秋強」

⑧「萬匹強」⑨「千丈強」⑩「強半」⑪は過半なり。又「つとむ」といふとき、

上聲なり。「勉強」⑫など、精を出してすることなり。人をしいるにも用いる。易に

「君子以て自強して息まず」⑬というを、「つとめて」とよむは僻事なり。上聲とも

なし。ただ自我行いを強壯にしてやまぬことなり。又俗語に「まさる」とよむ。

「強似阿哥」はあにまさりなり。

①『韓非子』有度「奉法者強則國強、奉法者弱則國弱」。

②『漢書』高帝紀第一上「當是時、秦兵彊、常乘勝逐北、諸將莫利先入關」。

③蘇軾『次韻王君北都偶成』「驥騁經新臥、弓強發久招」。

④『淮南子』原道訓「故兵強則滅、木強則折、革固則裂、齒堅於舌而先之弊」。

⑤『世說新語』文學「殷仲堪自言、三日不讀道德經、便覺舌本間強矣」。

⑥『漢書』王子侯表第三下「永光二年、坐強姦人妻、會赦免」。

⑦岑參『秋夕讀書幽興獻兵部李侍郎』「年紀蹉跎四十強、自憐頭白始爲郎」。

⑧杜甫『別常徵君』「兒扶猶杖策、臥病一秋強」。

⑨杜甫『秦州雜詩』五「南使宜天馬、由來萬匹強」。

⑩韓愈『聽穎師禪琴』「躋攀分寸不可上、失勢一落千丈強」。

①蘇軾『山邨五絶』四「贏得兒童語音好、一年強半在城中」。

②『後漢書』光武十王列傳第三十二「太后其保養幼弱、勉強飲食」。

③『易經』乾「象曰、天行健、君子以自強不息」。

【勁】強に剛の意を兼ねたり。「風勁」①「筆端勁」②「外柔内勁」③、皆強字の義ばかりに非ず。「後勁」④は後陣の事なり。

①何遜『暮秋答朱記室』「游揚日色淺、騷屑風音勁」。

②柳貫『三月十日觀南安趙使君所藏書畫古器物』「盧前吳後筆鋒勁、履豨承蜩」。

玄化俱」。

③『該聞錄』「太祖曰、外柔内勁、授供奉官、後握兵、江淮號鐵漢」。

④『左傳』宣公十二年「軍行、右轅、左追奪、前茅慮無、中權、後勁」。

【難】易の反對なり。ものしよき、しにくきの「しにくき」なり。意義各別なれども、倭訓混じるゆえ、ここに附す。「難を君に責む」①とは、しにくきことを爲したまへと君にせがみもとめるなり。「木難」②は珠の名なり。又去聲の時、災難なり。人を難するも去聲なり。「問難」③「論難」④「經術相難す」、是れなり。「難を發す」⑤とは不審を立てるなり。

①『孟子』離婁上「故曰、責難於君、謂之恭、陳善閉邪、謂之敬、吾君不能、謂之賊」。

②曹植『美女篇』「明珠交玉體、珊瑚間木難」。

③『東觀漢記』賈宗傳「每宴會、令與當世大儒司徒丁鴻問難經傳」。

④『漢書』公孫劉田王楊蔡陳鄭傳第二十六「增廣條目、極其論難、著數萬言」。

⑤『東漢觀紀』桓榮傳「榮門生數百人、天子親自執業、時執經生避位發難、

上輒謙曰、太師在是」。

【𠂔】「かたし」とよむ、大きな僻事なり。可の字を左へひくりかえしたる字なり。

可は𠂔なり、𠂔は𠂔なり。故に「不可」①と訓ず。「𠂔耐なり」といはは、耐ゆべからざるなり②。されども一字に「べからず」という訓つけがたきによりて、何人やらん、「𠂔耐」と訓ぜり③。これより誤りを傳えて、字義も考えず詩を作るに、𠂔のばにて難の字が用いらねば、人皆𠂔の字を用いる、言語道斷の事なり。又後漢書には𠂔・頗通用す④。又「𠂔羅」⑤は盃の名なり。

①『說文新附』「𠂔、不可也、从反可」。

②『正字通』丑集上「𠂔耐、不可耐也」。

③未詳。

④『正字通』丑集上「𠂔、通作頗」。

⑤『北齊書』補列傳第三十一祖斑「神武宴寮屬、於坐失金𠂔羅、寶泰令飲酒

者皆脫帽、於斑髻下得之」。

李白『對酒』「蒲萄酒金𠂔羅、吳姬十五細馬馱」。

2〇かく

欠缺 闕虧 騫玷 (一、廿六号表)

【欠】「欠も無く餘も無し」①という語あり。足らざることを「欠」という。數のかけたるなり。「逋欠」②は、未進の事なり。

①三祖大師『信心銘』「違順相爭、是爲心病、不識玄旨、徒勞念靜、圓同大虛、無欠無餘、良由取捨、所以不如」。

②『宋史』本紀第三十五孝宗三「詔省部、漕臣催理、已蠲逋欠者、令臺諫覺察」。

【缺】物のかけやぶれ、かけ損じたるなり。完の反對なり。

【闕】元來門闕の字なり。やぐらを立て並べて、中に門をあけたるをいう。凹の形

ゆえ、中のあきたる意あり。故にかけるに用いる。缺の字と似て異なり。「缺」はかけ損じたるなり、「闕」はかけおちたるなり、多くの中にてぬけたるをいう。「缺」は一物のすみはしのかけたるなり。故に闕は全の反対なり。「缺字」は字の點畫の損したるなり。「闕字」はまるに一字おちたるなり。「拾遺補闕」①もおちたるを補うなり。しかれども古書には「月三五にして盈闕す」②といい、「月暈闕」③といい、皆缺の意に用いたり。倭語に「闕字」というは誤りなり。「闕字」というは元より闕けおちてあるなり。倭俗の「けつ字」は、禮式にて人を敬うゆえ、一字あけることなれば、闕字には非ず。中華にては「一字を空す」という。

- ① 司馬遷『報任少卿書』「序略、以拾遺補闕、成一家之言」。
- ② 『禮記』禮運「故天秉陽、垂日星、地秉陰、竅於山川。播五行於四時、和而後月生也。是以三五而盈、二五而闕」。
- ③ 『淮南子』覽冥訓「晝隨灰而月運闕、鯨魚死而彗星出、或動之也」。

【虧】盈の反対なり。月の盈虧に用いる。損し毀る義なり。缺に似て非なり。

【璣】虧と同じ。

【玷】玉器のかどのかけたるなり①。故に「きず」ともよむ。

- ① 『廣韻』「玷、玉瑕」。

3〇かゝる

飾 賁 文 粧 裝 (二、二号裏)

【飾】「かざる」と訓ず。よきにも、あしきにも通ず。廣き字なり。「文飾」①「彩飾」②「輿馬の飾」③「金翠の飾」④「文軒の飾」⑤「服飾」⑥「聲音の飾」⑦「至痛の飾」⑧、皆訓の如し。又衣服のへりをいう。詩に「羔の裘に豹の飾」⑨。こ

れより「縁飾」という詞あり。縁ももとをしなり。公孫弘が傳に「凡吏事、縁飾するに儒術を以てす」⑩、吏事のはしはづれへ儒學をまぜて様子よくつくることなり。「矯飾」⑪は内心になきことを、外ばかりにてかざることなり。「邊幅を修飾す」⑫も、はしはづれをとりつくることなり。「粉飾」⑬「粧飾」⑭、皆假粧などをしてかざることなり。「靚飾」⑮も靚粧してかざるなり。「雕飾」⑯は器物にほりものなどしてかざることなり。又飾の字と似たるゆえ、誤寫すること多し。

- ① 『禮記』玉藻「犬羊之裘、不裼、不文飾也、不裼」。
- ② 『國語』周語中「服物昭庸、采飾顯明、文章比象、周旋序順」。
- ③ 『莊子』讓王「仁義之慝、輿馬之飾、憲不忍爲也」。
- ④ 曹植『洛神賦』「戴金翠之首飾、綴明珠以耀軀」。
- ⑤ 『列子』力命第六「乘其輦輅、若文軒之飾」。
- ⑥ 『漢書』王莽傳第六十九中「五威將乘乾文車、駕坤六馬、背負鸞鳥之毛、服飾甚偉」。
- ⑦ 『禮記』樂記「樂者心之動也、聲者樂之象也、文采節奏、聲之飾也」。
- ⑧ 『禮記』三年問「斬衰苴杖、居倚廬、食粥、寢苦枕塊、所以爲至痛飾也」。
- ⑨ 『詩經』鄭風・羔裘「羔裘豹飾、孔武有力。彼其之子、邦之司直」。
- ⑩ 『漢書』公孫弘卜式兒寬傳第二十八「於是上察其行慎厚、辯論有餘、習文法吏事、縁飾以儒術」。
- ⑪ 『後漢書』肅宗孝章帝紀第三「詔曰、夫俗吏矯飾外貌、似是而非、揆之人事則悅耳、論之陰陽則傷化、朕甚憂之、甚苦之」。
- ⑫ 『後漢書』馬援列傳第十四「兵圖成敗、反修飾邊幅、如偶人形」。
- ⑬ 『史記』滑稽列傳第六十六「行十餘日、共粉飾之、如嫁女床席」。
- ⑭ 『北史』列傳第六景穆十二王下「靈太后頗事妝飾、數出遊幸」。
- ⑮ 『後漢書』南匈奴列傳第七十九「昭君豐容靚飾、光明漢宮、顧惠裴回、辣動左右」。
- ⑯ 『逸周書』大匡解「車不雕飾」。



【賁】「かざる」と訓ず。「かざり」とよむことなし。飾に光采の意あり。易に賁の卦あり①。これも山下に火ある象なり。又書經に「天命僭たがはず、賁たること草木の若し」②といえるも、粲なる意あり。又詩經に「賁然として來る」③というも、人の車馬衣服などのきらびやかなるが我が宅に來れば、我がいやしき宅の外聞面目になる意をいいて、人を敬う辭なり。これも光采の意なり。これより人の來るを「賁臨」⑤「來賁」③というなり。

①『易經』賁「象曰、山下有火、賁」。

②『書經』湯誥「上天孚佑下民、罪人黜伏、天命弗僭、賁若草木、兆民允殖」。

③『詩經』小雅・鴻雁之什・白駒「皎皎白駒、賁然來思、爾公爾侯、逸豫無期」。

⑤『剪燈餘話』洞天花燭記「今文士賁臨、羣仙光降、願留珠玉以爲洞天之重」。

【文】「かざる」とよむとき、去聲になる。「小人の過は必ず文かざる」①。

①『論語』子張「子夏曰、小人之過也必文」。

【粧】「よそほふ」「よそほひ」とよむ。假粧することなり。この方の搢紳、和訓にて書を解して、ものふぜい、もようのことと意得たるより、今世に至るまで多くその意に用いる、大いに誤まれり。樂天が詩に「時世粧」①といえるも、當代はやる假粧のしようなり。俗語に「粧チヤンパン扮」という詞あり。「装チヤンパン扮」とかくを、音通じるゆえ、「粧扮」ともかけり。又狂言かぶきなどの女のまねをし、鬼神のまねをするには、面をも假粧するゆえ、義も通じるによりて、粧の字を用いたり。全く和訓の「よそほひ」という意に非ず。

①白居易『時世粧、敬戎也』『時世粧、時世粧、出自城中傳四方』。

【裝】「よそほひ」「よそほふ」と訓ず。「紫金裝」①「七寶裝」②、皆よそおいかざ

ることなり。俗語に「打扮チヤンパン」「裝扮チヤンパン」というは、衣服のようす出立なり。又古書の裝の字は各別なり。「行裝」③は旅支度なり。「假裝はじむ」④は旅起ちなり。「軍裝」⑤「戎裝」⑥はいくさ支度なり。「治裝」⑦「戒裝」⑧「辨裝」⑨「趣裝そく」⑩は、皆旅支度することなり。「齎裝」⑪は旅荷物のことなり。陸賈が「囊中の裝」⑫「越の裝」⑬、皆同じ。「輕裝」⑭は旅支度のでがるきことなり。又腕にものを盛ることを「裝まか」という。和語にもあることにて、中華にも用いる。居家必用に見える⑮。北山移文に「牒訴倥偬、其の懷に裝まかふ」⑯というも、胸中に積むことなり。盛る意より用いる。正字通に「凡そ心に藏する者、亦裝と曰ふ」⑰といいて、移文のこの語を引けり。字書の注、大形はこのように迂遠なり。

①楊師道『詠馬』「寶馬權奇出未央、雕鞍照曜紫金裝」。

②吳均『贈別』「七寶直千金、七寶雕華裝、生離何用表、賴此持相餉」。

③『史記』南越列傳第五十三「王、王太后、飭治行裝重齎、爲入朝日下」。

④張衡『思玄賦』『文選』卷十五「占既吉而無悔兮、簡元辰而假裝」。

⑤蘇頌『奉和聖制幸望春宮送朔方大總管張仁宣』「軍裝乘曉發、師律候春歸」。

⑥『北史』列傳第二十五楊大眼「妻潘氏、善騎射、自詣軍省、大眼、至攻戰遊獵之際、潘亦戎裝、齊鑣並驅」。

⑦『戰國策』齊策四「於是約車治裝、載卷契而行」。

⑧顏延之『爲皇太子侍宴餞陽南平二王應詔』「亦既戎裝、皇心載遠、夕帳亭臯、晨儀禁苑」。

⑨『漢書』王貢兩龔鮑傳第四十二「即拜、秩上卿、先賜六月祿直以辨裝」。

⑩宋濂『亡友陳宅之墓銘』「庚子之夏、朝廷遣使者來召濂、趣裝上南京、擢爲王官」。

⑪『漢書』爰盎鼂錯傳第十九「乃悉以其裝齎賈、二石醇醪」、注「師古曰、裝齎、謂所齎衣物自隨者也」。

⑫『史記』麗生陸賈列傳第三十七「賜陸生橐中裝直千金、他送亦千金」。

⑬『南史』列傳第四十九王僧孺「吾欲遺子孫者、不在越裝」。

⑭『梁書』列傳第二十三高祖三王「又理聚賓客數百、輕裝赴南兗州。」

⑮『居家必用事類全集』「右將五葉裝在大缸内、用水三担浸、日晒七日。」

⑯孔稚圭『北山移文』『文選』卷四十三「敲朴誼囂犯其慮、牒訴倥傯、裝其懷。」

⑰『正字通』申集下「凡藏于心者、亦曰裝。孔稚圭北山移文、道峽長擯法筵、久埋敲朴喧囂犯其慮、牒訴倥傯、裝其懷。」

4〇かくる

隱藏 潛 匿 韜 廋 竄 祕 (二、十八号表)

【隱】「かくるる」「かくす」と訓ず。顯・現・彰・著の反對なり。もののかげにかくれて見えぬことなり。又後世専ら「隱者」①「隱遁」②に用いる。又書籍の注に「隱義」③というは、書のうらにその注をかくをいう。又左傳に「隱を踰へて以て之を待つ」④というは短牆なり。又「齊の威王、隱を喜む」⑤というは隱語なり。又聽に作る。謎のことなり。又「いたむ」とよむ。「惻隱」⑥、又「隱憂有るが如し」⑦。又「はかる」とよむ。「心を隠りて而る後に動く」⑧、量度の義なり。又「よる」とよむ。凭の義なり。孟子に「凡に隱る」⑨といえり。又「きづく」とよむ。築の義なり。「秦、馳道を爲る。隱くに金椎を以てす」⑩。「いたむ」とよむより下、皆別義なり。

①『論語』微子「子曰、隱者也、使子路反見之、至則行矣。」

②『後漢書』宣張二王杜郭吳承鄭趙列傳第十七「遂隱遁深山、州郡連召、常稱疾不仕。」

③韓愈『進士策問』「將亦有深辭隱義、不可曉耶、抑其年代已遠、失其傳邪。」

④『左傳』襄公二十三年「乃出豹而閉之。督戎從之。踰隱而待之、督戎踰入、豹自後擊而殺之。」

⑤『史記』滑稽列傳第六十六「齊威王之時喜隱、好爲淫樂長夜之飲、沈湎不

治、委政卿大夫。」

⑥『孟子』公孫丑上「今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。」

⑦『詩經』邶風・柏舟「汎彼柏舟、亦汎其流。耿耿不寐、如有隱憂。」

⑧崔瑗『座右銘』『文選』卷五十六「隱心而後動、謗議庸何傷。」

⑨『孟子』公孫丑下「孟子去齊、宿於晝。有欲爲王留行者、坐而言。不應、隱几而臥。」

⑩『漢書』賈鄒枚路傳第二十一「秦爲馳道於天下、……道廣五十步、三丈而樹、厚築其外、隱以金椎、樹以青松。」

【藏】「かくす」とよむ。「かくるる」に非ず。但し隱の字と大いに異なり、物の内へ入れてとつておくことなり。「くら」という字ゆえ、物をくらに入れてとつておく意なり。論語に「用ふれば則ち之を行ひ、舍つれば則ち之を藏す」①とあるも、人が我れを用いければ、吾が道をとりに出して行ない、人が我れを捨てれば、吾が道を取りておきて行わぬことなり。これにてよくすむべし。されども字書に「隱なり、匿なり」②の注あるゆえ、人皆誤るなり。字書の注は本義をはなれること多し。本草に藥性をいうが如し。又「をさむる」という訓も、まがうこと多し。「秋收冬藏」③という類、秋の氣は夏天地へひろがりたる氣がすぼまるを「收」といい、冬は地中に入るを「藏」という。これも物に入れてとつておきたる意なり。又「壽藏」④は逆修の墓なり。「行藏」⑤は論語に本づきて、身の一生のとりおきをいう。「摧藏」という語あり、「適たま商風の起るに逢ひて、羽翼自ら摧藏す」⑥といえり。又「昂藏」というは、氣象崢嶸たることなり。形容字なり。「安んぞ能く富まざると貴からざると、空しく作る、昂藏たる一丈夫」⑦「繡衣の御史何ぞ昂藏たる、鐵冠白筆、秋霜に横たふ」⑧。又「昂昂藏藏」とも用いる。又「三藏」ということ佛書にあり。

①『論語』述而「子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏。唯我與爾有是夫。」

②『正字通』申集上「藏、隱也、匿也。」

③『荀子』王制「春耕夏耘、秋收冬藏、四者不失時、故五穀不絕。」

④『後漢書』吳延史盧趙列傳「年九十餘、建安六年卒、先自爲壽藏」、注「壽藏、謂塚壙也、稱壽者、取其久遠之意也」。

⑤阮籍『詠懷』「適逢商風起、羽翼自摧藏。一去崑崙西、何時復廻翔」。

⑥李泌『長歌行』「焉能不貴復不去、空作昂藏一丈夫。一丈夫兮一丈夫、千生氣志是良圖」。

⑦李白『贈潘次御論錢少陽』「繡衣柱史何昂藏、鐵冠白筆橫秋霜、三軍論事多引納、塔前虎士羅干將」。

【潜】水にひそむという字ゆえ、深・隱の二義を兼ねる。處により「潜行默運」①などという時は、ただ目に見えずという意にて、いつのまにか人知れずという義になるなり。又「ぶしづけ」とよむ。柴を水中に積みおきて、魚をとることなり②。詩經に「潜に多魚有り」③といえり。

①『韓非子』初見秦第一「於是乃潜行而出、反知伯之約、得兩國之衆」。

②『正字通』已集上「與潛通、積柴水中、使魚隱藏因取之」。

③『詩經』周頌・臣工之什・潜「猗與漆沮、潛有多魚。有鱣有鮪、鱖鰕鰻鯉。以享以祀、以介景福」。

【匿】にげかれる意なり。「かくす」ともよむ。「首匿」①という語、首の字、上聲の時は、罪人をかくし置くことなり。首の字、去聲の時は、「匿を首す」②にて、罪人のにげかれたるを訴人することなり。「匿道」③はにげ道なり。「服匿」④は器の名なり。甕の如し、小口、方腹、底平にて、七八升ばかり入れるほどの大きさなり。酒酪を盛る北狄の器なり。又「側匿」⑤「仄慝」⑥ともいう。この時は忒の音なり。朔に月、東に見えることなり。晦に月、西に見えるをば「朏」といふ⑦。

①『後漢書』梁統傳第二十四「故重首匿之科、著知從之律、以破朋黨、以懲隱匿」。

②『正字通』子集下「今以自出首其所匿曰首匿、首去聲」。

『漢書』宣帝紀第八「父子之親、夫婦之道、天性也。必誠愛結于心、仁厚之至也。豈能違之哉、自今子首匿父母、妻匿夫、孫匿大父母、皆勿坐」、注「師古曰、凡首匿者、言爲謀首而藏匿罪人」。

③『法運通塞志』第十七之十四「二年三月、唐州泌陽尉李珪遇北虜入寇、挾一僕單騎走、夜匿道旁空舍」。

④『正字通』子集下「服匿、器如甕、小口、方腹、底平、容七八升、用受酒酪、蘇武傳、單于賜武服匿。又程泰之曰、南唐張僊使高麗曰、麗多銅器、有溫器、名服席、如鐘而底方、東夷所謂服席卽北狄所服匿也」。

⑤『廣雅』卷三下釋詁「側匿、縮也」、疏證「說文、朔而月見東方、謂之縮朒、漢書五行志、縮朒作仄慝、尚書大傳作側匿」。

⑥『京房易傳』『漢書』五行志下之下引「婦貞厲、月幾望、君子征、凶。言君弱婦彊、爲陰所乘、則月並出。晦而月見西方、謂之朏、朔而月東方、謂之仄慝、仄慝則侯王其肅、朏則侯王其舒」。

⑦『說文解字』「朏、晦而月見西方、謂之朏、从月兆聲」。

【韜】「つつむ」という字なり。「かくす」とよむ時も、つつみかくす意なり。藏の義に近し。「藏」は深くとつておく意あり、「韜」には蔽い包む意あり。

【廋】かくすなり。「かくる」とはよまず。又搜と通じて「さぐる」とよむ。さがすことなり。

【竄】匿と同義なり。但し逃・隱二義の内、逃の意多し。鼠に従い穴に従う①。會意の子なり。あそこへにげ、こそこへにげして、かくれる意なり。醫書に「走鼠の劑」②というは、經絡を走りもぐる藥なり。「穴鼠」③より義を取れり。又史記に濟北王の宮女、腰背痛を病めるを、大倉公診して、内寒て月水通ぜず、男子を思いて得ざ

るより起りたる病なりとて、即ち竄するに薬を以てして旋すなはち下るといふを、注に「薬を以て薫る」ことといえり②。これも薬の煙、經絡をくぐる意なり。又轉用して、罪人を逐いはらうことをも「竄」といふ④。これもにげかくれさせる意なり。又文字をなおすを「竄易」⑤「改竄」⑥「點竄」⑦「塗竄」⑧といふ。

①『説文解字』「竄、慝也、从鼠在穴中」。

②『史記』扁鵲倉公列傳第四十五「濟北王侍者韓女病要背痛、寒熱、衆醫皆以爲寒熱也。臣意診脈、曰、内寒、月事不下也。即竄以藥、旋下、病已、病得之欲男子而不可得也。所以知韓女之病者、診其脈時、切之、腎脈也、

齋而不屬、齋而不屬者、其來難、堅、故日月不下。肝脈弦、出左口、故曰欲男子不可得也」。注「謂以燻燻之、故云」。

③劉歆『遂初賦』「藝文類聚」二十七「獸望浪以穴鼠兮、鳥脇翼之浚浚」。

④『正字通』午集下「竄、驅逐也」。

『書經』舜典「流共工于幽州、放驩兜于崇山、竄三苗于三危、殛鯀于羽山」。

⑤徐度『却掃編』卷中「因揭之壁間、坐臥哦詠、有竄易、至月十日乃定」。

⑥『晉書』列傳第十九阮籍傳「使者以告、籍使書案、使寫之、無所改竄」。

⑦『三國志』魏書武帝紀第一「他日、公又與遂書、多所點竄、如遂改定者」。

⑧『新唐書』志第三十七百官一「凡百司奏抄、侍中既審、則駁正遺失。詔敕不使者、塗竄而奏還、謂之塗歸」。

【祕】とちかくすことなり。故に「祕密」①「斬祕」②と連用す。ものをとちかくして、むさと人に見せぬことなり。

①『隋書』列傳第四十三藝術盧太翼「太翼言天文之事、不可稱數、關諸祕密、世莫得聞」。

②『剪燈餘話』月夜彈琴記「由是彈琴大進、獨步浙中、斬祕此曲、弗以傳人、緝之死、譜亦竟絕焉」。

むさ

50かなふ

愜叶協合諧適稱副（二、六十八号裏）

【愜】「快なり」①「志滿なり」②と注す。心十分にて心がかりなきなり。

①『説文』「慝、快也、从心匿聲」。

②『漢書』文帝紀第四「正月、有司請蚤建太子、所以尊宗廟也。詔曰、朕既不德、上帝神明未歆饗也、天下人民未有愿志。應劭曰、「愿音篋。愜、滿也」。

【叶】【協】通用す。和合の義なり。

【合】あうなり。蓋と咽とを合わせ、牝牡の合う意なり。分の反對、離の反對なり。

「あふ」の條に見える。

【諧】前に見える。

【適】「かなふ」とよむ時、「ゆく」とよむ時、「たまたま」とよむ時、釋の音なり。

「かなふ」とよむ時、當の字、稱の字の義あり。宜しきを得たることなり。和語の「相應なり」という意なり。諸侯より天子へ人を貢するに、しかるべき人を貢したるを「適」といふ。故に漢書に「一適」「二適」「三適」①といふことあり。後世には専ら我が意に相應しるをいう。「放適」②「快適」③「醉適」④「賞適」⑤「適適」⑥など、皆心もちのよきあんばいなることなり。莊子に「足を忘るるは履の適なり、腰を忘るるは帶の適なり」⑦といへるも、履はきたるとも覺えず、帶したるとも思わぬは、皆屨帯のよく我が腰足にかないたるなりという意、是れなり。快の義に似たれども、「快」はきみよく覺えるをいう。力のある字なり。「適」はただ心もちのよ

きあんばいなるなり。「ゆく」とよむ時、之の字の義なり。「たまたま」とよむ時、偶の字に近し。「偶」は即ち遇の字にて、途中にて出合うことなるより轉用し、「適」は「あたる」というより轉用したる故、大抵は同じけれども、「偶中」「偶作」「天數偶」「非偶」などという處へは、適の字は用いられず。又「適來」⑥「適纔」⑦はいまなり。古今の「いま」に非ず、さきほどをさしていう「いま」なり。又祇の字の義に用いることあり。又的の音の時、嫡と通ず。又「意、主とする所有るなり、適も無く莫も無し」⑧。又「一國三公、吾れ誰を適とし従はん」⑨、又「誰を適とし容るることを爲さん」⑩の類なり。又敵の音の時、敵と通ず。「ひとし」とよむ時のことなり。謫の音の時、謫と通ず。

①『漢書』武帝紀第六「有司奏議曰、古者、諸侯貢士、壹適謂之好德、再適謂之賢賢、三適謂之有功、乃加九錫、不貢士、壹則黜爵、再則黜地、三而黜爵地畢矣。」

②蘇舜欽『金山寺』「氣象特清壯、所覽輒快適。」

③『北史』列傳第三十五陽休之「此官實自清華、但煩劇、妨我賞適、眞是樊籠矣。」

④『莊子』大宗師「是役人之役、適人之適、而不自適其適者也。」

⑤『莊子』達生「忘足、履之適也、忘要、帶之適也、知忘是非、心之適也、不内變、不外從、事會之適也。」

⑥『搜神記』「夫人食他一物而有愧色、適來已飲他酒脯、寧無情乎。」

⑦『長生殿』賄纔「適纔張千稟說。」

⑧『論語』里仁には「君子之於天下、無適也、無莫也、義之與比」とある。

⑨『左傳』僖公五年「退而賦曰、狐裘尫茸、一國三公、吾誰適從。」

⑩『詩經』衛風・伯兮「自伯之東、首如飛蓬、豈無膏沐、誰適爲容。」

【稱】「かなふ」とよむ時、去聲なり。相應なることなり。禮記に「禮同じからざれば、豊にもせず殺ぎもせず、蓋し稱を言ふなり」①「名、實に稱ふ」②「衣、身

に稱ふ」③「他物是に稱ふ」④などの類なり。轉用して、孔光が傳に「以て報稱する無し」⑤というも、盛意に相應するほどにむくゆべきなきなり。

①『禮記』禮器「孔子曰、禮、不可不省也。禮不同、不豐、不殺、此之謂也。蓋言稱也。」

②『韓非子』功名「近時已親、而遠者不結、則名不稱實者也。」

③張贛『過蕭關』「出得蕭關北、儒衣不稱身。」

④『史記』梁孝王世家第二十八「及死、藏府餘黃金四十餘萬斤、他財物稱是。」

⑤『漢書』匡張孔馬傳第五十一「臣光智謀淺短、犬馬齒載、誠恐一旦顛仆、無以報稱。」

【副】「かなふ」とよむ時、正副の副より轉用す。「正本」「副本」①など、正と副とは相應する意あり。故に「かなふ」とよむ。「盛意に副ふ能はず」「名實副ひ難し」②「宿願始めて副を欣ぶ」③などなり。皆稱の字と同義なり。「一副」「一副當」は一具なり、ひととおりなり。

①『隋書』志二十七經籍一「煬帝即位、祕閣之書、限寫五十副本、分爲二品。」

②『漢書』王莽傳第六十九上「臣愚以爲、宰衡官以正百僚平海内以職、而無印信、名實不副。」

③韓愈『南山』「昨來逢清齋、宿願忻始副。」

6〇かわる

變化 渝 換 易 貿 博 更 代 替 兌 改 俊 (三、八号裏)

【變】「かわる」と訓ず。倭語に「へん」といい、「へんずる」という語、いい習わして大形聞こえるなり。常變と對し、變化と對し、「變易」①「變更」②「變改」③「變換」④など連用す。その内、變・化の二字、義近し。變・渝・換の字、義近し。更・代・替、義近し。換・貿・博、義近し。易の字は何へも通じるなり。「狸、豹

に變じ、豹、虎に變ず」⑤といい、「丈夫は龍變ず」⑥という類、皆變化の義なり。但し「變は化の漸、化は變の成」⑦と注して、變じかかりたるを「變」といい、變じきりたるを「化」ということ、變化二字の本義なれども、大抵は通用するなり。又「天變」⑧「地變」⑨「星變」⑩「災變」⑪「變異」⑫などは、けち「怪しいこと」のことなり。常にかわりたるあやしきことをいう。「凶變」などは、天子國君、或いはその家長などの死したるをいう。「飛變を上る」⑬「急變を上る」⑭など、謀叛惡逆のことを上へ注進することをいう。「世變」⑮「時變」⑯などは、世間のうつりかわり、時節のうつりかわりをいう。「機變」⑰「權變」⑱「變詐」⑲などは、智謀計略の上にて、手のうらをかえずごとく、さまざまにからくりたばかることなり。兵事又は人情の上に用いる。「千變萬化」⑳は、様様に形をかえ一定せぬことなり。「事變」㉑というも、人事の一定せず、様様かわることなり。「變に應ず」㉒「變に合ふ」㉓「變に通ず」㉔、皆事變の上にていえり。「變を弭む」㉕「變を消す」㉖、皆災變をいえり。又「中道にして變ず」「容顏變ず」「鬚髮變ず」㉗などは、皆あらたまる意なり。改の字と同じ。

- ① 『春秋繁露』基義「聖人之道、同諸天地、蕩諸四海、變易習俗。」
- ② 『莊子』漁夫「所謂四患者、好經大事、變更易常、以挂功名。」
- ③ 『史記』禮書第一「自天子稱號、下至佐僚及宮室官名、少所變改。」
- ④ 白居易『埤樞舊業』「改移新逕路、變換舊邸隣。」
- ⑤ 『揚子法言』吾子卷第二「聖人居別、其文炳也。君子豹別、其文蔚也。辯人狸別、其文萃也。狸變則豹、豹變則虎。」
- ⑥ 『史記』外戚世家第十九「褚先生曰、丈夫龍變、傳曰、蛇化爲龍、不變其文、家化爲國、不變其姓。」
- ⑦ 朱熹『周易本義』第一卷乾用九「乾道變化、各正性命、保合太和、乃利貞。變化之漸、化者變之成、物所受爲性、天所賦爲命。」
- ⑧ 『漢書』五行志第七中之下「卽不行臣言、災異愈甚、天變成形。」
- ⑨ 『漢書』楚元王傳「天變見於上、地變動於下、水泉沸騰、山谷易處。」

- ⑩ 『三國志』吳書・吳範劉惔趙達傳第十八「建安中、孫權在豫章、時有星變、以問惔、惔曰、災在丹楊。」
- ⑪ 『漢書』魏相丙吉傳第四十四「或有逆賊風雨災變、郡不上、相輒奏言之。」
- ⑫ 『漢書』元帝紀第九「乃者火災降於孝武園館、朕戰栗恐懼、不燭變異、咎在朕躬。」
- ⑬ 『漢書』張湯傳第二十九「湯有所愛史魯謁居、知湯弗平、使人上飛變告文姦事、注「師古曰、飛變猶言急變也。」
- ⑭ 『漢書』公孫劉田王楊蔡陳鄭傳第三十六「會衛太子爲江充所譖敗、久之、千秋上變聞訟太子寃。」
- ⑮ 『書經』異命「既歷三紀、世變風移、四方無虞。」
- ⑯ 『易經』賁「觀乎天文、以察時變、觀乎人文、以化成天下。」
- ⑰ 『荀子』議兵「城郭不辨、溝池不計、固塞不樹、機變不張。」
- ⑱ 『漢書』韓彭英盧吳傳第四贊「皆徼一時之權變、以詐力成、咸得裂土、南面稱孤。」
- ⑲ 『荀子』議兵「兵之所貴者執利也、所行者變詐也。」
- ⑳ 『列子』周穆王「千變萬化、不可窮極。」
- ㉑ 『詩經』周南・關雎・序「達於事變、而懷其舊俗者也。」
- ㉒ 『晉書』列傳第二十六孫楚「廟勝之算、應變無窮、獨見之鑒、與衆絕慮。」
- ㉓ 『史記』廉頗藺相如列傳第二十一「括徒能讀其父書傳、不知合變也。」
- ㉔ 『三國志』蜀書・先主傳第二「若應權通變、以寧靖聖朝。」
- ㉕ 沈德符『野獲編』宮闈孝烈祠廟「蓋亦著當時弭變之功也。」
- ㉖ 『六韜』王翼「腹心一人、主潛謀應卒、揆夫消變、摠攬計謀、保全民命。」
- ㉗ 『舊唐書』列傳第一百三十八交友「神龍初、爲給事中。日知事母至孝。時母老、嘗疾病、日知取急調侍、數日而鬢髮變白。」

けち

【化】變化の義、上に見える。莊子に「神奇復た化して臭腐と爲る」①という類、「腐草化して螢と爲る」②「鯉化して龍と爲る」③の類、皆變の字の意なり。但し變は漸漸に變じざる意、化は變じきりて、前のかたしろの見えぬをいうなり。それより轉用して、覺えず一つになるを「化す」という。家語に「久しくして其の香を聞かず、之と化すればなり」④。「徳化」⑤は言語作意にわたらず、唯だ吾が徳を以て覺えず、人の心を通し易えることなり。「教化」⑥は、教えを以て覺えず人の心をかえるなり。それより「化」といへば、ただ教えることになり、又ただ治めのことになる。「聖化」⑦「文化」⑧「道化」⑨「弘化」⑩「淳化」⑪「仁化」⑫「神化」⑬など、或いは君の治めの上にていい、或いは君子の徳の上にていい、とかく民に及びたるところをいうなり。「化に歸す」⑭「化を慕ふ」⑮「化に順ふ」⑯「化に嚮ふ」⑰は、敵の我れに降し、夷の我れに従うことをいう。又「消化」⑱はものきえとけることなり。薬の「風化硝」など、是れなり。これより死するを「化す」という⑲。僧の死を「遷化」⑳という、悟道の人、諸の苦痛なく、端坐して死するを「坐化」㉑という、道士の死するを「羽化」㉒という類なり。又生じるを「化」という㉓。「氣化」㉔とは、蟲衣魚など、又菌の類、種もなく根もなく、皆氣よりして生じるをいう。「形化」㉕は、鳥獸も人も、雌雄男女交接して生じるをいう。鶴を「胎化の仙禽」㉖といえるは、胎生の義なり。「造化」㉗は、天地の陰陽五行の氣はこびめぐりて、萬物かぎりなく生じ出で、又死し行きうつりかわるをいう。化の一字ばかりにても造化のことになる。又上に「大化」「洪化」などと字を付ける、「徳化」「教化」の化とまがうことあり。又僧道の募縁を「化」という。この方の俗語の勸進なり。勸進の本願を「化主」という。奉加帳を「化疏」という。それより轉用して、乞食を「叫化子」といい、略して「化子」といい、又「花子」ともかく。去聲より平聲に音轉じたるなり。この方の比丘尼などの「をくはんじんじん」というごとく、乞食は人家に至りて、「化化」と叫ぶゆえ、名づけたるなり。謝肇淛が五雜俎に「花子と名付けるゆへんを知らず」㉘といえるは、さばかりの學者も面前三尺の暗を免れざるにや。

- ① 『莊子』知北遊「故萬物一也、是其所美者爲神奇、其所惡者爲臭腐、臭腐復化爲神奇、神奇復化爲臭腐」。
- ② 『禮記』月令「溫風始至、蟋蟀居壁、鷹乃學習、腐草爲螢」。
- ③ 『太平廣記』卷四六六龍門「每暮春之際、有黃鯉魚逆流而上。得者便化爲龍」。
- ④ 『說苑』雜言「與善人居、如入蘭芝之室、久而不聞其香、則與之化矣」。
- ⑤ 『韓非子』難一第三十六「舜其信仁乎、乃躬耕處苦、而民從之、故曰、聖人之徳化乎」。
- ⑥ 『禮記』經解「故禮之教化也微、其止邪也於未形」。
- ⑦ 『漢書』楚元王傳第六「故舜有四放之罰、而孔子有兩觀之誅、然後聖化可得而行也」。
- ⑧ 『說苑』指武「凡武之興、爲不服也、文化不改、然後加誅」。
- ⑨ 『列子』說符第八「故聖人修道化、而不恃智巧」。
- ⑩ 『書經』周官「貳公弘化、寅亮天地」。
- ⑪ 『史記』五帝本紀第一「時播百穀草木、淳化鳥獸蟲蛾」。
- ⑫ 『後漢書』楊李翟應霍爰徐列傳第三十八「後令史昭以爲鄉耆夫、仁化大化」。
- ⑬ 『易經』繫辭傳下「黃帝堯舜氏作、通其變、使民不倦、神而化之、使民宜之」。
- 『史記』滑稽列傳第六十六「詩以達意、易以神化、春秋以義」。
- ⑭ 『後漢書』循吏列傳第六十六「比縣流人歸化、徙居一萬餘戶」。
- ⑮ 『漢書』蕭望之傳第四十八「前單于慕化、鄉善稱弟、遣使請求和親、海內欣然、夷狄莫不聞」。
- ⑯ 陳佐『平權衡賦』「安則無傾、正以順化」。
- ⑰ 『漢書』循吏傳第五十九「潁川太守霸、宣布詔令、百姓鄉化」。
- ⑱ 『釋名』釋天「火、化也、消化萬也。亦言毀也、物入中毀壞也」。
- ⑲ 『淮南子』精神訓「故形有摩、而神未嘗化者、以不化應化、注化、猶死

也。」

- ⑳ 『漢書』外戚傳第六十七「上又自爲作賦、以傷悼夫人、其辭曰、……忽遷化而不反兮、魄放逸以飛揚、何靈魂之紛紛兮、哀裴回以躊躇。」
- ㉑ 李洞『哭栖白供奉』「聞說孤窗坐化時、白莎蘿雨滴空池。」
- ㉒ 『晉書』列傳第五十許邁「玄自後莫測所終、好道者皆謂之羽化矣。」
- ㉓ 『禮記』樂記「和故百物皆化、序故羣物皆別」、注「化猶生也。」
- ㉔ 『春秋繁露』天地陰陽「今氣化之淖、非直水也。」
- ㉕ 『莊子』齊物論「其形化、其心與之然、可不謂大哀乎。」
- ㉖ 鮑照『舞鶴賦』『文選』卷十四「散幽經以驗物、偉胎化之仙禽。」
- ㉗ 『列子』周穆王第三「老聃曰、造化之所始、陰陽之所變者、謂之生、謂之死。」
- ㉘ 謝肇淛『五雜俎』「京師謂乞兒爲花子、不知何取義。」

【渝】變の字の意にて、ただ變改の義に用いる。「盟渝る」①「盟を渝ゆ」②「言を渝ゆ」③などなり。使いかた多からぬ字なり。又「色渝る」と用いる。染物などの色のかわるなり。

- ① 『春秋』隱公三年「三月、公及邾儀父盟于昧」、『穀梁傳』「不曰、其盟渝也。」
- ② 『左傳』桓公元年「公及鄭伯盟于越、結祊成也、盟曰、渝盟無享國。」
- ③ 皮日休『諂莊生』「或曰、莊生非利金而渝言、是范蠡之子利金而渝言也。」

【換】「かゆる」「かはる」。一物の變する義に非ず、他物のいれかわり、他物をいれかえる意なり。變化などのような重き字に非ず、語ば字①にて多く使う字なり。「畔換」は強恣の貌なり②。

- ① 「語ば字」は未詳。『訓譯示蒙』には「言ば(ことば)」という語を使っており、(ことば)「ことば」という意味で使っているのであろうか。『日本国語大辞典』には「ことばじ【詞字】」を載せて、「実質的な意味を持たない

置き字の類」という。

- ② 『漢書』敘傳第七十下「項氏畔換、黜我巴漢」、注「師古曰、畔換、強恣之貌。」
- 【易】「かゆる」「かはる」。一物の變するにも、他物のかわるにも通用す。義廣し。「變易」①「改易」②「更易」③、皆一物一事のかわり變じるなり。「換易」④「貿易」⑤「交易」⑥、皆他物をかえることなり。その内、「交易」「貿易」、皆打物「砧で打って艶をだした布や絹織物」かえることなり。「交易」は外のことにも用いる。「易」は書の名なり。總じて書に限らず、卦を立てて占をするを皆「易」という。占をする官を「易」ということ、禮記に見える⑦。又耕作に地をやすめることを「易」という⑧。日本にも奥州など下田の地にあることなり。地をやすめず、毎年作るを「不易の田」⑨という、一年はさみにやすめるを「一易の田」⑩という、二年やすめて一年作る田を「再易の田」⑪という。「狂易」⑫は失心なり。「辟易」⑬は驚きつけしとぶことなり。

- ① 『春秋繁露』基義「聖人之道、同諸天地、蕩諸四海、變易習俗。」
- ② 『漢書』何武王嘉師丹傳第五十六「哀帝亦欲改易大臣、遂策免武。」
- ③ 『漢書』王莽傳第六十九下「有詔勿劾、更易新冠。」
- ④ 『後漢書』朱馮虞鄭周列傳第二十三「而閒者守宰數見換易、迎新相代、疾勞道路。」
- ⑤ 『史記』貨殖列傳第六十九「積著之理、務完物、無息幣、以物相貿易、腐敗而食之貨勿留、無故居貴。」
- ⑥ 『易經』繫辭傳下「日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退。」
- ⑦ 『禮記』祭義「昔者、聖人建陰陽天地之情、立以爲易。易抱龜南面、天子卷冕北面、雖有明知之心、必進斷其志焉」、正義「易抱龜南面、天子卷冕北面者、立爲上易之官。」
- ⑧ 『漢書』食貨志第四上「民受田、上田夫百晦、中田夫二百晦、下田夫三百



晦。歳耕種者爲不易上田、休一歳者爲一易中田、休二歳者爲再易下田、三歳更耕之、自爰其處」。

⑨『周禮』地官・大司徒「凡造都鄙、制其地域而封溝之。以其室數制之、不易之地、家百畝、一易之地、家二百畝、再易之地、家三百畝」。

⑩『漢書』五行志第七中之上「人君行己、體貌不恭、怠慢驕騫、則不能萬事、失在狂易、故其咎狂也」。

⑪『史記』項羽本紀第七「赤泉侯爲騎將、追項王、項王瞋目而叱之、赤泉侯人馬俱驚、辟易數里、與其騎會爲三處」。

【買】打物かえのことなり。外の<sup>ほか</sup>ことに用いず。

【博】賈易の義なり。買と同じ。「一笑に博<sup>か</sup>ゆ」①「一祭に博<sup>か</sup>ゆ」②、皆詩などを人に贈るときかくことなり。笑いぐさにせよという意にて、笑いを取るというほどの詞なり。

①李靜山『増補都門雜詠序』「言之淺陋、閱者解頤、以期雅俗共賞、聊博<sup>か</sup>大雅一笑云爾」。

②紀昀『閱微草堂筆記』卷二十四「君尚不自反、乖戾如初、行且繪此像於君家曰板扉、博途人一祭矣」。

【更】平聲の時、「かゆる」「かはる」とよむ。入れかわる意なり。「更改」①「更易」②「更換」③「更代」④「變更」⑤など、義廣し。變改の義にもなるなり。「紛更」⑥というは、舊法を多く變改して、亂れかわしき「入り亂れる」ことなり。「更張」⑦はものをきりかえて、くみなおすことなり。もと「あらためはる」とよむ。琴瑟の調べあわぬ時は、絃をかけなおして、調べる時は調べあうものなり。これは「更張」というより起る語なり。「更端」⑧は「はしをあらたむ」とよむ。これも物をきりかえはじめるなり。又轉用して、夜の時刻を「更」といふ。戌は初更、亥は二更、

子は三更、丑は四更、子は五更、合わせて五更なり。「五夜」⑨ともいふ。「深更」⑩は夜ふけなり。されども更の字は夜の義に用いる。ふける意はなきを、倭語に「ふくる」とよむは誤りなり。「寒更」⑪は寒夜なり。「更を持する者」⑫とは、時まわりをするものなり。「嚴更」⑬とは時の太鼓を打つ役所なり。あけがた柵をいくらもむさと「むやみに」打つを「蝦蟇更」⑭という。五更にこれを入れて「六更」⑮という。總じて刻を「更」といふは、時のうつりかわる義を取れり。「率更令」⑯は漏刻を司る官なり。又天子の養老の禮⑯に、三才の理を知りたる老人一人を「三老」と名づけ、五行の理を知りたる一人を「五更」と名づけ、天子の自身に膳をすえ、老人を尊ぶ道を天下に示したまうことあり。これより「田更」⑰といえは田夫のことになる。「をきな」とよめり。又戍卒を「更」といふ⑱。これも民の夫役を勤めるは、或いは一月に一度、或いは一年に一度かわるによりて名づく種類の品あり。「卒更」⑲というは、或いは一月、或いは一年かわり合いて、夫役を勤めるをいう。「踐更」⑲というは、富人は夫に出でず、貧人を一月二千錢にてやといて出だすをいう。「過更」⑲は、天下の人、貴賤を揀まず、何者にても邊を成ること三日なり。若し行かざる者、錢三百文づつ出だすなり。これらは皆漢の代の法なり。「歳更る」⑳「寒暑更る」㉑など、換の字と同義なり。

①『漢書』趙尹韓張兩王傳第四十六「延壽欲更改之、教以禮讓」。

②『呂氏春秋』召類「舜却苗民、更易其俗」。

③徐夔『憶長安行』「鐘鼓煎催人自急、侯王更換恨難勝」。

④『左傳』襄公二十七年「且晉楚狎主諸侯之盟也久矣」、疏「晉楚更代主諸侯之盟實久也」。

⑤『莊子』漁夫「所謂四患者、好經大事、變更易常、以挂功名」。

⑥『史記』汲黯列傳第六十「何乃取高皇帝約束紛更之爲」。

⑦『漢書』禮樂志第一「辟之琴瑟不調、甚者必解而更張之、乃可鼓也」。

⑧『禮記』曲禮上「侍坐於君子、君子問更端、則起而對」。

⑨『漢舊儀』『初學記』器物部「五夜者、甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜」。

- ⑩曹伯啓『秋夜西齋有感』「鄰砧催薄暮、樓鼓辨深更」。
- ⑪駱賓王『別李嶠得勝字』「寒更承夜永、涼景向秋澄」。
- ⑫『資治通鑑』唐紀六十七「懿宗、咸通九年、賊夜使婦人持更、掠城中大船三百艘、備載資糧、順流而下、欲入江湖爲盜」。
- ⑬張衡『西都賦』「周以鈞陳之位、衛以嚴更之署」、注「督夜行鼓也」。
- ⑭『豹隱紀談』「楊萬里詩、天上歸來有六更」、注「內樓五更後、梆鼓偏作、名蝦蟇更、禁門初開、百官隨入、所謂六更」。
- ⑮『漢書』百官公卿表第七上「詹事、秦官、掌皇后太子家、有丞。屬官有太子率更、家令丞、僕、中盾、衛率、厨廩長丞」、注「師古曰、掌知漏刻、故曰率更」。
- ⑯『禮記』文王世子「有司卒事友命、始之養也。遂設三老五更羣老之席位焉、注「三老五更、各一人也。皆年老更事故仕者也。天子以父兄養之、示天下之孝悌也」。
- ⑰『列子』黃帝第二「禾生子伯、范氏之上客、出行經垆外、宿於田更商丘開之舍」、注「更當作叟」。
- ⑱『後漢書』顯宗孝明帝紀第一「又所發天水三千人、亦復是歲更賦」、注「更謂戍卒更相代也」。
- ⑲『史記』游俠列傳第六十四「每至踐更、數過、吏弗求」、注「集解曰、如淳曰、更有二品、有卒更、有踐更、有過更。古者正卒無常人、皆當迭爲之、一月一更、是爲率更也」。
- ⑳『莊子』養生主第三「良庖歲更刀割也、族庖月更刀折也」。
- ㉑羅隱『初夏寄顧紹宗』「江上偶分袂、四回寒暑更。青山無路入、白髮滿頭生」。

【代】和語のいう名代の意なり。「人に代る」というは、人の代りをするなり。「自代」というは、わが代りの人を出だすなり。「擧代」は、我れは外の役になるとき、跡役の人を申し立てることなり。「待代」というは、州郡の役人、吾がつとめる日數

を終りて役義をはなるべけれども、跡役の人いまだ來らざるゆえ、それを待ち居ることなり。又轉用して、世を「代」というも、子父のあとをつぎて、父の代りをする意より出でたり。

【替】「替代」①「替換」②など連用して、ものをかえることなり。「替頭」とは、かえ物を指す詞なり。但しこれ皆俗語なり。古書には多くは廢の義なり。處によりてまがう「まぎらわしい」べし、意を注げよ。又和語に大名の入れかわりを「交替」という。元來は刺史の入れかわりをいいたるなり。「交」はわたすことなり、その州并に官府官物をうけとりわたすことをいえり。展轉して誤れり。又大切の寶物を「交割もの」というも、寺院などにて、前住より後住へうけとりわたすことを「交割する」というより展轉して誤まれるなり。

- ①『舊唐書』本紀第十九上懿皇「待嶺外事寧之後、卽與替代歸還」。
- ②楊萬里『立春檢牡丹』「新舊年頭將替換、去留花眼費商量」。

【兌】「兌換」とて、ものをかえること。これも俗語なり。「兌銀子」は兩替のことなり。「兌運」①は米を運漕する船をつぐなり。

- ①『明史』志第五十五食貨三「江南民、運糧諸倉、往返幾一年、誤農業、令民運至淮安瓜洲、兌與衛所、官軍運載至北、給與路費耗米、則軍民兩便、是爲兌運」。

【改】なおすなり。但しなおすに二つあり。ゆがみをなおすは「正す」なり、しなおすは「改」なり。「更改」「變改」「改換」「改易」「替改」「渝改」「悛改」②など連用す。雅俗共に用いる。

- ①魏收『爲東魏檄梁文』「政散民流、禮崩樂壞、改換朝章、變易官品」。
- ②『續列女傳』張湯女「母數責怒、性不能悛改」。

【俊】は過ちを<sup>あつた</sup>俊め、悪を俊めるに用いる。改め止める義なり。外<sup>ほか</sup>のことに用いず。

7〇かさなる

重疊層 申 累 沓 襲 複 覆 襲 (三、廿七号表)

【重】「かさなる」という時、平聲なり。義ひろし、用法明らかなり。但し去聲の時は「ふたたび」なり。又詩に層の字の代りに用いることあり。「碧雲重」など、かさなる活用せぬことあり。又「重瞳子」①は「雙瞳子」②の義なり。

①『史記』項羽本紀贊「太史公曰、吾聞之周生曰、舜目蓋重瞳子。又聞項羽亦重瞳子。」

②李白『登廣武古戰場懷古』「項王氣蓋世、紫電明雙瞳。」

【疊】「かさなる」「たたむ」。亦用法明らかなり。重の字の代りに仄の處に用いる。衣裳をたたむなどに用いる。又道具をしまふことをも「疊起來<sup>デキライ</sup>」という。

【層】級の字、重の字の意なり。但し活用せず。だんだんかさなりたる段のことなり。但し「一層の皮膜」「尚ほ一層を隔つ」などはひとかわなり。

【申】「かさぬる」。形の上に用いず、但し言語をくりかえし、打ちかさぬるに用いる。「申詳」①と連用するにて見るべし。

①『禮記』檀弓下「季子臯葬其妻、犯人之禾、申祥以告、曰、請庚之。」

【累】「かさぬる」「かさなる」。丸きもののかさなりたるなり。「累卵」①「累丸」②など見るべし。それより轉用して、ひろく用いれども、この意をはなれず。冢の多き貌を「累累」③といえるも、異國の冢は土饅頭とて、この方の寶形のごとし、

故にいえり。「重樓累榭」④、又「累基」⑤など用いれども、うすきものを重ねるには用いず。又「累騎」⑥は、しりうまにのることなり。

①『韓非子』十過第十一「故曹小國也、而迫於晉楚之間、其君之危猶累卵也。」

②『莊子』達生「我有道也、五六月、累丸二而不墜、則失者錙銖。」

③『樂府詩集』橫吹曲辭五・紫騮馬歌四「遙看是君家、松柏冢累累。」

④『楚辭』招魂「層臺累榭、臨高山些。」

⑤『戰國策』秦策四「物至而反、冬夏是也、致至而危、累基是也。」

⑥『世說新語』任誕第二十三「仲容借客驢、箸重服自追之、累騎而返、曰、人種不可失。」

【沓】「かさなる」。「重沓」①「沓復」「累沓」「疊沓」など連用す。もと「くつ」という字ゆえ、いれこの意なり。くみ盃を「沓盃」という。

①沈約『石塘瀨聽猿』「不知聲遠近、惟見山重沓。」

【襲】「かさぬる」「かさなる」。衣の一表裏を「襲」というより起る。この方の時服一かさねというとは少しちがひあり。時服一かさねなどは「二稱」なるべし。

【複】【覆】二字通用す。單の反對なり。ふたえなり。故に同じことをうちかえしかさねる意なり。

【襲】「たたむ」なり、「ひだ」なり、「かさぬる」に非ず。「摺」もたたむなり。「扇」はうちわのことなり。日本の扇は「摺扇」なり。「屏」はついたてなり。日本の屏風は「摺屏」なり。

8〇かぬ

兼該攝包 (三、廿八号表)

【兼】「かぬる」というのは、本分の上へほかを一つ加えることなり。「兼官」①「兼帯」にて明らかなり。「兼日」②というは、旅などをするに、二日の路を一日に行くことなり。前方より預めすることに用いるは誤りなり。「兼題」という語など尤も非なり。

- ① 『韓非子』説林上第二十二「公佩僕璽、而爲行事、是兼官也」。
- ② 『論衡』威虚「寒不累時、則霜不降、温不兼日、則冰不釋」。

【該】もろもろをのこさぬことなり。兼に備の意あり。又俗語に「該是」「該當」、皆「そのはづ」ということなり。算書に、六錢を三人にて分ける時、「一人該二錢」といえるも、「二錢づつにあたる」という意なり。又官府語に「該府」「該省」「該院」などというは、皆その事をさばくべき當職をいう。

【攝】「攝政」①「相の事を攝行す」②「官事攝らず」③、皆假りに兼ねる意なり。又「目攝」④は、目づかいて恐すことなり。又「追捕なり」⑤と注す。罪人を召し取ることなり。「鬼攝」⑥は鬼神に魂をとられるなり。淨土の願文の「攝取不捨」⑦も、彌陀に西方へつれゆかれるなり。これらは「かぬる」の訓に非ず。

- ① 『禮記』文王世子「昔者周公攝政踐阼而治、抗世子法於伯禽、所以善成王也」。
- ② 朱熹『論語序説』「孔子年五十六、攝行相事、誅少正卯」。
- ③ 『論語』八佾「管氏有三歸、官事不攝、焉得儉乎」。
- ④ 『史記』刺客列傳第二十六「蓋聶曰、固去也、吾曩者目攝之」。
- ⑤ 『康熙字典』「攝、錄也、追也、捕也」。
- ⑥ 『關尹子』五鑑「心蔽吉凶者靈鬼攝之、心蔽男女者淫鬼攝之、心蔽幽憂者沈鬼攝之、心蔽放逸者狂鬼攝之、心蔽盟詛者奇鬼攝之、心蔽藥餌者鬼攝之」。
- ⑦ 『觀無量壽經』「一一光明徧照十方世界、念佛衆生攝取不捨」。

【包】「かぬる」とよむ。やはり「つつむ」の訓にて明らかなり。包括りてのこさぬなり。該に近し。「該」は一一をのこさぬ意あり、「包」は廣大にて引きくるめる意あり。

- 9〇かがむ
- 屈 僂 矯 揉 撓 反 (四、六号裏)

【屈】「かがむ」「かがむる」。訓の如し。「屈と稱す」とは、冤屈なりとわきよりいわれることなり。

【僂】背のかがまるなり。

【矯】ものまがりをためるなり。矢をためるより出でたる字なり。「詔を矯る」①というは、詔にてもなきを、詐りて救詔なりとなることなり。

- ① 『漢書』佞幸傳第六十三「後果有上書告顯顯命矯詔開宮門」。

【揉】これも「たむる」とよむ、又「もむ」とよむ。手を以てもみ柔らかにして、枉りを直す意なり。

- 【撓】「たはむ」。訓の如し。「棟撓」①「氣撓」。
- ① 『易經』大過「大過、棟撓、利有攸往、亨」。

【反】「そる」とよむ。ひくりかえり、そることなり。病證の「角弓反張」①、論語の「翻として其れ反せり」②にてよくすむなり。

- ① 「角弓反張」とは、うなじが硬直し、腰や背中が後方にむかつて弓なりに

そりかえるような症状をいう。

②『論語』子罕「唐棣之華、偏其反而。豈不爾思、室是遠而。子曰、未之思也。夫何遠之有哉。」

10 ○かるし

輕 輜 佻 (五、十二号表)

【輕】「かるし」。訓の如し。重の反對なり。「かるんず」とはあなどることなり、又易しと思うことなり。おもんずの反對なり。『輕兵』①は輜重を持たぬ軍兵なり。『輕行』②も荷物をもたせぬ旅なり。『輕裝』③もたび支度に重荷のなきことなり。去聲の時、かるがるしきことなり。『輕疾』④と連用す。

①『吳子』論將「善行間諜、輕兵往來、分散其衆、使其君臣相怨、上下相咎、是謂事機」。

②『後漢書』肅宗孝章帝紀第三「皆精騎輕行、無<sub>レ</sub>輜重」。

③傳玄『惟漢行』「危哉鴻門會、沛公幾不還。輕裝入人軍、投身陽火間」。

④『韓非子』亡徵「變編而心急、輕疾而易動發、心悁忿而不訾前後者、可亡也」。

【輜】輕と同義なり。古書に用いたる字なり。

【佻】人がらのかるはづみなることなり。

11 ○かわく

燥 乾 曠 晞 枯 槁 死 涸 (五、十二号裏)

【燥】潤の反對なり。はつく「かわく」ことなり、はしやくなり。

【乾】「かはく」なり。溼の反對なり。燥の字に比すれば、「乾」は汁のかわきたるばかりなり、「燥」はうるおいのはつきたるなり。又ほすことをもいう。「火乾」①は火にてあぶりかわかすなり。「晒乾」は日にほすなり。「陰乾」②はかげほしなり。「乾兒子」③は養子なり。「乾娘」④は養母なり。しるけ「汁氣、うるおい」のなき母子ということなり。

①黃庭堅『發舒州向腕口道中作』「孤村小蝸舍、乞火乾履襪」。

②『抱朴子』仙藥「凡此草芝、又有百二十種、皆陰乾服之」。

③田藝蘅『留青日札』嚴嵩「乾兒門生布滿天下、妖人術士引入禁中」。

④文林『琅琊漫抄』「趙氏乾娘、高皇義父之要也」。

【曠】火日にてほすことなり。乾の字と同義なり。

【晞】露をほすことなり。「髮を晞す」①という字あり。沐浴のことなり。

①『禮記』玉藻「櫛用櫛櫛、髮晞用象櫛」。

【枯】草木の死するをいう。榮の反對、生の反對。

【槁】枯れて乾くなり。

【死】草木の上に用いる時、「かるる」とよむ。枯の字と同じ。

【涸】川水の盡るなり。

12 ○からし

辛辣 苛 蕪 (五、廿七号表)

【辛】「からし」。味のからきなり。訓の如し。「辛苦」①、和語のごとし。

①『左傳』昭公三十年「吳光新得國、而親其民、視民如子、辛苦同之。」

【辣】辛味の甚しきをいう。「辣手段」とは、てひどき手段なり。

【苛】「苛政」①を「からきまつりごと」とよむ。苛の字にからき義あるに非ず、むつかしく細かなる仕置きを「苛政」という。「煩苛」②「苛細」③と連用す。

①『禮記』檀弓下「夫子曰、何爲不去也。曰、無苛政。夫子曰、小子識之、苛政猛於虎也。」

②『漢書』文帝紀第四「漢興、除秦煩苛、約法令、施德惠、人人自安難動搖、二矣。」

③『漢書』季布田叔傳第七「反形未見、以苛細誅之、臣恐功臣人人自危也。」

【茲】「えぐし」。

13〇かっ

勝 克 捷 戡 贏 (六、五十四号裏)

【勝】「かつ」。負の反対なり。廣く用いる。「過勝」①「勝甚」の義にも用いる。まさることにも用いる。

①『呂氏春秋』論威「治亂安危過勝之所在也。」

【克】「かつ」と訓ず。軍に勝ちて、その將卒を取りたるをいう。五行の生尅には「生勝」ともいう。「某の城に克つ」「某の邑に克つ」など、その城邑を攻め落したることなり。勝の字を用いず。

【捷】「かつ」と訓ず。軍にかつなり①。「捷書」②は軍にかちたる注進状なり。「捷音」③はかちたる注進なり。借用して及第したることをも「捷」という。戦に喩るなり。

①『說文解字』十二上「捷、獵也、軍獲得也。」

②杜甫『洗兵馬』「中興諒將收山東、捷書日報清書同。」

③『剪燈餘話』賈雲華遠魂記「早占鼇頭、側耳捷音、與有榮耀。」

【戡】「かつ」と訓ず。「難に戡つ」①「亂に戡つ」②、軍にかちて平らげるなり。

①『南史』列傳第二十七沈慶之傳論「沈慶之以武毅之姿、屬殷憂之日、驅馳戎旅、所在見推。其戡難定功、蓋亦宋之方召。」

②劉峻『辨命論』『文選』卷五十四「觀湯武之龍躍、謂戡亂在神功、聞孔墨之挺生、謂英睿擅奇響。」

【贏】「かつ」と訓ず。俗語に用いる。軍にも博奕角觝の類にも用いる。「贏ち得たり」など、語辭に用いる。

14〇かへる

歸 回 還 旋 廻 反 返 復 (後一、六号表)

【歸】「かへる」とよめども、ほかの「かへる」とよむ字と、義理各別なり。「歸宿」①という字にて見るべし。もといづるところへかへることなり。かえり處の一つあるに使う字なり。「をもむく」とよむ、「きする」とよむも、皆おちつき處へおちつくことなり。されども赴・趣などの「をもむく」とは違ふなり。「赴」「趣」は今おもむく始めをいうなり、「歸」は先の目がけた處へゆきつく意なり。

①『荀子』非十二子「終日言成文典、及綏察之、則偶然無所歸宿。」

【回】元來「まがる」「めぐる」という字なり。凡そまがりたるものは、その本ありてその末のかえられるものなり。故に「回」の字は必ず「ゆきてかえる」の「かえる」なり。でたものがもどつてきたことに使う。「回音」は、手紙をやつた返事がもどつたことなり。

【還】これも元來「めぐる」という字なり。故に「かへる」とよむ。途中よりかえるなどは、多くはこの字を用いる。環の字の巽に従うに見るべし。但し「めぐる」と用いるときは「セン」の音なり。旋と同じ。

【旋】これも元來「めぐる」という字なり。故に「かへる」にも用いる。回・還と同意なり。

【廻】回と同じ。但し反に従うゆえ、人の行歩の上にていう字なり。「回」は人の行歩に限らず。

【反】うらへうちかえす意なり、ひつくりかえす意なり。ゆくの裏はかえるなり、往きてさてとつてかえせばかえるなり。故に「かへる」に用いる。

【返】反と同じ。これも走に従う故、行歩の上に用いる。

【復】「また」とよみ、「ふたたび」とよむ字なり。ゆきたる道をまたふたたびあるくはかえるなり。故に「かへる」とよむ。

15〇かく

鞠 翔 翥 (後一、廿一号裏)

【鞠】【翔】二字ともに鳥の羽をのせてまうことなり。「かけはしる」の「かける」にてはなし。禮に「拱を張るを翔と曰ふ」①。又「穀の賈翔り貴し」②にも用いる。

①『禮記』曲禮上「堂上接武、堂下布武。室中不翔、並坐不橫肱」、鄭注「行而張拱曰翔」。

②『漢書』食貨志第四上「常苦枯旱、亡有平歲、穀賈翔貴」。

【翥】飛びあがることなり。

16〇かく

搔 抓 爬 撓 攪 舁 (後一、二号表)

【搔】【抓】二字とも爪にてかくなり。詩經に「首を搔きて跣躡す」①、禮記に「疾痛苛癢にして、敬しんで之を抑搔す」②、莊子に「一狙有り、委蛇攫抓して、巧を力に見す」③の類なり。又「搔頭」④はかんざしのことなり。

①『詩經』邶風・靜女「靜女其姝、俟我於城隅。愛而不見、搔首踟蹰」。

②『禮記』内則「以適父母舅姑之所、及所、下氣怡聲、問衣燠寒、疾痛苛癢、而敬抑搔之」。

③『莊子』徐無鬼「吳王浮于江、登乎狙之山。衆狙見之、恂然棄而走、逃於深窾。有一狙焉、委蛇攫抓、見巧於王。王射之、敏給搏捷矢」。

④白居易『長恨歌』「花鈿委地無人收、翠翹金雀玉搔頭」。

【爬】大氏搔と同じ。そのうち、かきむしることに用いる。

【撓】【攪】初編にくわし。「撓」は爪にてかきみだすなり、「攪」はかきまわすことなり。膏藥などをかきまわすことなり。

【昇】輿をかくことなり。

17〇かかぐ

挑 掲 褰 擡 (後二、十三号表)

【挑】字のはねを「挑」というなり。又にないあきないを「挑販」という。「挑」は棒にかけること①、「販」はうることなり。物をひつけて、はねおこす意なり、ひつけてあげる意なり。「燈を挑ぐ」②などにて知るべし。皆去聲なり。上聲の時は「いどむ」とよむ。なぶりまわして引いてみる意なり。「挑戦」③というは、あそびごとのように合戦をしかけて、向うをひきおこすことなり。「琴心を以て挑む」④は、琴の唱歌にて、文君が心をちやうらかし「からかふ」引きおこす意なり。

①『増韻』「杖荷也、俗謂肩荷曰挑」。

②岑參『邯鄲客舍歌』「邯鄲女兒夜沽酒、對酒挑燈誇數錢」。

③『左傳』宣公十二年「趙旃求卿未得、且怒於失楚之致師者、請挑戰、弗許、請召盟」。

請召盟。

④『史記』司馬相如列傳第五十七「是時卓王孫有女文君新寡、好音、故相如

繆與令相重、而以琴心挑之」。

【掲】「かかぐる」とよめども、高くひきあげることなり。「竿を掲げて旗と爲す」①、又「日月を掲げて行くが若し」②の類なり。「掲焉」③は高くあがりたるを形容したるなり。又戰國策に「唇掲る者は其の齒寒し」④は、口びるのそりあがりたるなり。又「ケイ」の音の時は、衣のすそをまくりあげることなり。詩經に「淺ければ則ち掲す」⑤、すそをまくりて川をわたることなり。又「になふ」とよむ。戰國策に「馮煖是に于て其の車に乗りて、其の劍を掲【になふ】」⑥、史記に「擔掲而去」⑦の類なり。

①『漢書』陳勝項籍傳第一「斬木爲兵、掲竿爲旗、天下雲合響應、羸糧而景從、山東豪俊遂並起而亡秦族矣」。

②『莊子』山木「昭昭乎如揭日月而行、故不免也」

③張衡『西京賦』『文選』卷二「豫章珍館、掲焉中峙」。

④『戰國策』韓策二「臣聞之、唇掲者其齒寒、願大王之熟計之」。

⑤『詩經』邶風・匏有苦葉「匏有苦葉、濟有深涉。深則厲、淺則揭」。

⑥『戰國策』齊策四「齊人有馮諼者、貧乏不能自存、使人屬孟嘗君、愿寄食門下。(中略)孟嘗君曰、爲之駕、比門下之車客。於是乘其車、掲其劍、過其友曰、孟嘗君客我」。

⑦『史記』滑稽列傳第六十六「時詔賜之食於前。飯已、盡懷其餘肉持去、衣盡汗。數賜繡帛、檐掲而去。徒用所賜錢帛、取少婦於長安中好女」。

【褰】「かかぐ」とよむ。衣裳斗帳をかかげることなり。「帷を褰ぐ」①「裳を褰ぐ」②などなり。

①『後漢書』郭杜孔張廉王羊賈陸列傳第二十一「刺史當遠視廣聽、糾察美惡、何有反垂帷裳以自掩塞乎。乃命御者褰之」。

②『禮記』曲禮上「冠毋免、勞毋袒、暑毋褰裳」。

【擡】「もたぐる」とよむ。もちあげることなり。書法に一字あげてかくを「一字擡頭」といい、二字あげると「二字擡頭」という。又輿などをかくにも用いる。

18〇かふ

買 買 沽 市 糶 (後二、十五号裏)

【買】「かふ」とよむ。しろもの「代物」がえをすることなり。

買 買 沽 市 糶 (後二、十五号裏)



【買】かいてあきないにするなり。故におおがいすることに用いる。

【沽】こがいをすることなり。

【市】かいこんでおくことなり。買・沽・市、大氏同じことに用いることあれども、使いようにて意義わかるなり。

【糶】「米を入るるなり」と注し、米をかいこむことなり①。外ほかに用いることなし。

①『左傳』莊公二十八年「臧孫辰告糶于齊」、正義「買穀曰糶」。

19〇かく

懸掛 繫搭 羅維 羈嬰 鈎羅 (後二、十六号表)

【懸】「かくる」とも、「かかる」ともよむ。絲か繩にて、宙につるすことなり。それより轉じて、絲繩にかぎらず、その外ほかにも用いる。

【掛】針などにかけておくことなり。木の枝などに何ぞかけおくことに使う。それより轉じて、外ほかのことにも用いる。易經に「一を掛けて以て三に象る」①などは、筊竹を指のまたにおくことなり。

①『易經』繫辭傳上「大衍之數五十。其用四十有九。分而爲二以象兩。掛一以象三。揲之以四以象四時。歸奇於扚以象閏。五歲再閏」。

【繫】つなぎつけておくことなり。又屬するという義にも用いる。係と同義なり。

【維】はなれたものをつなぎとめておくことなり。舟をつなぐなどに多く用いる。「維持」①などこと連用す。

①『三國志』魏書・呂布臧洪傳第七「策謀不素定、不能相維持」。

【羈】「ほだす」「つなぎとめる」と訓ず。「つなぐ」とよむ。元來馬のはなかは「鼻革」のことなり①。それより轉じて、つなぎとめて向うへやらぬことに用いる。「人と爲り不羈」②は、人の自由にならぬものをいう。

①『左傳』僖公二十四年「臣負羈絏、從君巡於天下」、杜注「羈、馬羈、絏、馬韁」。

②左思『詠史八首』三『文選』卷二十一「當世貴不羈、遭難能解紛」。

【嬰】「かかる」とよむ。ひきまとわるる意なり。故に「病に嬰る」①など用いる。

①『後漢書』黨錮列傳第五十七「道近路夷、當即聘問、無狀嬰疾、闕於所仰」。ひきまとはるる

【權】「かかる」とよむ。あみにかかるなり。故に禍にあうことにも、病にも用いる。

【鈎】「かくる」とよむ。かぎにかけるなり。「簾を鈎す」①というも、簾をかぎにかけることなり。又「石角、衣に鈎て破る」②というも、石のかどにてかぎさきすることなり。

①杜甫『舟月對驛近寺』「皓首江湖客、鈎簾獨未眠」。

②杜甫『奉陪鄭駙馬章曲』一「石角鈎衣破、藤杖刺眼新」。

【搭】ものの端をかけることなり。衣服などを物にかけるにも用いる。紙のはしとはしとをかけるなどに用いる。搭と同じ。白居易詩に「熏籠亂搭繡衣裳」①などなり。

①白居易『石楠樹』「傘蓋低垂金翡翠、熏籠亂搭繡衣裳」。

20 かまびすし

喧嘩 囁 聒 囁 聒 (後三、十一号表)

【喧】【嘩】【囁】 誼・譁・謹にも作る。三字とも「かまびすし」とよむ。大氏同じことに使う。然れども少しのちがいあり。「喧」は大こえをあげて、われがちにやかましくいうことなり。「嘩」はくちぐちにやかましくいたてることなり。「囁」はざわざわと人こえのにぎやかなるなり。「喧嘩」①「喧呼」②「譁該」③「囁喧」④「囁譁」⑤など連用す。喧・嘩、多く相通じて用いること多し。

①『史記』袁盎鼂錯列傳第四十一「錯所更令三十章、諸侯皆喧嘩疾鼂錯」。

②『尉繚子』治本「焉有喧呼酖酒以敗善類乎」。

③『晉書』列傳第一后妃上惠羊皇后「今上官已犯闕稱兵、焚燒宮省、百姓喧嘩、宜鎮之以靜」。

④謝靈運『王子晉贊』「王子愛清淨、區中寔囁誼」。

⑤韓愈『招揚之采』「囁譁所不及、何異山中間」。

【聒】 耳のそばにくいつきたるように、やかましくことなり。

【囁】 やかましくさわがしき意なり。故に左傳に「囁塵」①などと用いる。

①『左傳』昭公三年「初、景公欲更晏子之宅、曰、子之宅近市、湫隘囁塵、不可以居、請更諸爽塬者」。

【聒】 ロゴウしやうに、やかましく、道理もなきことをいう。きおいをいうことなり。

21 〇かふ

飼 餒 畜 養 牧 哺 育 參 頤 鞠 孳 餌 (後三、十八号裏)

【飼】 飼・飴と同じ。鳥獸に餌をかうという字なり。又人に食物をあたえることにも用いる。やはり餌をかう意なり。「介子推、股肉を割き、以て文公に飴しむ」①、又「王薈、饘粥を作りて以て餓者に飴す」②などの類なり。小兒などをやしなうことにも用いる。

①東方朔『七諫』怨世「子推自剖而飴君兮、德日忘怨深」。

②『晉書』列傳第三十五王薈「時年饑粟貴、人多餓死、薈以私米作饘粥、以飴餓者、所濟活甚衆」。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【餒】 飼と同義なり。禮記に「季春、獸を餒ふの薬は、九門に出づる母れ」①などの類なり。何にても鳥獸にはましむることに用いる。但し餒の字は鳥獸に限るなり。

【畜】 かいそだてることなり。元來畜類より出でたる字にて、それより轉用して、人のことにも使う。易經に「臣妾を畜ふ」①、又「民を容れ衆を畜ふ」②、大學に「馬乘を畜ひ、牛羊を畜はず」③、又「聚斂の臣を畜へず」④。

①『易經』遯「九三、係遯。有疾厲。畜臣妾吉」。

②『易經』師「象曰、地中有水。師。君子以容民畜衆」。

③『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

④『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

⑤『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

⑥『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

⑦『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

⑧『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

⑨『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

⑩『禮記』大學「孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。

【養】畜と同義なり。但し畜は「とどむる」「たくはふる」とよむ字ゆえ、かつておく意なり。「君、生を賜るに必ず之を畜ふ」の類なり。「養」はただやしなうという字ゆえ、やしなつてやる意なり。

①『論語』郷黨「君賜食、必正席先嘗之。君賜腥、必熟而薦之。君賜生、必畜之。侍食於君、君祭先飯。」

【牧】牛羊馬などをかうことなり①。「まき」ともよむ。野へつれて行きて、草などかうことなり。それより轉じて、民をおさめることをも「民を牧す」②ということなり。又諸侯を「牧」という③も、民をやしなうゆえなり。「人牧」④なども同じことなり。

①『説文解字』「牧、養牛人也、从支牛。」

②『管子』牧民第一「凡有地牧民者、務在四時、守在倉廩。」

③『禮記』曲禮下「九州之長、入天子之國曰牧」、鄭注「每一州之中、天子選諸侯之賢者、以爲之牧。」

④『孟子』梁惠王上「今夫天下之人牧、未有不嗜殺人者也。」

【哺】ものをくくめて「口にふくむ」くわせることなり。

【育】やしないてそだてることなり。「養」よりはこえさせる、そだてる意なり。食に従うと肉に従うのわかちなり。

【豢】「穀を以て圉豕を養ふ」①とあり。おりに入れて上餌をかうことなり。莊子に「豢こと三月」②、豢と同じ。又圉にも作る。禮記に「君子は圉腴を食さず」③。

又けものを入れる牢をもう。前漢に「豕、圉を出る」④などなり。又左傳に「是れ呉を豢にするかな」⑤、これは餌と同意なり。又「豢龍」⑥は古の官名なり。元來奉の省に従うゆえ、手に食物をのせてくわせることなり。

①『説文解字』「豢、以穀圉豕也、从豕夬聲。」

②『莊子』達生「汝奚惡死。吾將三月豢汝、十日戒、三日齋、藉白茅、加汝肩尻乎雕俎之上、則汝爲之乎。」

③『禮記』少儀「凡羞有俎者、則於俎內祭。君子不食圉腴。小子走而不趨、舉爵則坐祭、立飲。」

④『漢書』五行志第七中之下「昭帝元鳳元年、燕王宮永巷中豕出圉、壞都竈、銜鬴六七枚置殿前」、注「師古曰、圉者、養豕之牢也。」

⑤『左傳』哀公十一年「吳將伐齊、越子率其衆以朝焉、王及列士皆有饋賂。吳人皆喜、唯子胥懼、曰、是豢與也夫。」

⑥『左傳』昭公二十九年「帝賜之姓曰董、氏曰豢龍、封諸鬲川、鬲夷氏其後也。」

【頤】養と同義なり。おとがいは食を受けるところなり。ゆえにやしなう義あり。易經に「頤に頤の吉」①などなり。「頤養」②と連す。

①『易經』頤「六四、頤頤、吉、虎視眈眈、其欲逐逐、無咎。」

②『漢書』食貨志下第四「酒者天之美祿、帝王所以頤養天下、享祀祈福、扶衰養疾。」

【鞠】養と同義なり。掬の省に従う字ゆえ、手にだきあげてそだてる意なり。「養」よりは一だん心切なる方なり。詩經に「母、我を鞠す」①、又書經に「鞠人」②など、會すべし。「鞠養」③と連す。

①『詩經』小雅・谷風之什・蓼莪「父兮生我、母兮鞠我。拊我畜我、長我育我。」

②『書經』盤庚下「朕不肩好貨、敢恭生、鞠人謀人之保居、敘欽。」

③『後漢書』劉趙淳于江劉周趙列傳第二十九「早失母、同產弟原鄉侯平尚幼、紆親自鞠養、常與共臥起飲食。」

【**孳**】そだてあげることなり。成長させる意なり。「**孳育**」①「**孳養**」②「**孳息**」③と連す。

- ①『**晉書**』樂志「羽之爲言、舒也、言陽氣將復、萬物**孳育**而舒生也。」
- ②陸龜蒙『**南涇漁父**』「大小參去留、候其**孳養**報。」
- ③白居易『**唐故虢州刺史贈禮部尚書崔公墓誌銘**』「公既下車、盡焚其籍、**孳息**貨易、一無所問。」

【**餌**】訓のとおり。それより人に利分をとらせ、だましてつりだすことに使う。

22〇かへりみる

顧省 眇（後三、廿八号裏）

【**顧**】「かへりみる」。訓のとおりなり。ふりかえりて、後ろをみることなり。故に君の目みせ「おぼえ」のよきを「**恩顧**」①という。高位の人の我が方へきたりたるを「**枉顧**」②「**左顧**」③という。又「をもふ」とよむときも、立ちもどりて思案するといふ意なり。

- ①『**舊唐書**』后妃上楊貴妃「然貴妃久承**恩顧**、何惜宮中一席之地。」
- ②『**三國志**』蜀書・諸葛亮傳「此人可就見、不可屈致也、將軍宜**枉顧**之。」
- ③『**左傳**』昭公二十四年「余**左顧**、而效乃殺之。」

【**省**】「かへりみる」とよむ。ふりかえりみるにてはなし、みまわりであることなり。故に「**省察**」①「**檢省**」②「**省識**」③と連属す。又親に事える法に、「晨に**省**み昏定す」④ということあり。朝とく起きて、何事もござらぬかといいて、親の處へ見廻りにゆくことなり。それより師や親の方へみまわりを「**省**す」といふ。又「**自省**」というも、わがでに「**自分自身**で」我が身の内をみまわりであるく意なり。又「**自省**」より取り用いて、悟ることを俗語に「**省**す」といふ。

- ①『**漢書**』谷永杜鄴傳第五十五「唯陛下**省察**熟念、厚爲宗廟計。」
- ②『**新唐書**』列傳第九十八裴度「今因告訐而**檢省**其私、臣恐天下將帥聞之、有以家爲計者。」

- ③杜甫『**詠懷古跡**』三「**畫圖省識**春風面、環珮空歸月夜魂。」
- ④『**禮記**』曲禮上「凡爲人子之禮、冬溫而夏清、昏定晨省、在醜夷不爭。」

【**眇**】「かへりみる」とよむ、「ながしめ」ともよむ。横目をつかうことなり。顧よりかるし。「**顧眇**」①と連す。

- ①『**列子**』力命第六「窮年不相**顧眇**、自以時之適也。」

（待續）